



Title	阪大日本語研究. 別冊
Author(s)	
Citation	阪大日本語研究. 別冊. 2001, 1, p. 1-144
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/8724">https://doi.org/10.18910/8724</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 刊行にあたって

この度『阪大日本語研究 別冊1号』を発刊することとなった。

『阪大日本語研究 別冊』刊行の重要な目的は、今年度以降日本語学講座に提出された博士論文、修士論文のうち、特に優れたものであり、分割した複数の論文のかたちでは成果を発表しにくいものに対して、その成果全体を公にする機会を提供することである。日本語学講座教官全員の審査によって該当する論文が認められ、かつ本人の希望があれば掲載することになる。

今年度、八亀裕美論文が修士論文としてきわめて高い評価を得たので、ここに掲載することにした。この論文の内容については、「要旨」において本人自身が適切にまとめていいるが、従来の「属性形容詞」か「感情・感覚形容詞」かという形容詞分類の限界を乗り越えて、新たな形容詞論のパラダイムを提示しようとした野心的なものである。ロシアを含めて欧米における類型論的研究を視野にいれた日本語の形容詞論として注目されるが、実際のテクスト（談話）における形容詞述語の使用実態へのきめこまやかな目配りも忘れてはいない。形容詞論にとって本質的な装定用法の問題は扱われていず、当然まだ荒削りな面もあるが、今後の進展が期待されるものである。

冒頭に述べたように『阪大日本語研究 別冊』は、不定期刊行物として位置づけているが、来年度以後も続行できるよう、広さの面でも深さの面でも言語研究の新しい視界を照らしだす野心的な論文の出現を、日本語学講座教官一同期待している。

2001年2月

日本語学講座平成12年度世話教官

工藤眞由美



## ＜要旨＞

現代日本語の形容詞述語文について、類型論との連携を視野に入れつつ、時間的な側面に注目して記述した。

本論文の特徴としては、

- ① 「動詞～形容詞～名詞」の連続相の中で、形容詞という品詞を捉える。
- ② 「時間的局所限定」という意味的カテゴリーを用いる。
- ③ すべての形容詞述語文に「認識レベル」「評価レベル」という意味的な二重構造を認める。

という三点があげられる。

本論文は二部構成となっている。第一部では方法論を提示し、第二部ではその方法論に基づいて具体的に現代日本語の形容詞述語文を観察・記述した。

第一部では、方法論を提示した。記述に先立って理論的な部分を示すことは、内省に頼った理論先行型の研究のように誤解される恐れがあるが、本論文が目指すのは、あくまでも実例を中心においた記述研究である。形容詞述語文を記述するには、まだまだ方法論が確立されていない。そこで、どのような形で、またどのような順序で記述を進めるべきかを、まず確認した。「実際に収集した用例をどう分けるか」、「連続相をなしているグレーディングをどのように腑分けすればいいか」について、試行錯誤を繰り返した結果、ひとつの試案として提示するのが、第一部で示した方法論である。

第二部では、第一部で確認した方法論に基づいて、実際に集めた用例を中心に、どのようなことが観察されるかを記述した。時間的な側面を中心に、形容詞述語文をめぐるさまざまな問題を指摘した。

結論として（第8章で）、①「時間的局所限定」の重要性 ②形容詞述語文における「評価」の重要性 ③「現在」「過去」「未来」の非等質性 の3点を確認した。さらに、今後の課題として、談話論的アプローチの必要性と有効性について、見通しを述べた。最後に、形容詞分類への提言をおこなって、類型論へのつながりを再度確認して結びとした。

従来、日本語の形容詞は同じ「用言」である動詞に従属するものとして扱われることが多かった。しかし、本論文では、動詞研究の結果を踏まえつつも、その違いを明らかにして、通言語的な形容詞研究に繋がる新しい記述の方向性を提示した。



# 目 次

0.	はじめに.....	1
0.	1 本研究の目的.....	1
0.	2 日本における形容詞研究史.....	1
0.	2. 1 概観	
0.	2. 2 近年の研究の流れと問題点	
0.	3 基本的な立場.....	4
0.	3. 1 「裝定用法（連体）」と「述定用法（終止）」	
0.	3. 2 類型論的視点	
0.	3. 3 用語についての覚え書き	
0.	4 本論文の構成.....	8

## 第一部 方法論編 —適切な記述のために

1.	「動詞～形容詞～名詞」の連続相 .....	14
1.	1 前提となる理論.....	14
1.	1. 1 ギボン「time-stability scale」	
1.	1. 2 レーマン「aspectual type(s)」	
1.	1. 3 ヴェツァー・スタッセン「tensedness hypothesis」	
1.	1. 4 その他の理論	
1.	2 日本語における連続相.....	17
1.	2. 1 仮説としての連続相のあり方	
1.	2. 2 本論文の焦点	
2.	「属性表現」の連続相を記述するために .....	22
2.	1 「一時的属性表現」と「恒常的属性表現」 .....	22
2.	2 先行研究—「形容詞のテ nsis論」から見えてくるもの.....	24
2.	3 記述に必要な道具立て試案.....	25

3.	記述に際して確認しておくべきこと	31
3. 1	研究の対象とする表現	31
3. 2	「属性主」と「属性」	32
3. 2. 1	動詞述語文と形容詞述語文	
3. 2. 2	「属性主」の表れ方	
3. 2. 3	「属性」について	
3. 3	形容詞述語文の「主觀性」	36
3. 3. 1	形容詞述語文の「評価者」	
3. 3. 2	「属性主」としての「評価者」	
3. 4	「認識レベル」と「評価レベル」	39
3. 4. 1	二つのレベルと過去形の表れ方	
3. 4. 2	「非過去形でも過去形でもいい」と言われる表現の本質	
4.	第一部のまとめ	47

## 第二部 記述編

5.	《特性》を表す表現	58
5. 1	時間的局所限定について	58
5. 1. 1	時間的局所限定とテンス対立	
5. 1. 2	形態論的に時間的局所限定を明示する言語・方言の例	
5. 2	いわゆる「脱時間」表現	61
5. 2. 1	典型的な「脱時間」表現	
5. 2. 2	「評価レベル」と「脱時間」の関係	
5. 2. 3	他品詞を述語に持つ「脱時間」表現	
5. 3	テンス対立を持つ《特性》表現	66
5. 3. 1	「属性主」の性質とテンス対立	
5. 3. 2	現在の《特性》表現	
5. 3. 3	過去の《特性》表現	
5. 3. 4	未来の《特性》表現	

5. 4 名詞述語文との連続面	75
5. 5 本章のまとめ	78
6. 《状態》を表す表現	83
6. 1 再び時間的局所限定について	83
6. 2 《特性》か《状態》か—連続面の問題	84
6. 3 「個」を「属性主」とする《状態》表現	87
6. 3. 1 現在の《状態》表現	
6. 3. 2 テンス対立の2つのポイント	
6. 3. 3 過去の《状態》表現	
6. 3. 4 未来の《状態》表現	
6. 4 動詞述語文との連続面	104
6. 4. 1 静態動詞を述語とする文	
6. 4. 2 内的情態動詞を述語とする文	
6. 5 本章のまとめ	108
7. 第二部のまとめ	112
8. 結論	121
8. 1 本論文で明らかになったこと	121
8. 2 本論文の限界と今後の課題	126
8. 2. 1 談話的アプローチ—裝定用法と述定用法	
8. 2. 2 形容詞分類への提言	
むすびにかえて	132
用例出典	135
参考文献	136



## 0章 はじめに

### 0. 1 本研究の目的

日本語の形容詞について、さらには形容詞をめぐるさまざまな問題について、類型論（タイプロジー）との連携を視野に入れつつ、包括的かつ体系的に記述することが筆者の最終的な目標である。

動詞、名詞とならんで三大品詞といわれながら、従来の研究において、形容詞の研究は必ずしも十分ではなかった。そこには、さまざまな原因が考えられるが、より基本的な品詞である動詞と名詞の研究の深化を待っていた、という面がある。文法研究史全体を概観するだけの準備は今は無いが、ここ数年の、なかでも動詞研究の急速な進展によって、動詞述語文の様々な側面が明らかになってきた、という点については、衆目の一致するところであろう。動詞・名詞に比べて二次的な存在である第三の品詞—すなわち形容詞—の研究を本格的につか体験的に行えるだけの段階に文法研究全体が到達しつつあるように思われる。

本論文では、動詞研究によって急速に進展した predication の研究を受け、形容詞研究の第一段階として、現代日本語の形容詞述語文について、特にその時間的な性質にスポットをあてて記述をおこなう。

本章では、これまでの研究史を概観することで問題点を確認し（0. 2）、本論文の位置づけを行い、また本論文の基本的立場を確認する（0. 3）。最後に、本論文の構成について触れる（0. 4）

### 0. 2 日本における形容詞研究史

#### 0. 2. 1 概観

日本語の形容詞を研究しようと考えた第一の動機は、その研究の遅れにある。同じ「用言」とされる動詞の研究の急速な発展を考えると、遠く後方に残されている觀が否めない。なぜ、これほどの差ができるのだろうか。まずはその原因をさぐることから始めてみたい。

そもそも形容詞の研究は、そのスタートが遅かったと言われている。そこで、最初に研究史を概観しておくと以下のようになる。研究史の概観にあたっては、本来は、一次資料

にすべて目を通すべきであるが、今のところまだ部分的にしか目を通すことができていない。以下の記述は、飯田（1984）に負うところが大きい。

中古・中世に日本語研究の基盤となったのは歌論や連歌論の世界であるが、その中心は「てにをは」研究で、形容詞については「し文字問題」として、その判別が問題にされるにとどまり、「形容詞」という品詞について格別の興味が示されることはなかった。極端に言えば、「形容詞未発見時代」である。例外的にキリストン文献の中で日本語の形容詞の「用言的性質=単独で述部にたつこと」が注目されたが、それが日本の文法研究史に直接影響を与えることはなかった。

近世に入り、漢学との関係で「形状言」というかたちで日本語の形容詞がようやく一つの品詞として認識されるようになってきた。ここにおいて形容詞はようやく「発見」されたとも言える。すでに「カリ活用」についての指摘や、現在形容動詞と呼ばれる語との隣接性の指摘などがみられたが、若干の例外を除き（東条義門 1836『山口栄』など）包括的な記述は行われなかった。

近代に入り、洋式文典の登場によって、ようやく「形容詞」が文法上の問題点として浮かび上がってくる。印欧語の形容詞が overt なコピュラを伴わずに述部に立つことがないのに対して、日本語の形容詞は単独で述語となることから、「形容詞」と呼んでよいかが問題となったのである。しかし、議論はそれほど高まりを見せず、形容詞は動詞と並んで「用言」と認定され、以後、形容詞論は動詞論の一部分となり（「ある」などと同じ状態性の述語として）、従属的に扱われることが多かった。

一方で、いわゆる「形容動詞」については、その品詞としての認定を巡ってさまざまな立場が提示されてきた。その議論の概観については水谷（1952）などに詳しいのでここでは省略する。今日では形容詞の一つのタイプとして「ナ形容詞」などと呼ばれていることが多いが、所属する語の認定はかなり微妙な問題であるにもかかわらず、近年はその問題が等閑視されている嫌いがある。

このような研究史を背景として持つ形容詞研究は、1972 年の国立国語研究所の報告『形容詞の意味用法の記述的研究』（担当 西尾寅弥）の発表前後を期に新たな時代を迎える。しかし、この報告は『動詞の意味用法の記述的研究』（担当 宮島達夫）の姉妹版であるにもかかわらず、その評価は残念ながら動詞論ほど高くはない。その理由については西尾自身が書中で分析も試みているのだが、なぜ形容詞研究は動詞研究よりも難しいのだろうか。また動詞では有効であった分析法がなぜ形容詞には効力を発揮しなかったのだろうか。節を改め、その理由を考えながら、形容詞研究のとば口を探してみたい。

## 0. 2. 2 近年の形容詞研究の流れと問題点

近年の形容詞研究には大きく二つの流れがあるようと思われる。[注1]

- ①形容詞全体を扱い、分類を試みる論
- ②形容詞を含む特定の構文をトピック的に扱う論

②の中にも興味深い現象の指摘はたくさん見られるのだが（形容詞移動、二重主語構文、比較構文など）、ここでは形容詞の総論となる①に注目して、その現状を把握してみたい。

前節で問題となった西尾の報告書はもちろん①に属することとなるのだが、形容詞分類には、古典語の研究を通じて注目された一つの大きな軸が存在している。それは、

$$\left\{ \begin{array}{l} ク活用 = 属性形容詞 \\ シク活用 = 感情形容詞 \end{array} \right.$$

という二分法である。西尾の報告書を始め、現在示されている形容詞の分類の大半は、この二分法の改訂版であるといってよい。さまざまな意味的な違いや統語的な振る舞いの違いが抽出され、代表的なものとして次のような分類が提示されている。

$$\left\{ \begin{array}{l} 2分法 西尾 (属性・感情) \\ 3分法 仁田 (属性・感情・評価) \\ \quad 寺村 (感情表現・感情性状規定表現・性状規定表現) \\ 4分法 山口 (性状・評価・感覚・感情) \\ \quad 細川 (A・B1・B2・C) \end{array} \right.$$

一方で、これらと全く異なった軸を導入し、形容詞を分類する試みが言語学研究会から提示されており、興味深い。荒（1989）や樋口（1996）に見られる「状態形容詞・質形容詞」という分類である。これは、「形容詞が表す属性が一時的なものか、恒常的なものか」に注目した分類で、今までの形容詞分類の枠を一新した意欲的な取り組みである。[注2]

これらの分類的な研究はそれぞれに形容詞のある側面を如実に表しており、示唆に富るものであるが、どこかで歯切れの悪さをかかえていることも否めない。その原因はどこにあるのだろうか。

いくつか原因が考えられるだろうが、まず第一に、形容詞の「連体用法」と「終止用法」を区別していないところに混乱の種があるのでないだろうか。同じ形容詞であっても、「連体」と「終止」では、その語彙・文法的な性質がかなり異なる。このことは、動詞研究ではすでに自明のことだが、形容詞の場合は、「連体用法が基本である」「自動詞と同様に扱える」という二つの先入観があいまって、「連体」も「終止」も同等に扱ってきた弊害からか、従来あまり問題視されてこなかった。したがって、形容詞分類のテストフレームの多くが、「連体」「終止」どちらも視野にいれたテストとなっており、このことが形容詞の本質解明を遅らせる結果になっているように思われる。この二つを分けて考えることで、従来の形容詞研究の混乱の原因の一端が解明できるのではないだろうか。

以下、この点も含めて、形容詞研究に当たっての基本的な立場を明らかにしていきたい。

### 0. 3 基本的な立場

#### 0. 3. 1 「裝定用法（連体）」と「述定用法（終止）」

従来の研究では、日本語の形容詞が印欧語の形容詞とちがい、単独で述語となる性質ばかりが注目されてきた嫌いがあるが、一般言語学的に見て必ずしも日本語の形容詞は「特殊」なものではない。これについては、後でも触れるところではあるが、一般言語学での形容詞のあり方にも注目して、個別言語学として日本語の形容詞のあり方を相対化していく視点は大切だろう。

このように考えるとき、まず三大品詞である「動詞」「形容詞」「名詞」の基本的な機能は、多くの言語研究者が指摘するように、

動詞	= prediction	
形容詞	= modification	
名詞	= reference	Bhat(1994)など

ということであろう。

となると、形容詞の基本的な性質は規定語としての「裝定用法」で表れることになる。そして、「述定用法」では、本来の形容詞らしさを喪失し、動詞らしさを獲得している可能性がある。

このあたりは、慎重に議論を進める必要があるのだが、今、極めて議論を単純化すると、「裝定用法」では「本来の形容詞らしさ」である「恒常的な属性を表す」傾向が強まり、逆に「述定用法」では「動詞らしさ」を獲得し「一時的な感情・判断を表す」傾向が強ま

る（あくまでも傾向であり、それしか表さないというのではない）、ということである。少し具体例を見てみよう。

- ・楽しい話=誰にとっても、いつでも「楽しい」話  
→暗くて怖いから何か楽しい話をしてよ。 [感情形容詞・連体]
- ・白い建物=誰が見ても・いつでも「白い」建物  
→駅前の白い建物の前で待っていてください。 [属性形容詞・連体]
- ・この話は楽しい=現在の話し手にとって「楽しい」と感じられる話。  
→彼にはつらい体験だったかもしれないけど、この話は楽しいね。  
[感情形容詞・終止]
- ・この建物は白い=現在の話し手にとって「白い」と感じられる建物。  
→灰色のビルの前で待ってるって言わなかっただ？この建物は白いよ。  
[属性形容詞・終止]

英語の形容詞にも同様の傾向があることが、中村（1976）などでも指摘されている。こうしてみると、従来言われてきた「属性・感情／恒常的・一時的」などの性質は、形容詞の文中での位置によって変化することになり、やはり「装定用法」と「述定用法」は分けて記述されるべきだと考えられる。

そこで、本論文では、まず日本語の形容詞述語文について、その統語的性質を綿密に記述していくこととしたい。本来なら、形容詞の基本用法である「装定用法」から記述に着手すべきかもしれないが、次の節で見る「連続相」の記述においては、まず「述定用法」について確認することが不可欠でもあり、また、研究の進んでいる動詞述語文との比較・対照を進める意味でも、まずは形容詞述語文についてきちんと記述を進めておきたい。

### 0. 3. 2 類型論的視点

すでに述べてきたように、日本語の形容詞は様々な問題をかかえているのだが、これは日本語だけの問題ではない。英語においても、問題点の多い品詞と考えられており（Quirk et al.1985 など）、さらに類型論においても問題の多い品詞であることが指摘されている（詳細は次章で確認する）。Givón は形容詞を 'notorious swing-category' Givón (1979:13) と呼んだが、いわゆる三大品詞のうち、「動詞」と「名詞」はほとんどの言語でその存在が確認できるのにもかかわらず、形容詞は必ずしも品詞として

存在するとは限らない。いわゆる ‘property concepts’ を名詞で表す言語や動詞で表す言語もある。

この視点から見て、日本語の形容詞はどのように考えられるのだろうか。確かに品詞としては存在しているが、所属する語数は貧弱である。一つの基準として、Dixon(1977:31)が提示する ‘basic members’ と比較をしてみよう。Dixon は形容詞として表れることの多い基本的な概念として次の 7 つをあげている。

Dixon(1977) の basic members

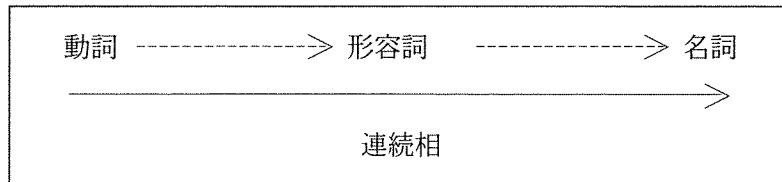
- 1 DIMENSION…big, large, little, small, long, short…
- 2 PHYSICAL PROPERTY…hard, soft, heavy, light, hot, cold…
- 3 COLOUR…black, white, red…
- 4 HUMAN PROPENSITY…jealous, happy, kind, clever, generous, proud, cruel…
- 5 AGE…new, young, old…
- 6 VALUE…good, bad, delicious, excellent…
- 7 SPEED…fast, quick, slow…

この 7 項目に、日本語の形容詞を当てはめて考えてみると、必ず一語は該当する形容詞を指摘することができる。しかし、対義語が他品詞にまたがることもある。

- ・若い ⇔ 年老いた
- ・すばらしい ⇔ 劣っている

こうして見てくると、一般言語学を視野に入れ、類型論との繋がりを目指そうとするなら、日本語の形容詞問題を考える時には、いわゆる「形容詞（イ形容詞）」だけをとりだして観察するのではなく、隣接する「動詞」「名詞」との関連を常に視野にいれておく必要があることがわかる。したがって、本研究では Givón の考え方方に依拠し（詳細は次章参照）、形容詞を次のように認識するところからスタートする。

- ・形容詞をスイングカテゴリーとして認識し、動詞と名詞との間で「連続相」をなすものとして捉える。



もちろん、日本語の形容詞の他品詞との連続性は従来も部分的には指摘されているのが、本研究では、この立場を基本的な立脚点として確認することで、動詞研究に比して混乱している形容詞研究、とくに形容詞述語文の研究を捉えなおしてみたい。

以上の基本的立場をまとめると、次の 2 点となる。

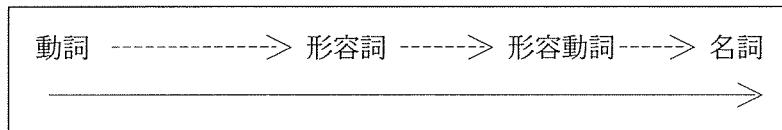
- ①「述定用法」を「裝定用法」と分け、「述定用法」から記述する。
- ②「類型論的視点」を取り入れ、「動詞～形容詞～名詞」の連続相の中で捉える。

### 0. 3. 3 用語についての覚え書き

#### <「形容動詞」について>

先に研究史を概観したところでも多少触れたが、いわゆる「形容動詞」については、その品詞の認定のあり方をめぐって議論が分かれている。そこで、本研究での「形容動詞」の扱いについて、ここで少し述べておきたい。

前節で確認した「連続相」としての形容詞認識に基づいて考えるとき、「形容動詞」はいわゆる形容詞（イ形容詞）と名詞との間に位置づけられることが予想される。



形容詞述語文を類型論的に扱った Wetzer(1996:47)も、日本語について同様の図式を提案している。そこで、このような予想をもとに、名詞述語文との連続のありかたについて注目しながら進めていくこととしたい。

以下、特に断らない限り、「形容詞」とは「狭義形容詞」と「形容動詞」を含む。特に区別する必要がある場合は「形容動詞」をそのまま用いることにする。品詞としての独立性については、問題が顕在化するのは連体用法を扱うときであろう。そこで充分な議論を

することとして、終止用法を扱う間は、その品詞の認定問題には深く立ち入らない。

#### <その他の用語全般について>

本論文の基本的な用語は、原則として言語学研究会、特に奥田靖雄の一連の研究（ことに文論）に拠っている。これは、現代日本語の研究において、動詞論から名詞論までを視野に入れた用語規定を行っている研究が他にないためである。例えば「状態」という用語を使うとき、動詞だけ見ている場合と名詞まで視野に入れている場合ではその扱いの慎重さに大きく差が出てくる。

また、欧米の文献一中でもヨーロッパの文献一を押さえ、一般言語学における時間論と矛盾しない議論を行っているのは、日本では言語学研究会ではないかとも思われる。類型論との連携を視野に入れている以上、用語の面でも無理のない体系性を保持しておきたい、との思いから、このような用語を用いることにした。

本論文で、最も混乱を呼びそうのが、「属性」の定義である。従来の形容詞論では、「属性形容詞・感情形容詞」の二分法が定着しているが、本論文の「属性表現」は、類型論でいう *property expression*（これも多少ゆれがあるが……）に相当し、全ての形容詞述語文をカバーする術語として用いている。したがって、本論文では

- この木は大きいねえ。
- 私、淋しい。

は、いずれも「属性表現」であり、「この木・私」は共に「属性主」で、「大きい・淋しい」は共に「属性」である。感情形容詞にもこの術語を用いることは、混乱を招くことにもなろうが、本論文では、従来の形容詞分類の枠を一度離れて、形容詞述語文を記述し、最後に再度分類について考えるという順序をとるので、どうしてもこのような術語を用いる必要があった。注意をして読んでいただければ幸いである。

#### 0. 4 本論文の構成

本論文は二部構成となっている。第一部では方法論を提示し、第二部ではその方法論に基づいて具体的に現代日本語の形容詞述語文を観察・記述する。

第一部は、方法論を提示する。必然的にかなり理論的になっている。記述に先立って理論的な部分を示すことは、内省に頼った理論先行型の研究のように誤解される恐れがあるが、本論文が目指すのは、あくまでも実例を中心においた記述研究である。ただし、形容詞述語文をきちんと記述するには、まだまだ方法論が確立されていない。そこで、どのような形で、またどのような順序で記述を進めるべきかを、まず確認しておく必要があるだろう。第一部をまとめるにあたっては、実際に収集した用例をどう分けるか、との格闘があった。連続相をなしているグレーゾーンをどのように腑分けすればいいか、試行錯誤を繰り返した結果、ひとつの試案として提示するのが、第一部で示した方法論である。

まず第1章では、「動詞～形容詞～名詞」の連続相について、類型論での仮説をいくつか提示する。これらは相互に関連しており、Givón の仮説を出発点として発展した論である。さらに、これらを受けて、日本語の連続相について作業仮説を提示する。

次に第2章では、形容詞述語文が表す「属性表現」の連続相に重点をおいて、この部分を記述するのに必要な道具立てを模索する。ここで、形容詞述語文の連続相を記述するにあたっては、①「属性主」のタイプ ②時間的局所限定の有無 の、2点に注目する必要があることを確認する。

第3章では、記述にあたって確認が必要な点について、「動詞述語文との違い」に重点を置いて確認を行う。ここでは、形容詞述語文の主観的な側面—すなわち評価的な側面—が、いかに記述にあたって重要になるかを強調することになる。

第4章は第一部のまとめである。

第二部では、ここまでで確認した方法論に基づいて、実際に集めた用例を中心に、どのようなことが観察されるかを記述する。形容詞述語文をめぐるさまざまな問題を指摘することになるが、時間的な側面を中心に、観察・記述を行う。従って、それ以外の問題については、あまり理論的な説明を行っていない。それらの問題は、今後の課題としておきたい。

第5章では、時間的局所限定のない《特性》表現を中心に据えて記述を行う。まず、時間的局所限定について、定義的な確認をしたうえで、最もポテンシャルである「脱時間表現」について記述し、その後、テンス対立のある《特性》表現について記述する。記述にあたっては、グラデーションをなすことを念頭において、どのような場合にアクチュアル性が増すのかを整理していく。そして、これらと連続的な関係にある名詞述語文について、佐藤（1997）の記述を参照しながら、その連続面を概観する。

第6章では、時間的局所限定のある《状態》表現を中心に据えて記述を行う。まず、再

度時間的局所限定について、《特性》と《状態》の連続面に触れながら考える。その上で、現在の《状態》表現をとりあげ、どのような場合にポテンシャル性が増すかを観察・記述する。そして、テンス対立の二つの基準について考えた後、過去・未来の《状態》表現について記述する。最後に、これらと連続する動詞述語文について、先行研究の記述（工藤（1995））を参照しながら、その連続面を概観する。

第7章は第二部のまとめである。

第8章では、結論として、本論文で明らかになったことを「時間的局所限定」の重要性と、形容詞述語文における「評価」の重要性を中心に述べる。さらに、今後の課題として、談話論的アプローチの必要性と有効性について、少しだけ見通しを述べておきたい。最後に、形容詞分類への提言を行って、類型論へのつながりを再度確認して結びとしたい。

本論文の基本姿勢は、「複合性」と「連続性」の積極的な容認にある。言語がコミュニケーションの手段である以上、そしてコミュニケーションが人間関係の綾から織りなされる以上、「体系性」と「複合性・連続性」は、言語の本質的特徴であろう。ことに、第三の品詞である形容詞研究においては、理論のための人工的な単純化は——たえそれがどんなに美しい説明であっても——実際の形容詞の姿を反映していないことになるのではないか、という恐れが筆者にはある。

グレーゾーンをグレーとして認め、そこに「黒」と「白」がどのように混在しているのかを見極める姿勢、あるいは、二重螺旋を二重螺旋として認め、部分のクローズアップと同時に全体の立体的なありさまを描こうとする姿勢、これが本論文の目指すところである。ただ、これは現時点での筆者の力では到底及ばない目標である。しかし、本論文がそのスタート地点の地均しになっていれば、幸いである。

[注1] これら二つの流れの他に、「形容詞述語文」を文論・陳述論の面から鋭く捉えた川端善明の一連の論考（1977等）がある。大変学ぶべき点の多い論考であるにもかかわらず、研究史上では孤立した存在となっている。

[注2] 今年度になって、これらの分類を見渡して、再度分類を試みたものとして、山岡（2000）が出た。山岡の研究の中心は文機能の解明にあり、動詞述語文のみならず、形容詞述語文や

名詞述語文をも射程に捉えている点や、述定用法に限定した記述になっている点は、これから述べる本論文の姿勢と一致している。その中で、従来の研究と同様にいくつかのテストフレームを作成し、形容詞の分類をしている。それは、基本的に樋口の分類と細川の分類をベースにしており、元来、立場の異なる分類を統一しようという試みになっている。ひとつ確認しておきたいのは、山岡は、樋口達の分類を「金田一分類」に刺激されて作られたもの、と推測しているが、樋口達の分類は、言語学全体を見渡して、他の言語における文法現象をふまえたもので、とくにロシア語における類型論的研究の成果を受けて考えられている。



## 第一部 方法論編

### — 適切な記述のために

第一部では、形容詞述語文を記述するにあたって必要となる方法論を模索する。先に本論文の構成を述べた部分でも確認したが（0. 4）、本論文は、「実例に基づいた記述」を目指している。第一部はあくまでもそのための道具立ての整備である。典型を出すために作例を多く用いているので誤解を招きやすいが、これらの道具立ては、採取した用例カードを見つめる中から、必要に迫られて整備したものである。

My personal interest is firstly in description, and only in ‘theory’ as it assists description and provides explanation for what has been described (not in ‘theory’ as an end in itself). Theoretical devices like treediagrams and systemic network do — it seems to me — run the risk of imposing strait-jackets which languages neither deserve nor need. Language is not neat and symmetrical.

Dixon(1991:preface xiv)

## 1章 「動詞～形容詞～名詞」の連続相

本章では、形容詞を「動詞～形容詞～名詞」という連続相の中で捉え直すにあたり、その理論的的前提となる先行研究について、粗々ではあるが概観する（1. 1）。

その後で、日本語における連続相のあり方について、先行研究を参考に作業仮説をたて、本論文で扱うべき範囲を検討する（1. 2）。

### 1. 1 前提となる理論

類型論では、動詞と名詞の二大品詞がほとんどの言語に見られるのに対して、三つ目の品詞である形容詞は言語によってその位置づけ（encode）のありかたが異なることが指摘されている。この節では、本論文の前提となる類型論の考え方をいくつか紹介する。これらは相互に関連しており、最初に挙げるギボンの仮説の発展を考えることができる。

#### 1. 1. 1 ギボン「time-stability hypothesis」

Givón (1984) は、この 3 つの品詞の関係について “time stability hypothesis” という仮説を提示している。Givón (1984:51–52) はまず 2 大品詞である名詞と動詞を次のように捉える。

noun:Experiences — or phenomenological clusters — which stay relatively stable over time, i.e. those which over repeated scans appear to be roughly “the same”, tend to be lexicalized in human language as nouns.

verb:At the other extreme of the lexical-phenomenological scale, one finds experiential clusters denoting rapid changes in the state of the universe. These are prototypically *events* or *actions*, and languages tend to lexicalize them as verbs.

その上で、形容詞を持つ言語と持たない言語について観察し、形容詞をこの 2 品詞の中間にるものとして、次のような scale を提示している (Givón 1984:55)。

## NOUNS ----- ADJECTIVES ----- VERBS

most time-stable

intermediate states

rapid change

時間的な連續相の中で、三つの品詞を捉えるギボンのこの考え方は、様々な形で類型論の中で継承されてきた。本論文の連續相を考える上で特に確認しておきたい論を、非常に簡単な形ではあるが、以下で少し紹介する。

## 1. 1. 2 レーマン「aspectual type(s)」

C. Lehmann (1999) は、situation (レーマンの言う situation は predication のこと) のアスペクト特性を、ギボンの time-stability のスケールの中に位置づけられる situation のタイプとして捉え、次のような図式を提示している。

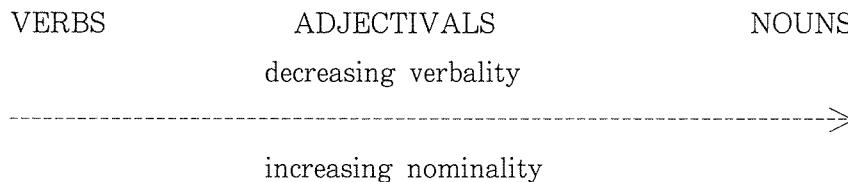
static		<————→ dynamic		
atelic			telic	
atemporal		durative		termin.
class membership	property	state	process	ingress. punctual
				event

レーマンは、この図に示された predication の aspectual character を predication レベルの意味の絶対的特性として捉え、これに対してアスペクトを一次元高いレベルである proposition のレベルで、他の situation とのタクシス関係で相対的に定まるものとしている。

レーマンの論は、predication のレベルでの「連續相」のあり方を提示しているところに大きな意味がある。後で見る、ロシア言語学の「時間的局所限定」という用語は用いてはいないが、アスペクトの基底となる部分に連續相を見ている発想は共通している。名詞述語文から動詞述語文までを貫く連續的な時間的特徴がある、ということを再確認させてくれる。

### 1. 1. 3 ヴェツァー・スタッセン 「tensed hypothesis」

ギボンの議論をふまえて、様々な言語における形容詞述語文のありさまを観察した Wetzer (1996) は、ギボンの連続相を次のように翻案し、“continuum hypothesis” と呼んだ (Wetzer 1996:43)。



さらに、形容詞が当該言語でどのように位置づけ (encode) られるかは、その言語のテススによって決定されるという仮説を提示している。

On the basis of the cross-linguistic tendencies stated in universals, I will venture the hypothesis that the selection of nouny or verby adjectival encoding can indeed be explained by reference to the tensed or non-tensed nature of the language in question. Wetzer (1996:290)

ヴェツァーの仕事は、彼の指導教官であるスタッセンの研究 (Stassen (1997) 等) と相補的な関係にある。スタッセンは、intransitive predication を次の 4 つに分類して、類型論的研究を進めている。

- ①event predicates [verbs]
- ②property predicates [predicate adjectives]
- ③class predicates [predicate nominals]
- ④locational predicates [predicatively adverbials]

ヴェツァーはこのうち、最も問題が多い②の部分だけを重点的に研究している。彼らの研究の中で、日本語が二種類の形容詞を持つに至った理由について、興味深い仮説が提示されているが、本論文ではそこには踏み込まない [注 1]。ただ、ここで確認しておきたいのは、ある言語の形容詞について考えるときに、当該言語のテススが文法化されているかどうかが問題となる、という点である。やはり、形容詞述語文を考える際に、時間的な

側面をまず考えておくことは、重要な意味を持つと思われる。

### 1. 1. 4 その他の理論

形容詞に関する類型論的な研究で、ここで確認しておきたいのは、Bhat の一連の研究と、Thomson の談話論との関連である。

Bhat (1994) は、形容詞的なカテゴリーが様々な言語でどのように表れるかについての丹念な研究である。ヴェツァーと異なり、述定用法だけではなく、裝定用法なども対象にして記述を行っている。本論文が、述定用法・裝定用法を区別する大きな動機は、彼の記述によって、形容詞的なカテゴリーの文法的性質が、文中での位置によって大きく異なることを確認したことにある。

また、Bhat (1999) は、先に見たスタッセン達の研究成果も採り入れ、動詞の TMA カテゴリーの各言語での比重 (prominence) のあり方と、形容詞・静態動詞の encoding の関連についても述べており、興味深い発展となっている。

一方、Thompson (1988) は、談話の中での形容詞の役割について述べており、情報構造と形容詞のあり方に踏み込んだという点で、形容詞研究の次の段階を示唆するものになっている。本論文では、この段階まで至ることはできないが、最後に今後の課題として、研究の方向性を見極めるときに少し触れたいと思う (8. 2. 1)。

以上、本論文における「連續相」の前提となる類型論の先行研究について、粗い記述ではあるが確認してきた。次の節では、日本語における連續相について、考えてみたい。

## 1. 2 日本語における「動詞～形容詞～名詞」の連續相

### 1. 2. 1 仮説としての連續相のあり方

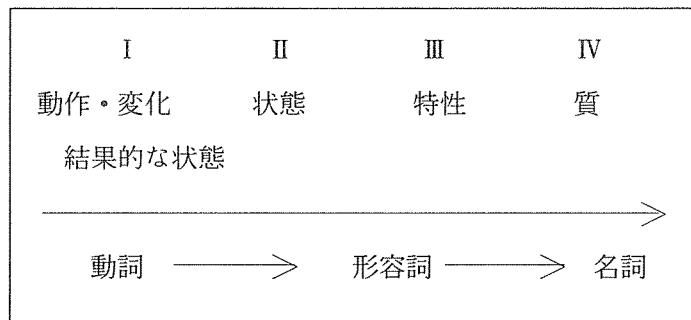
先に類型論でみた 3 大品詞の連續するありさまは、日本語においてはどのような形で現れているのだろうか。これは非常にスケールの大きい問題であり、現在の筆者一人で到底解決できるものではない。そこで、ここでは形容詞研究のスタートとして、先行研究の成果を取り入れながら、全体を俯瞰してみたい。

動詞、形容詞、名詞ともに多くの先行研究がある。しかし、これらを同じ平面上で一つの見取り図として示すためには、先行研究間に何らかの共通基盤が存在することが必要不

可欠である。しかし、研究の専門化が進み、研究対象が特化されていることが多く、それぞれの研究が有益な情報を提供してくれるものの、術語の定義にはかなり独自性が強く、全体を見通す場合に使用するのは難しい。例えば「状態（化）」という用語も随分様々な意味で用いられていて、多くは、運動動詞の継続相が表す意味も、「いる・ある」のような存在動詞を用いた表現の表す意味も、名詞述語文の表す意味までカバーしていて、あまりに広く用いられている。形容詞述語文の時間的な特徴を拾い出すのに用いるには、不便である。

そこで、グループとして共通の術語を用いて、さまざまな文タイプについて共同研究をしている言語学研究会の術語を基本的に用いることにしたい。同会を中心とする一連の研究は、ロシア言語学の時間論を基盤に、運動動詞述語文から名詞述語文までを見通して、用語の規定を行い、同じ枠組みで研究を進めている。

本論文では、奥田（1988a）「述語の意味的なタイプ」および、奥田（1988b,c）「時間の表現（1）（2）」で示された用語を用いて、まずこの連続相を4つの段階に分けてみたい。



この4段階の把握において、大きな意味を持っているのが「時間的局所限定の有無」（出来事の時間的現象化の個別・具体性の有無）である。本論文でも、重要な概念となるので〔注2〕、今後とも繰り返しその内容を確認しながら記述を進めることになるが（5.1、6.1）、奥田の時間的局所限定についての考えは、ロシア言語学（ゾロトーヴァ、ヴルィギナ等）を受けている。奥田の慎重な議論を自分でまとめることは危険なのだが、今、簡単に時間的局所限定の有無とはどういうものかを示すと、次のようになる。

## 時間的局所限定 有 [前図の I、II]

- ・客体の存在のあるモメント（断片）を記述。
- ・うつりかわっていく、特定の世界の状態を特徴づけている。
- ・偶発的なものである。

↑ ↓

## 時間的局所限定 無 [前図の III、IV]

- ・時間から相対的に独立している、対象の特徴付けをさします。
- ・世界そのものの特徴付けであり、その世界にとって、あたえられた陳述は真実。
- ・本質的なものである。

その上で、IとIIの違いがどこにあるかというと、奥田の次の二つの規定を引用することで明らかになるだろう。

この《結果的な状態》はただの《状態》ともくべつしなければならない。《状態》も、物そのものにときとしておこってくる、一時的な出来事をとらえているが、それは、変化の結果ではない、ということで、《結果的な状態》とはことなる。（「時間の表現（1）」：10）

すでにのべてあることだが、《状態》とは、いちいちの、具体的な物のなかに一時的におこてくる出来事である。この出来事というのは、物の内面や外面で進行する、物それ自身の動きであって、動作のように、ほかの物へはたらきかけていくようなことはしない。（同上：11）

さらに、IIIとIVの違いについて、奥田は次のように述べている。

質というのは、客体の存在からきりはなすことのできない、本質的な規定性を表現するカテゴリーであって、ある客体をべつの客体からくべつする可能性をあたえる。このような客体の質は、その客体の《特性》の総体のなかにあきらかにされるだろう。かんたんにいえば、質は、ひとつの物からほかの物をくべつする、本質的な特性のセットである。ところが、《特性》は物のもっている、ひとつの側面、あるいはいくつかの側面を表現するにすぎないカテゴリーであって、まだ物の質的な特徴づけをあたえるまでにはいたっていない。（「述語の意味的なタイプ」：24）

そして、動詞述語文・形容詞述語文・名詞述語文が、この四段階とどのように関連しているかを（配慮すべき細かい点を捨象して）、俯瞰すると、次のようになる。

		静 態 的 (出 来 事)			
		I	II	III	IV
動詞述語文		運動動詞 完成相 継続相 パーフェクト 反復相	静態動詞 ・庭に蛇がいる／ 山がそびえている	<超時的な質規定文> ・人は死ぬ／ 鳥は飛ぶ	
形容詞述語文			状態形容詞 ・今日は顔が青い ／昔が恋しい	質形容詞 ・象は鼻が長い／ 暗闇は怖い	
名詞述語文			<状態> <滞在> <動作> ・彼女は怠け者だ	<特性> <関係> ・男はみんな狼だ	<質> ・鯨は哺乳類だ

本表を作成するのに参照した文献は、以下のとおりである（用語は各文献による。あえて統一はしていない）。

動詞 工藤（1995）  
 形容詞 荒（1989）・樋口（1996）  
 名詞 佐藤（1997）

### 1. 2. 2 本論文の焦点

形容詞はこのうち、II・IIIと最も関連が深い。IIの《状態》に相当するのが、「一時的な属性」を表す、

- ・西の空が真っ黒だ

のような表現であり、IIIの《特性》にあたるのが、「恒常的な属性」を表す

・海は広い

のような表現であろう。そこで、形容詞述語文を中心に、Ⅱ・Ⅲの表現の持つ「時間的特徴」を整理・記述していくことにしたい。なお、これらの表現が持つ時間的特徴を「属性相」のように名づけてアスペクト論の中で扱う立場があるが、本研究では与しない。この連続相のあり方は形態論のレベルで明らかになる性質の問題ではないと考えている。第二部の記述で明らかにしたいが、「時間的局所限定」といった広義モダリティーに通じる観点から、文論のレベルでその性質を見極めることができがぜひとも必要となってくる。そこでは、属性の持ち主のタイプと属性との結びつきのあり方が、大きな意味を持ってくるのである。

以上、本章では、前提となる類型論のいくつかを紹介し、「動詞～形容詞～名詞」の連続相の中で形容詞を考えることの必然性について確認し（1. 1）、日本語における連続相について、奥田靖雄と言語学研究会の考え方に基づいて、整理した（1. 2）。

次の章では、この連続相を記述するのに必要な道具立てを、模索していきたい。

---

[注1] 日本語の通時変化が、日本語の形容詞のencodingに影響を与えたのではないかと彼らは主張する。大雑把に言うと、古代日本語はテンスを持っていなかったが、通時の変化の中で、テンスを持つようになった。それに応じて、最初は *verby* な形容詞（狭義形容詞／イ形容詞）中心だったのが、造語力を失い、新たに *nouny* な形容詞（形容動詞／ナ形容詞）を発達させてきた、というものである。大変興味深い仮説であるが、検証には、動詞の文法カテゴリーの変遷史も含めて、かなり慎重な検証が必要である。ただ、十分にありえる仮説ではないかとも思われる。

[注2] すでに先の図で明らかなように、この時間的局所限定の有無の分割線は、形容詞述語文で表される範囲の中にある。従来の動詞研究ではあまり問題にされてこなかったこの分割線が、本論文では重要な意味を持ってくることになる。

## 2章 「属性表現」の連続相を記述するために

本章では、記述にあたっての基本的な立場や道具立てをより詳細に検討していく。連続相を記述するためには、まず典型例（連続相の両極端）を比較することによって、分析のポイントを探る（2. 1）。そして、従来、「形容詞のテ ns論」がどのように形容詞述語文の時間的性質を扱ってきたかを参考に（2. 2）、本論文の記述の道具立てを組み立てる（2. 3）。

### 2. 1 「一時的属性表現」と「恒常的属性表現」

先に（1. 2）、動詞～形容詞～名詞の連続相について、先行研究をもとに、大きく四つの段階を想定した。そのうち、形容詞と特に関連の深いⅡ「一時的属性表現」とⅢ「恒常的属性表現」について詳しく観察するために必要な枠組みについて考えてみよう。

その第一段階として、まずは典型的な「一時的属性表現」（＝Ⅱ）と「恒常的属性表現」（＝Ⅲ）を比較することから始めたい。

- ・君、顔色が悪いね。……………「一時的属性表現」Ⅱ
- ・海は広い。……………「恒常的属性表現」Ⅲ

まず、「君」と「海」の性格が異なることに気づく。Ⅱでは、属性主である「君」が特定の個人（以後、《個》と呼ぶ）であるのに対して、Ⅲの属性主「海」は、いわゆる総称名詞（以後、《類》と呼ぶ）である。

ここで、再度、用語について少し確認をしておきたい。「君・海」を「属性主」と呼ぶこととする。本論文の「属性主」は広い意味で用いており、いわゆる「感情・感覚形容詞の主語」にあたるものも含んでいる。同様に、「属性」と呼ぶ述部も属性形容詞が表す属性のみならず、感情・感覚をも含むカバータームとして用いている。

また、自明のようではあるが、述部となる属性そのものの性質も異なる。Ⅱでは、「顔色が悪い」という属性は「君」にとって「臨時の・一時的」なものであるのに対して、Ⅲの「広い」という属性は「海」にとって、「本質的・恒常的」なものである。時間的局所

限定の有無という観点から捉え直すと、Ⅱは時間的局所限定のあるアクチュアルな属性表現で、Ⅲは時間的局所限定のないポテンシャルな属性表現ということになる（時間的局所限定の定義については、立場によって揺れがあるので、5. 1で再度確認をとるが、言語学研究会の定義に従う）。ここでは、奥田（1988 a）「述語の意味的なタイプ」の記述を引用して簡単に確認しておく。少し長いが、未公刊もあるので、本質的な議論として引用しておこう。

形容詞が述語の位置にあらわれて、《特性》も《状態》もあらわしているとすれば、《特性》と《状態》のあいだには絶対的な境界はない、ということになるだろう。そして、この、ふたつのカテゴゴリーが時間の局所限定のし方においてことなるだけのことであるとすれば、具体的な時間のなかにあらわれてくる特性は《状態》であって、時間のそとにあたえられた状態は《特性》であるということになる。（中略）この論文集の著者のひとりはこんなふうにかいている。

状態、これは客体の時間的な特性であって、客体に存在する恒常的な特性ではない。《状態》が「客体の時間的な特性にほかならない」とすれば、限定された、具体的な時間のなかにあらわれてくる物の特性が《状態》であれば、時間のそとにとりだされた状態は、特性である。この論理をもう一步すすめれば、こんなことになるだろう。つまり、特性は物につきまとっている潜在的な特徴であって、その特徴がアクチュアルな現象へ移行するとき、状態へと移行するのである。（中略）こうして、《特性》と《状態》とのあいだには、潜在と顯在との関係がみえてくる。

（奥田 1988 a : 31-32）

さらに、上で述べたことと関連して、属性主と属性の結びつきのありかたについて考えてみると、Ⅱの方が臨時のため、場面に依存することになり、話し手の主觀への依存度も高い。従って、つぎのような会話の連鎖を想定することにも無理はない。

- a 「君、顔色悪いね」
- b 「そうですか？」
- a 「気のせいかな」
- b 「照明のせいじゃありませんか？」

これに対して、Ⅲは、総称名詞の本質的な属性であるから、話し手の主觀によって属性主と属性の結びつきが左右される可能性はⅡに比べると格段に低い。

- a 「海は広いね」
- b 「そうですか？」
- a 「気のせいかな」
- b 「天気のせいじゃありませんか？」

という会話の連鎖は、よほど特殊な状況でないかぎり（話し手が創造主か何かでないかぎり）、かなり不自然である。

以上、述べてきたことを簡単にまとめると次の表のようになる。

	典型的な一時的属性表現	典型的な恒常的属性表現
時間的局所限定	有=アクチュアル	無=ポテンシャル
属性主	特定の個人や物 =《個》	総称名詞 =《類》
属性	属性主にとって臨時に獲得・付与されたもの	属性主が存在している限り消滅しないもの
属性主と属性の結び付き	臨時の・場面依存的 話し手の主観への依存度大	本質的・一般的 誰でも当然の結び付きと認定可

動詞述語文から名詞述語文への連続相の中で、この2つの典型的の間もまた連続的である。この間の連続的なりさまを記述するためには、どのような道具立てが必要となるのであろうか。先行研究にそのヒントを探ってみたい。

## 2. 2 先行研究 —「形容詞のテ ns 論」を参考にする

本研究が注目する「一時的属性表現」や「恒常的属性表現」の時間的特徴についての先行研究は、主に形容詞のテ ns 論として行われてきた。主文末で形態的にテ ns の対立を持つ形容詞述語文においては、「非過去形（イ形）—過去形（タ形）」の分析を通して、そ

の時間的特徴が明らかになることが予想される。

先に確認したように、述部を構成する基本品詞は動詞であるから、テンスの分化も動詞述語文において典型的に現れる。従って、従来の形容詞のテンス論も、動詞における研究成果を基盤に進められてきた。私見であるが、中でも注目されるのは高橋太郎（1986）「形容詞のテンスについて」、仁田義雄（1990）「日本語の形容詞文をめぐって」、工藤眞由美（1998）「非動的述語のテンス」の三本である。

いずれも動詞述語文のアスペクト・テンスについて体系的な記述を持つ筆者によって記されたこれらの先行研究では、形容詞述語文の表す「非過去形（イ形）－過去形（タ形）」の形態的な対立が、動詞の分析のと同様の分析（発話時に対する出来事時の前後関係）だけでは捉えきれないことが、具体例を挙げて詳細に述べられている。動詞の時間論をまとめたこれらの筆者達によって掘りおこされた具体的な問題点を、「動詞軸」ではなく「形容詞軸」の視点から、さらには「連續相」の視点から、もう一度検討してみるとどうなるだろうか。これが本論文に課せられた課題である。

中でも、工藤（1998）が明言しているように、形容詞述語の時間的な側面を考えるときに看過できないのは、次の二つの時間的関係が交錯している、という事実である。

- ① 「属性主」と「属性」の結びつきの時間的関係  
工藤（1998）の言う<事象側の成立時>
- ② 「話し手」による「属性主と属性の結びつきを認めた時点」の表明  
工藤（1998）の言う<話し手側の判断時>

動詞述語文の場合は、客観的な事象が問題になるので、基本的に①の事象の成立時＝出来事時（event time）だけを問題にすればよい。しかし、先に確認したように、形容詞述語文の場合は、話し手の主観が前面に出てくるので、①のみならず②がテンス分化を握る場合が出てくることになる。

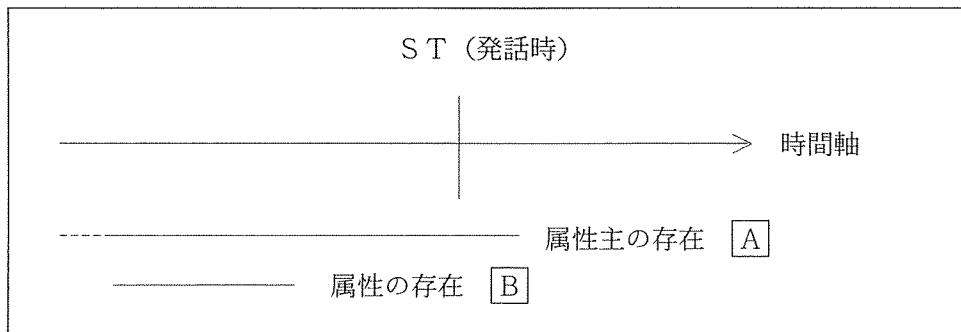
ここまで、先行研究として、形容詞のテンス論を見てきた。そこであげられた複雑な形容詞述語文の時間的様相を記述するのに必要な道具立てを次に考えていきたい。

## 2. 3 記述に必要と思われる道具立て試案

以上の検討から、形容詞述語文の時間的特徴を考えるときその切り口となる点としては、

- ①属性主のタイプ 《類》 or 《個》  
 ②属性主と属性の結び付きのあり方→時間的局所限定の有無  
     アクチュアル or ポテンシャル  
 ③発話時 (speech time) との時間的前後関係  
 ④話し手側の判断時 (工藤 1988 の用語) の関与

が考えられる。④については、少し問題が複雑化するので、改めて次の章でじっくりと検討することとして、まず基本となる①～③を基準に記述の順番（場合分け）を考えてみたい。最初に、これらを視覚的に見やすく図示する手段として、次のような図式を提案したい。



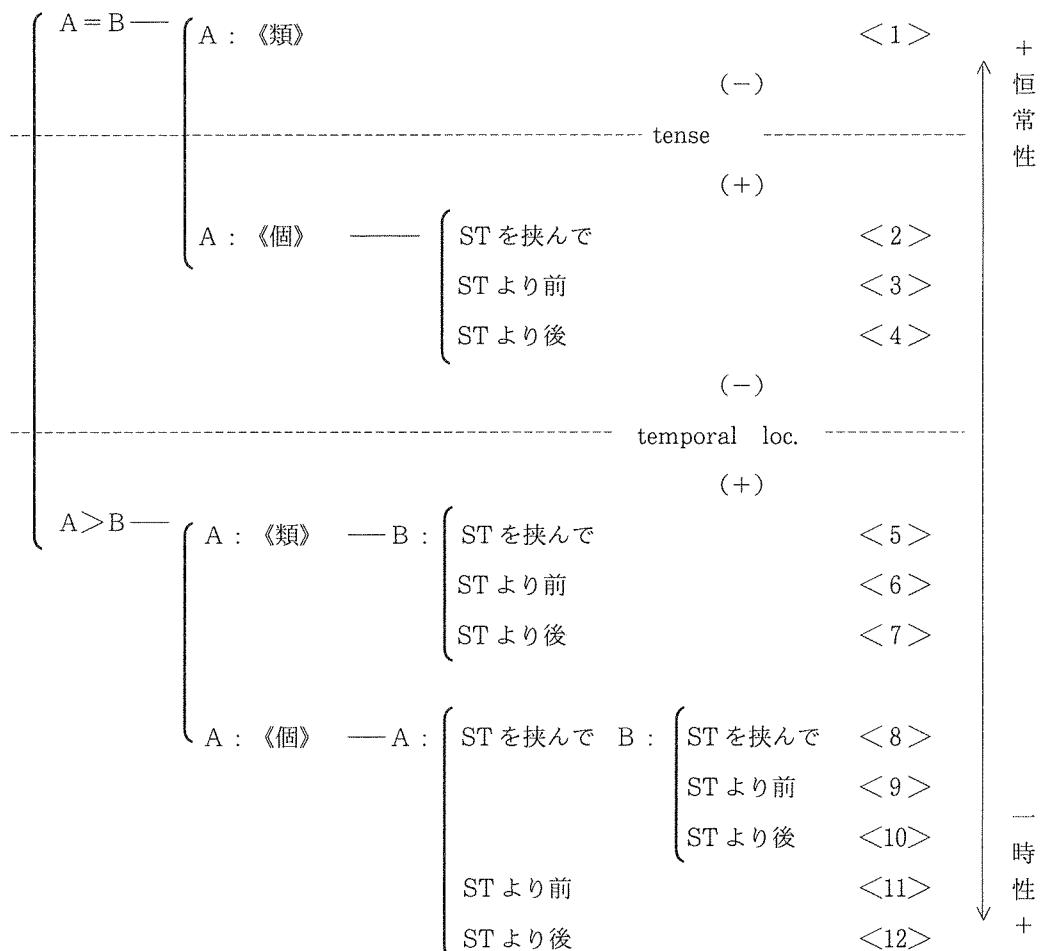
さきほどあげた 3 つの観点が、図にどのように表されているかをまとめると次のようになる。

- ①属性主のタイプ → 線のタイプで図示  
 • 総称名詞 《類》 → [A] の両端が点線  
 • 特定の個人や物 《個》 → [A] は単なる実線
- ②属性主と属性の結び付き → 線の長さで図示  
 • 本質的=時間的局所限定無=ポテンシャル → [A] = [B]  
 • 臨時の=時間的局所限定有=アクチュアル → [A] > [B]
- ③発話時との時間関係 → S T (speech time) との前後関係で図示  
 • S T を含んだ時間帯に存在 → S T を挟む  
 • S T より過去の時間帯に存在 → S T より左  
 • S T より未来の時間帯に存在 → S T より右

これらの組み合わせとして、形容詞述語文の時間的特徴が記述できると思われるわけであるが、場合分けとして、次の12通りの組み合わせを考えられる。[注1]

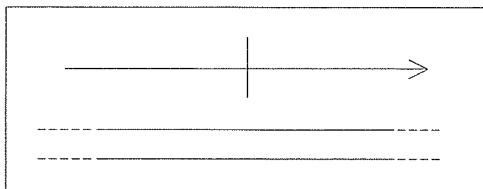
### 必要と思われる場合分け

#### ○属性主と属性の関係

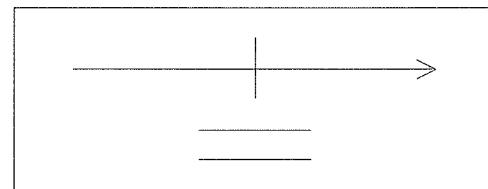


このままではわかりにくいので、先ほどの図でこの 1 2通りを表すと次のようになる。

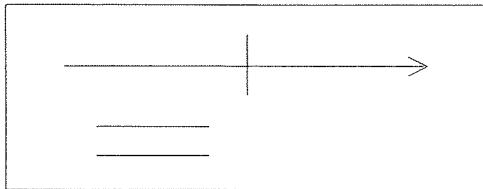
<1>  $A = B$  A : 《類》



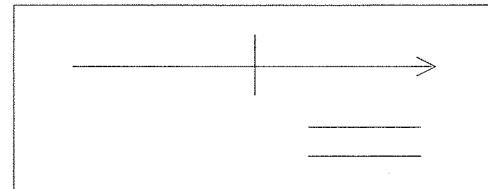
<2>  $A = B$  A : 《個》 S T挟んで



<3>  $A = B$  A : 《個》 S T前

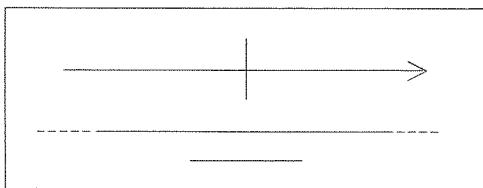


<4>  $A = B$  A : 《個》 S T後



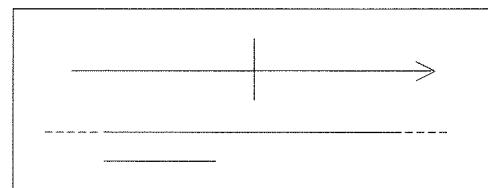
<5>  $A > B$  A : 《類》

B : S T挟んで



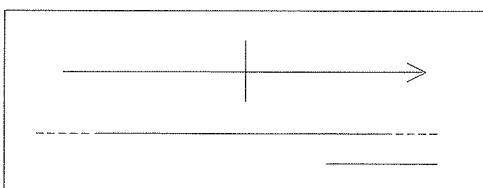
<6>  $A > B$  A : 《類》

B : S T前



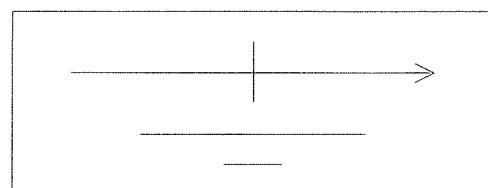
<7>  $A > B$  A : 《類》

B : S T後

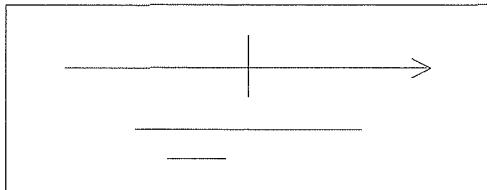


<8>  $A > B$  A : 《個》

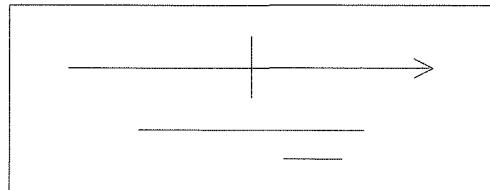
$A \neq B$  : S T挟んで



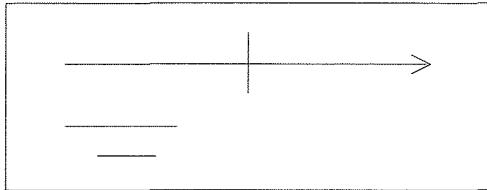
<9> A>B A : 《個》  
A : ST挟んで B : ST前



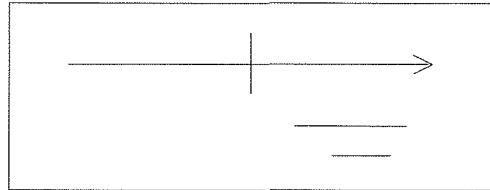
<10> A>B A : 《個》  
A : ST挟んで B : ST後



<11> A>B A : 《個》 ST前



<12> A>B A : 《個》 ST後



このように<1>～<12>の場合分けを設けることは、一見煩雑に見えるのだが、先に確認してきた形容詞述語文の性質を考えると、実はこの場合分けが、その本質に沿った無理のない記述を導くことが予想される。従来よくわからなかつた形容詞述語のテンス対立のあり方も、「何に注目してST(speech time)との前後関係を捉えているのか」を整理することが可能である。テンス対立は、次頁の図のようになる。

この記述方針に従って、形容詞述語文の時間的特徴を、動詞述語文や名詞述語文でⅡ・Ⅲ段階に位置づく表現との関係にも目を配りながら見ていきたい。

すでに、ここまで記述の方針からも明らかなように、現代日本語の形容詞述語文の時間的なあり方は、文論のレベルで、「属性主(主語)のタイプと属性(述語)の時間的局所限定のあり方の関係」として捉える必要がある、というのが本論文の主張である。従来の形容詞のテンス論が、動詞研究の成果を受け継いで、形態論レベルで「イ形—タ形」の対立として(場合によっては、動詞と同様ということで、形容詞の非過去形をも「ル形」と呼ぶことも多かった)分析してきたのとは、大きく方針を異にしている。

また、動詞述語文ではあまり問題視されない「時間的局所限定の有無」についての視点が形容詞述語文の研究では大変重要な役割を演じる。第二部の具体的な記述の中で、その

必要性を改めて確認していくこととしたい。

次の章では、記述の前提として確認しておくべき点について、先程保留した「話し手の主観性（判断時）の関与」を中心に、さらに細かくみていくことにしたい。

### ＜テンス対立の図＞

		属性主と属性の関係		テンス対立の組
Aの性質		$A = B$ 本質的	$A > B$ 臨時の	
《類》	$<1>$ 脱時間		<ul style="list-style-type: none"> <li>&lt;5&gt;</li> <li>&lt;6&gt;</li> <li>&lt;7&gt;</li> </ul>	
《個》	<ul style="list-style-type: none"> <li>&lt;2&gt;</li> <li>&lt;3&gt;</li> <li>&lt;4&gt;</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>&lt;8&gt;</li> <li>&lt;9&gt;</li> <li>&lt;10&gt;</li> <li>&lt;11&gt;</li> <li>&lt;12&gt;</li> </ul>	
		無	有	
		時間的局所限定		
		《特性》	《状態》	

[注1] この<1>～<12>は、記述のための場合分けであり、数字を付与したのは、次の図示や、後のテンス対立の表との対応を明らかにするための便宜からである。第二部の記述を見ていたきたいが、本論文は、形容詞述語文を12個に分類することを目的としているのではない。あくまでも連続的なりさまを記述することを目的としており、ここでは、その順番を整理しようとしている。

### 3章 記述に際して確認しておくべきこと

本章では、現代日本語の形容詞述語文を記述するにあたって確認しておくべき点を、さらに詳細に確認する。まず、対象とする表現の範囲について確認する（3. 1）。後半は、動詞述語文と比較しながら、形容詞述語文の記述で特に考慮が必要になる「主観性＝評価」の問題について、どのように時間的な側面に影響を及ぼすのかを中心に確認を行う（3. 2～3. 4）。その中で、すべての形容詞述語文に「認識レベル・評価レベル」の二重構造を認める必要性について述べる。

#### 3. 1 研究の対象とする表現

まず、はじめに研究の対象とする表現について限定をしておくと以下のようになる。

形容詞述語文の時間的側面に注目して記述を進めるので、発話時との関係が問題となるため、テキストタイプとしては、基本的に会話文（工藤 1995 の言う「はなしのテキスト」）を用いることにしたい。具体的には小説の会話文やシナリオのセリフを中心に用例を採集し、記述をする。ただし、高橋（1986）でも触れているように、形容詞述語文の絶対数は動詞述語文に比べて各段に少ない。これは形容詞にとって、述部にたつことが二次的な役割であることから予測される当然の結果である。従って、内省による用例の補足も若干しながら記述を進めていきたい。

次に、文タイプについては、基本的に「平叙文・肯定」に限定する。その中でも断定を中心に見ていく〔注1〕。「属性主と属性の性質」に注目するため、その関係が未分化である感嘆文（一語文）についても基本的に対象外とする。

また、意味的には奥田（1988 b）の言う《特性》と《状態》を表す文を中心に扱う。

- 《特性》は、恒常に物にそなわっている、安定した特徴である（奥田 1988 b : 10）
- 《状態とは、物それ自身の内面や外面でおこってくる、物それ自身の、一時的な動きである》

（奥田 1988 b : 11）

従って、

- ここで帰ったら、来なかったのと同じよ。

のように《関係》を表すようなものは扱わない。

また、形容詞述語文の中で、「ない」「ほしい」が述部に立つものについては、その性質が若干特殊であることが予想されるので、その扱いに注意し、基本的には対象外とする。

「よい」「大丈夫だ」「駄目だ」なども、その用いられ方に偏りが見られるので、注意する。これらの形容詞を述部に持つ表現は、純粋な属性表現になっている場合もあるが、異なる場合もある〔注2〕。とりあえず周辺的なものとして扱う。

さらに、「形容詞述語文」の範囲についてだが、最も基本的な「N P は A d j (空は青い。)」型を中心に扱う。タイポロジーの研究では、形容詞述語文の範囲をもう少し広く設定するものもあり (Thompson 1988 など)、その場合は

- ・チュービンゲンは美しい街です。
- ・吉村さんは優しい人です。

のように、形式的な名詞を伴った文も形容詞述語文となるのだが、現段階ではこれらは対象外とし、後に、今後の課題を示す中でもう少し考えることとする(8. 2. 1)。ただし、いわゆる「のだ文」「ものだ文」は、文法化の進んだ形として、考察の対象とする。

### 3. 2 「属性主」と「属性」

前節で、対象とする表現のタイプについて述べたが、実際に採集した表現を「属性主」と「属性」の性質に注目して記述しようとするとき、もう一つ確認しておかなければならぬことがある。それは、何を「属性主」とし、何を「属性」とするか、についてである。できるだけ記述に客觀性を保つためには、どのような助詞によってマークされるかといった形態的な特徴に注目する必要がある。しかし、形容詞の格支配を概観することが、本論文の目的ではない。ここでは、形容詞述語文の時間的性質を記述するにあたって最低限必要と思われる点について、確認をしていきたい。

#### 3. 2. 1 動詞述語文と形容詞述語文

動詞述語文においては、文中の各要素間の意味役割は格関係によってかなり明示的に示されており、「動作主—ガ格」「動作対象—ヲ格」「動作—動詞」を基本に分析することが可能である。では、形容詞述語文の場合はどうかというと、こちらは動詞の場合はどうま

く分析できない。

例えば、『計算機用日本語基本形容詞辞書 I P A L』（情報処理振興事業協会 1990）は、先に動詞辞書を作った時の文型パターンをそのまま利用して形容詞辞書を作ろうとしたが、実際にはかなり難しい作業となった。従来の研究はどうしても「用言」という捉え方で、動詞と形容詞と同じ性質のものとして扱おうとする傾向が強く、I P A Lの取った方法もその流れに属するものである。

しかし、形容詞は述部にたつことが本来の機能ではないので、動詞ほど格支配力もなく、格関係の分析を軸に据えることは難しい。また、強行するとかえって次の例のような不自然な直訳調の日本語を中心に分析する可能性が高くなる。

- ・私には、あなたが来てくれたことがうれしかった。

そこで、実際の用例に即して、どのような形があるのかを一度整理しておく必要がある。ことに、「属性主」がどのような形で表れるか、という点に注目して確認を進めておきたい。

### 3. 2. 2 「属性主」の表れ方

基本的には、《特性》を表す形容詞述語文の「属性主」は「ハ」で、《状態》を表す形容詞述語文の「属性主」は「ガ」でマークされる傾向がある。

- ・海は広い。 《特性》
- ・海が赤い。 《状態》

しかし、実例を集めてみると、属性主は必ずしもこのように「ハ」「ガ」でマークされることは限らない。特に、本研究では会話文を中心に観察しているので、このように「ハ」「ガ」でマークされている用例はかえって少数例となる。実際には、以下のような形が多く見られる。

#### ゼロマーク

- ・「見て。危ない者には近寄らないって根性丸だし」／「ああいうサラリーマン、一番嫌いッ」（ひとり：276）
- ・「だからね、ホントのこと言うと、私、今怖いの。今の啓吾はあなたがすべて

だから」（神様：346）

「～って」

- ・「しかし、女って怖いねえ。最初は、津村さんってステキとか言ってたくせに」  
(ひとり：184)
- ・「ほんとの恋って楽しいねー、生きてる感じするよねー」（神様：189）

「～なんて」

- ・「……あなたは優しいだけの男よ。直球しか投げてこない男なんて、退屈。夫としては安全だけど、女はときめかないわよ」（ひとり：232）
- ・「四十歳でマイホームなんてすごいわよ」（ダンス：16）

※マイナス評価もしくは、意外性を表す形容詞述語文の属性主のマークに用いられる。

「～て（で）・と」

評価（感情）性の高い形容詞述語文で、「属性主」が「評価を導く出来事」の場合。

- ・「寂しい思いをさせて悪かった」（ダンス：298）  
=寂しい思いをさせたのは
- ・「お母さん、働くの十三年ぶりでしょ。あんたがお腹にできて仕事辞めたから。  
だからね、大変だけど、なんだかちょっと楽しいの。ローンが<sub>でき</sub>てよかつ  
たわ」（ダンス：31）  
=ローンができたのは
- ・「まだ怒ってるのか？」／  
「辛いんだよ、啓吾と会ってると……。」（神様：260）  
=啓吾と会ってるのが

※圧倒的に「よい（よかった）」が多い。他に「嫌だ・楽しい・変だ・うれしいなど」

「～たら」

前項の「～て（で）」と近いが、「属性主」となる「評価を導く出来事」が未実現であり、仮定的な場合。

- ・「『私と恋人になつたら楽しいよ』、これが恋人づくりのコンセプト」  
=私と恋人になるのは  
(ひとり：194)

これらの形でマークされる「属性主」が、「ハ／ガ」でマークされる「属性主」と意味役割が共通していることは、パラフレーズが可能であることからも分かる。したがって、本研究では、これらを、周辺的なものとして、ある程度柔軟に研究対象に加えていきたい。

また、それぞれの形態による「とりたての違い」や「共起する形容詞のタイプ」も興味深いものがあり、考えなければならない大切なポイントではあるが、本論文では、まずは形容詞述語文の時間的側面を明らかにすることを優先し、これらは今後の課題として簡単に触れていく。

### 3. 2. 3 「属性」について

最後に、「属性」について若干触れておく。形容詞述語文のどの部分を「属性」ととらえるかは、なかなか難しい問題であり、この後3. 3で確認する二重構造ともあいまって、複雑な様相をなしている。ここでは、本論文の立場として、「属性主に対して predicate されている property 全体」として「属性」をゆるやかに広く捉える、という基本方針を確認しておきたい。これは、意味的な把握であるが、形態との対応でいうと、曖昧な印象をまぬかれない。しかし、形容詞のように、述部に立つことが二次的な品詞を中心に据える以上、このように柔軟な捉え方をする必要があるのではないかと思われる。その是非は、5章・6章での具体的記述によって、示していきたい。ここでは、特に混乱を招きやすい点について、確認をしておく。

ここまで何度か確認しているように、本論文では、「感情・感覚形容詞」述語が表すものも「属性」ととらえる。

・私、淋しい。

<属性>

また、高橋（1975）が、「側面語」と呼ぶものや「部分語」と呼ぶものも、後接する形容詞とあいまって、全体で「属性」を表すととらえる。

・やぎは、性質がおとなしい。 「性質が」 = 側面語  
<属性>

・花子は、顔がきれいだ。 「顔が」 = 部分語  
<属性>

形容詞の文型については、「象は鼻が長い」問題に代表されるように、数々の論が示されている。本論文では、この問題について検討するだけの十分な準備ができていない。この問題については、今後の課題として、改めて検討することとして、形容詞述語文の時間的な側面に集中して議論を進めていきたい。

### 3. 3 形容詞述語文の「主観性」

形容詞述語文の時間的側面を分析する際に、「属性主」とも関連してもう一つ確認しておかなければならぬ大切な点がある。それは、形容詞述語文における「主観性」の問題である。この点については、前にも少し触れたところであるが、「属性主」問題との関連も含めて、ここで再度考え、もう少し考察を深めておきたい。

#### 3. 3. 1 形容詞述語文の「評価者」

形容詞述語文には「主観的」な面がつきまとう。動詞述語文が、現実世界で起きた「動作主」の具体的な「動作・出来事 (event)」を描写するのに対して、形容詞述語文は、「属性主」と「属性 (property)」を「評価的に」結びつける。この話し手による「評価性」こそが、形容詞述語文の「主観性」の根本である。

例えば、動詞述語文について考えると、話し手 a と b が同時に次のように言ったとき、

[ 話し手 a 「太郎が立ち上がったよ」  
話し手 b 「太郎が座ったよ」

おそらく、この二人は、「違う太郎」を見ているのであって、一つの event をこのように全く逆の動作として捉えることはまずないだろう。

しかし、形容詞述語文の場合は、話し手 a と b が同時に次のように言ったとき、

[ 話し手 a 「この部屋きれいだね」  
話し手 b 「この部屋汚いね」

この二人が、同じ部屋を見ていたいる可能性もある。その部屋を「きれいだ」と評価するか「汚い」と評価するかは、話し手の「主観」に依存している。

形容詞述語文にとって、「評価者」の存在は不可避なものであり、その「評価者」の時間的な存在のあり方が、形容詞述語文の時間的な側面に影響を与えることは十分に予想される。そこで、この「評価者」についてもう少し深く考えてみよう。

先ほどの話し手aの会話における「属性主」「属性」「評価者」の関係は、次のように考えられる。

- 話し手a 「この部屋 きれいだね」

|| <属性主> <属性>  
<評価者>

このように、「評価者」は言語化されない場合が多く、その場合は「評価者=話し手」である〔注3〕。一方で、「評価者」が言語化されている形容詞述語文もある。

- 「俺は お前が 大事なんだ」

|| <属性主> <属性>  
<評価者>

- 「私、 あなたがいないと さびしいわ」

|| <属性主> <属性>  
<評価者>

評価者が言語化される場合、「ハ・ッテ・ニハ・ニトッテ (ハ)・(ゼロマーク)」などの形で表れる。どの形でマークされるかについては、形容詞述語文の種類とも絡んでさらに慎重な議論が必要だが、今簡単に示しておくと、評価性（主觀性）の高い「いやだ・うれしい・きらいだ・しあわせだ・すきだ・だいじだ」などを述部に持つ形容詞述語文では「ハ」もしくは「ッテ・(ゼロマーク)」で表れる。また、いわゆる狭義の属性形容詞による形容詞述語文では「ニハ・ニトッテ (ハ)～(って思われる・って感じ)」という形で表れる傾向がある。この点については稿を改めてきちんと確認したい。今はこの「評価者」がどのように時間的側面と関連しているのか、という点に注目してもう少し議論を進めておきたい。

### 3. 3. 2 「属性主」としての「評価者」

前節で、形容詞述語文における「評価者」の存在について見た。

ここで、もう一步議論を進めて、この「評価者」もまた形容詞述語文の「属性主」であるということを確認しておきたい。

評価者が言語化されている次のような文で考えてみよう。

- ・「僕は、そういう寂しい考え方嫌いです」（ひとり：50）

この文では、「評価者＝僕」が、「属性主＝そういう寂しい考え方」に対して「属性＝嫌いだ」という評価を下している。もう少し文脈を補ってみよう。

- ・「そんな人って—悪い事じゃないよ。計算ずくっていうのは、わかりやすくて楽で好きなんだ、僕」／「そういう考え方しかできない人に、死んでも彼女は渡せません」／星野の手を、津村はピシリと払いのけた。／「ベタベタくっついて、撫で回していくだけが愛情だとおもってるなら、君は青いよ」／二人の視線がぶつかり合った。／「僕は、そういう寂しい考え方嫌いです。一生女房とベタベタし、一生他人に自慢したいと思います」／津村の顔に皮肉な微笑がうかんだ。（ひとり：50）

最初の文も、（倒置が起こってはいるが）評価者が言語化されている形容詞述語文で、「評価者＝僕（津村）」が、「属性主＝計算ずくの女」に対して「属性＝好きだ」という評価を下している。ここで、明らかになっているのは、二人の登場人物「星野」と「津村」の「評価＝価値観」の違いである。そこから浮かび上がってくるのは、二人の「性格」の違いである（星野の「そういう考え方しかできない人」という表現が端的に示している）。

すなわち、形容詞述語文で表される「評価内容」は、「評価者の本質＝属性」の表明である。この点について、優れた指摘が樋口（1999）に見られる。

評価はその特徴のもち主としての物を対象にすえて、それが人間にとて何であるか、その物の価値を表現する。そして、この評価においては、その物の価値があきらかにされると同時に、そのように評価する人間自身の質がそこにあらわになる。 樋口（1999：1）

つまり、属性表現にとって、評価者もまた一種の「属性主」である。この点を認めると、先に挙げた文は、その意味役割の関係において、次のような二重構造を持っていることに

なる。

- ・「僕は、そういう寂しい考え方 嫌いです」

<属性主> <属性>  
<属性主>< 属性 >

樋口（1999）の用語を借りれば、この上段の結びつきは「認識」レベルであり、下段の結びつきは「評価」レベルである。この点については、慎重に議論を進める必要があるのだが、なぜこのような二重構造を考えることが、時間的側面の分析に必要であるかを明らかにするため、少し先を急ぎたい。[注4]

今、評価者が言語化されている場合について見たが、さらに積極的に言うと、言語化されていない文の場合も、話し手の属性を表明していると考えることができる。先に挙げた例をもう一度見てみよう。

- ・話し手a 「この部屋 きれいだね」

<属性主> <属性>  
<属性主>< 属性 >

したがって、同じ部屋を見て「きたない」と思った話し手bは、aに対して「(この部屋をきれいだと思うなんて) 君はおかしいよ」と話し手aの「価値観=本質」そのものを非難することもできる。

形容詞述語文による属性表現では、「評価者」の存在が重要であり、意味役割については二重構造を持っていることを確認した。このことが、時間的側面とどのように関連しているのかについて、節を改めてさらに考えてみたい。

### 3. 4 「認識レベル」と「評価レベル」

#### 3. 4. 1 二つのレベルと過去形の表れ方

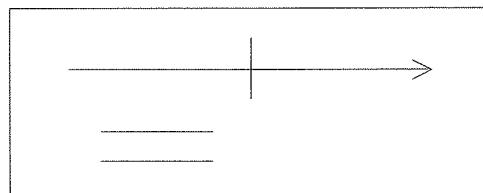
前の節で、形容詞述語文による属性表現が二つの「属性主」を持つことを見た。ところで、前の章で述べたように、形容詞述語文の時間的側面は「属性主の種類（類か個か）」と「属性主と属性の結び付き（特性か状態か）」の二つによって決まる。しかし、二重構

造になっているとすれば、そのどちらかが時間的側面の決定に優勢となることが予想される。具体的に見てみよう。

評価者は、会話文では基本的に「話し手」である。明示されないことも多く、普通は認識レベルの時間的な側面を考えるだけで、過去形が使われる理由が説明できる。認識レベルが前景化されているといつていいだろう。

- (話し手) 「亡くなった姉さんは、 背が高かった」

$\langle \text{属性主} \rangle < \text{属性} > \rightarrow [\text{個・特性}]$   
 $(\langle \text{属性主} \rangle < \text{属性} > (\rightarrow \text{背景化}))$



しかし、「認識レベル」の分析だけでは、対応できない場合が出てくる。

ドラマなどで故人が語るような場合は、言語化されていない評価者の時間的存在が優先される。「評価レベル」における「属性主=過去の存在」という時間的側面が前景化されているといえよう。

- (死んだ杏子の声) 「ねえ、柊二、この世はきれいだったよ」(ビューティフル・ライフ)

$\langle \text{属性主} \rangle < \text{属性} > (\rightarrow \text{背景化})$   
 $\langle \text{属性主} \rangle < \text{属性} > \rightarrow [\text{個・状態}]$

同様に、お別れ会などで、その場から去る人が思い出を語るような場合も、自分が過去の存在であるかのように語ることがある。この場合も上と同様に、「評価レベル」が前景化していると考えていいだろう。

- (歓送迎会で送られる人が) 「大阪大学は美しかったです」

$\langle \text{属性主} \rangle < \text{属性} > (\rightarrow \text{背景化})$   
 $\langle \text{属性主} \rangle < \text{属性} > \rightarrow [\text{個・状態}]$

こうして見てくると、「認識レベル」だけでは説明できない場合があり、「評価レベル」の前景化を考える必要が出てくる。二つのレベルのどちらが前景化されているかは、前後の文脈や、場面的な設定で示されている。

したがって、文脈が分からなければ、二義的な解釈が出てくる場合もある。

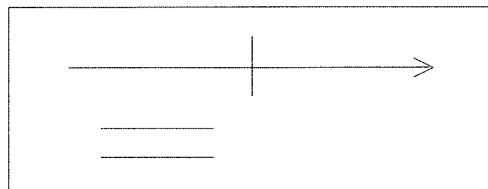
- ・「私、 父の存在が とっても頼もしかったの」

<属性主> < 属性 >  
<属性主>< 属性 >

この文だけ見ると、次の二通りの解釈が可能である。

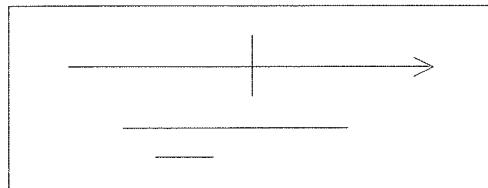
①父が既に他界している。

→ 「属性主=父の存在《個》=過去」の「属性=頼もしい《特性》」



②今は父を頼りに思う気持ちは無くなっている（父の生死は不問）。

→ 「属性主=私《個》」の「属性=父の存在が頼もしい《状態》=過去」



「評価者」が形容詞述語文の時間的側面に影響を与える場合があることを見てきた。形容詞述語文に意味役割の二重構造を認めるることは、一見煩雑にみえる。しかし、実例を分析していると、その必要性を強く感じた。実際の用例を見ていると、単純な（一重の）「属性主-属性」の構造だけではかえって無理な説明を考えざるをえない、というのが、現時点での筆者の結論である。[注5] [注6]

この二重構造がどのように記述に活かされるかは、第二部で具体的に示すことにしたいが、次に、ひとつ例をとりあげて、この構造を想定することの有効性を確認しておきたい。

### 3. 4. 2 「非過去形でも過去形でもいい」と言われる表現の本質

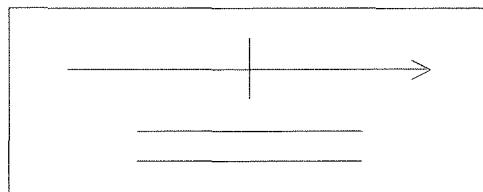
従来、次に見るように表現は、形容詞のテンス論で、「非過去形でも過去形でもいい」例として問題になってきた。

- (パリから帰国して) 〔「エッフェル塔は高いわよ」 ..... (I)  
「エッフェル塔は高かったわよ」 ..... (II)〕

この問題には、「認識レベル」「評価レベル」の二重構造が深く関わっている。結論を先に述べると、(I) は認識レベルが前景化した場合であり、(II) は評価レベルが前景化した場合である。それぞれを図式的に示すと、次のようになる。

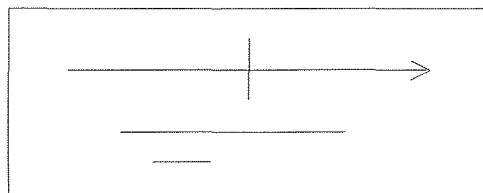
(I) 「エッフェル塔は高いわよ」

S T (発話時) を挟んで存在している「エッフェル塔 (属性主《個》)」の「高い」という《特性》を表現したもの。



## (II) 「エッフェル塔は高かったわよ」

S T (発話時) を挟んで存在している「話し手 (属性主《個》)」の  
「エッフェル塔は高い」という過去の一時的感情評価 = 《状態》を表現したもの。



従来、この表現は、形容詞のテンス論において動詞の場合と異なる側面として注目されてきた。動詞述語文の場合、基本的にはS T（発話時）とE T（出来事時）の前後関係だけでテンス形式の選択が説明できるのに対して、形容詞述語文の場合はこの例のように難しい場合がある。

形容詞述語文と動詞述語文の時間的側面の違いを考えるとき、まず注目しなければならないのは、形容詞の表す事態が動詞（運動動詞）の場合と異なり、「時間的な幅」を持っているという点であるが、さらに、もう一つ、形容詞述語文の「主觀性」の問題が時間的な側面にも大きな影響を及ぼすことを考慮に入れておく必要があるのではないだろうか。

以上、本章では、記述に先だって必要となる前提をさらに詳細に確認した。中でも、後半の形容詞述語文の二重構造を認めることができ、実際の記述にどのように役立つか、それを第二部の記述において示していきたい。

[注1] 本論文では時間的な側面を中心にみるので、「～だろう・～らしい・～そうだ」などの推量や伝聞の形については考察の周辺におくことにした。しかし、また稿を改めてきちんと整理したいが、内省で思うほど、これらの形は多くは用いられていない。形容詞の評価性のあり方ともからめて、きちんと整理する必要があることだけをここで指摘しておきたい。

[注2] Thompson (1988) に明言されているように、述部に立つ形容詞の談話的機能は、旧情報にpropertyをpredicateすることである。ここで例外とする「よい」「大丈夫だ」「ダメだ」などは、この機能から逸脱して、次のような話し手の「意図」を伝達する機能がかなり形式に焼きついている。詳細は稿を改めて検討する必要があるが、注意したいものとして、次のようなものがあげられる。

よかった	安堵（よかったヨ／#よかったネ）
	共感（よかったネ／よかったジャン／#よかったヨ）
だいじょうぶ？	相手の状態の確認・配慮（普通に会話を続けていいかの確認）
だいじょうぶ	応答（普通に会話を続けられることを伝える）
だめ	拒否・拒絶
すごい	賞賛・驚嘆
ばか	親しみを伴った揶揄
悪い	謝罪

[注3] 形容詞述語文の評価者は、はなしあいのテクストを分析している範囲では基本的に「話し手」であると考えて良い。ただし、「好悪」を表す「好きだ」「嫌いだ」「いとおしい」「にくい」などに関しては、はなしあいのテクストでも、話し手以外となる場合がある。

- ・「朝倉って子どもみたいなとこあってさ、変なモン好きだったのよね」(ロング：29)

|| <属性主><属性>  
<評価者>

しかし、一言付しておきたいのは、内省では三人称評価者が可能なこれらの表現でも、実例ではほとんどが一人称評価者のみである。

また、評価者の一般化（類化）が進んだ場合にも、話し手以外が評価者として表れる。

- ・寿子は、笑いながら努めてサラリと言った。／

「女ってさ、相手のことがどのくらい好きかバレるのが恐いって、あンのよ」

|| < 属性 主 > <属性> (ひとり：222)  
<評価者>

この「評価者」は従来「経験者」と呼ばれてきたものとほぼ同じである。この術語も研究者によって多少ゆれがあるようと思われるが、広く定義された「経験者」は、本論文の「評価者」とほぼ同じものを指している。しかし、「経験者」というと、どうしても心理動詞や感情形容詞との結びつきが中心となるように思われ、かなり動詞よりの用語規定になる。本稿では、後でみる樋口(1999)の用語に合わせ、「評価者」と呼ぶ。

[注4] 樋口(1999)は、形容詞や副詞の評価性について理論的に述べたもので、そこでは、次のような形で「認識・評価・感情」が把握されている。

評価は対象の認識なしには成立しない。(中略) ところで、認識と評価はどちらが先にあり、どちらが後にあるかということではない。それらはひとつにとけあっていて、あたかも認識的な活動を評価がつつみこむようにして、現実の世界を反映していく。(1999:1)

現実の世界を意識的に反映していく認識と評価は感情にもかかわっている。感情は、人間が体験する、快／不快をともなうところの、一時的な状態であって、ある刺激にたいする、主体的な反応を表現している。(中略)「うれしい」とか「悲しい」とかの心理的な状態は、人間が体験する、一時的な状態ばかりではなく、このような感情をひきおこす、原因としての対象をもたらえている。ある状況のもとに生じる人間の状態を、原因・結果の関係のなかにとらえていて、そうすることで人間はその対象との関係における自分の状態を意識する。感情における認識的な側面がここにある。そして、認識によって原因としてとらえられた対象が人間のもとに快／不快の感情をひきおこすとすれば、その感情をとおして、快の感情をひきおこす対象は《よい》ものとして、不快の感情をひきおこす対象は《わるい》ものとして、人間にとてのその対象の価値が表現される。感情における評価的な側面がここにある。(1999:2)

本論文における「二重構造」の設定は、実例分析の過程から生まれたもので、直接、樋口(1999)の影響を受けるものではないが、「二重構造」のレベルの名付けには、樋口の用語を用いる。「客観レベル・主観レベル」、「対象レベル・経験レベル」などと呼ばない理由は、第二部の具体的記述の中で次第に明らかにしたい。少なくとも、樋口の捉えるとおり、形容詞や副詞の意味構造の根本は、樋口がここで述べている「認識・評価」の一体性の中にあると考えている。

[注5] 本論文と同じように二重構造を設定する研究として、注目したいのが、工藤浩(1983)「程度副詞をめぐって」である。この中で工藤浩は、程度副詞の評価性について、慎重に論じているのだが、最終的に次のように述べている。

いわゆる程度副詞を、評価性に重点をおいて捉えるか、程度性に重点をおいて捉えるか、それとも、いずれかにかたよるにしても、その両面をつねにもつものとして捉えるか——本稿では最後の立場をとっているわけだが——なお、よく考えてみなければならない。工藤(1983:196)

形容詞の程度性と程度副詞の程度性を繰々に同一視しようというのではない。むしろここで注目したいのは、「評価性」という主観的な側面と「程度性」という客観的な側面の二つを同時に持つ存在として程度副詞を捉えることが、その本質を素直につかむ方法ではないか、とする工藤浩の考え方である。

[注6] この二つのレベルが、違う表現として表れる言語もある。アイヌ語は、いわゆる「感覚」を表す自動詞(アイヌ語は基本的に属性表現を自動詞で表し、形容詞を持たない言語である)の一

部で、この二つを表し分けている。（中川裕『アイヌ語千歳方言辞典』草風館 1995 用例 グロスは八龜）

- ・「私の手が痛い」

ku=tekehe *arka* [認識レベル] ※三人称は unmarked で接辞なし「私の手—痛い (vi)」  
私の 手 痛い

ku=tekehe ku=*koni* [評価レベル] ※一人称主格接辞を伴って、「私—私の手が痛い (vi)」  
私の 手 痛い

## 4章 第一部のまとめ

第一部では、形容詞述語文を記述するにあたって必要となる方法論を模索してきた。  
0章で、

- ①「述定用法」を「裝定用法」と訳、「述定用法」から記述する。
- ②「類型論的視点」を取り入れ、「動詞～形容詞～名詞」の連続相の中で捉える。

という基本方針を確認した。

1章ではそれを受け、まず、連続相の前提となる理論について確認した。

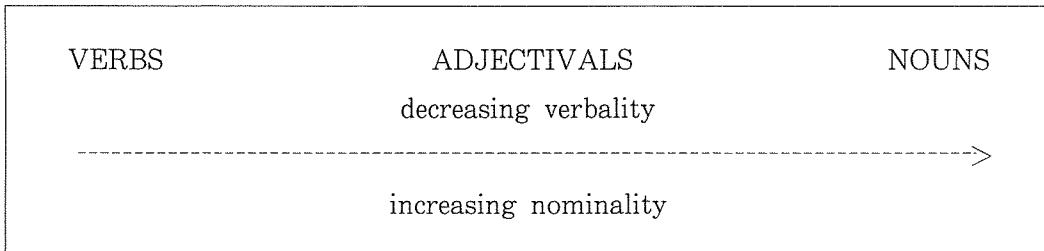
- Givón (1979,1984) : time stability hypothesis

N O U N S	A D J E C T I V E S	V E R B S
most time-stable	intermediate states	rapid change

- C. Lehmann (1999) : situation のアスペクト特性

static ←————→ dynamic				
atelic		telic		
atemporal		durative		termin.
class membership	property	state	process	ingress. punctual event

- Wetzer (1996) : continuum hypothesis

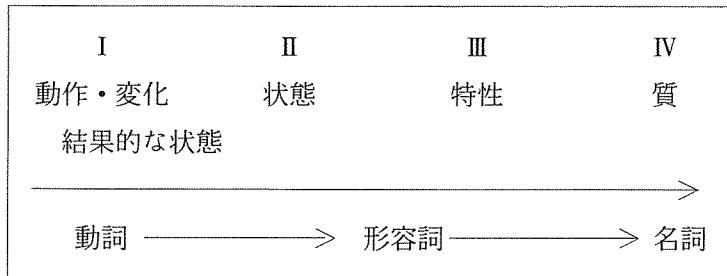


- Wetzer (1996) / Stassen (1997) 等 : tensed hypothesis

On the basis of the cross-linguistic tendencies stated in universals, I will venture the hypothesis that the selection of nouny or verby adjectival encoding can indeed be explained by reference to the tensed or non-tensed nature of the language in question. Wetzer(1996:290)

また、上にあげた以外で、大切な議論として、Bhat (1994)・Bhat (1999)、Thompson (1988)についても紹介した。

これらの類型論的な研究を参考に、現代日本語における「動詞～形容詞～名詞」の連続相を、言語学研究会系の先行研究をまとめ形で作業仮説的に想定した。



そして、この4段階の把握において、大きな意味を持っている「時間的局所限定の有無」(出来事の時間的現象化の個別・具体性の有無)について、奥田靖雄 (1988) を参考にま

とめた。

時間的局所限定 有 [前図の I、II]

- ・客体の存在のあるモメント（断片）を記述。
- ・うつりかわっていく、特定の世界の状態を特徴づけている。
- ・偶発的なものである。

↑ ↓

時間的局所限定 無 [前図の III、IV]

- ・時間から相対的に独立している、対象の特徴付けをさしだす。
- ・世界そのものの特徴付であり、その世界にとって、あたえられた陳述は真実。
- ・本質的なものである。

さらに、動詞述語文・形容詞述語文・名詞述語文が、この四段階とどのように関連しているかを（配慮すべき細かい点を捨象して）、俯瞰した表を提示した。

		静 態 的 (出 来 事)			
		I	II	III	IV
動 詞 述 語 文	運動動詞	静態動詞	<超時的な質規定文>		
	完成相 継続相 パーフェクト 反復相	・庭に蛇がいる／ 山がそびえている	・人は死ぬ／ 鳥は飛ぶ		
形容 詞 述 語 文		状態形容詞	質形容詞		
		・今日は顔が青い ／昔が恋しい	・象は鼻が長い／ 暗闇は怖い		
名 詞 述 語 文		<状態> <滞在> <動作> ・彼女は怠け者だ	<特性> <関係> ・男はみんな狼だ	<質> ・鯨は哺乳類だ	

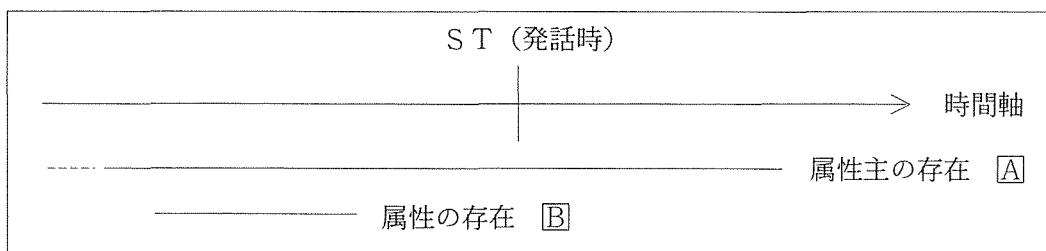
2章では、記述にあたっての基本的な立場や道具立てをより詳細に検討した。まず、属性表現を記述する「軸」を定めるため、典型的な「一時的属性表現」と「恒常的属性表現」を比較し、その特徴を洗い出した。

	典型的な一時的属性表現	典型的な恒常的属性表現
時間的局所限定	有=アクチュアル	無=ポテンシャル
属性主	特定の個人や物 = 《個》	総称名詞 = 《類》
属性	属性主にとって臨時に獲得・付与されたもの	属性主が存在している限り消滅しないもの
属性主と属性の結び付き	臨時の・場面依存的 話し手の主観への依存度大	本質的・一般的 誰でも当然の結び付きと認定可

そして、さらに具体的な記述の道具立てを探るため、今までの形容詞のテ ns 論から問題点を拾い出し、次のような点がポイントとなることを確認した。

- ①属性主のタイプ 《類》 or 《個》
- ②属性主と属性の結び付きのあり方 → 時間的局所限定の有無  
アクチュアル or ポテンシャル
- ③発話時 (speech time) との時間的前後関係
- ④話し手側の判断時 (工藤 1988 の用語) の関与

このうち、基本となる①～③を基準に記述の順番－場合分け－を考え、視覚的に見やすく図示する手段として、次のような図式を提案した。

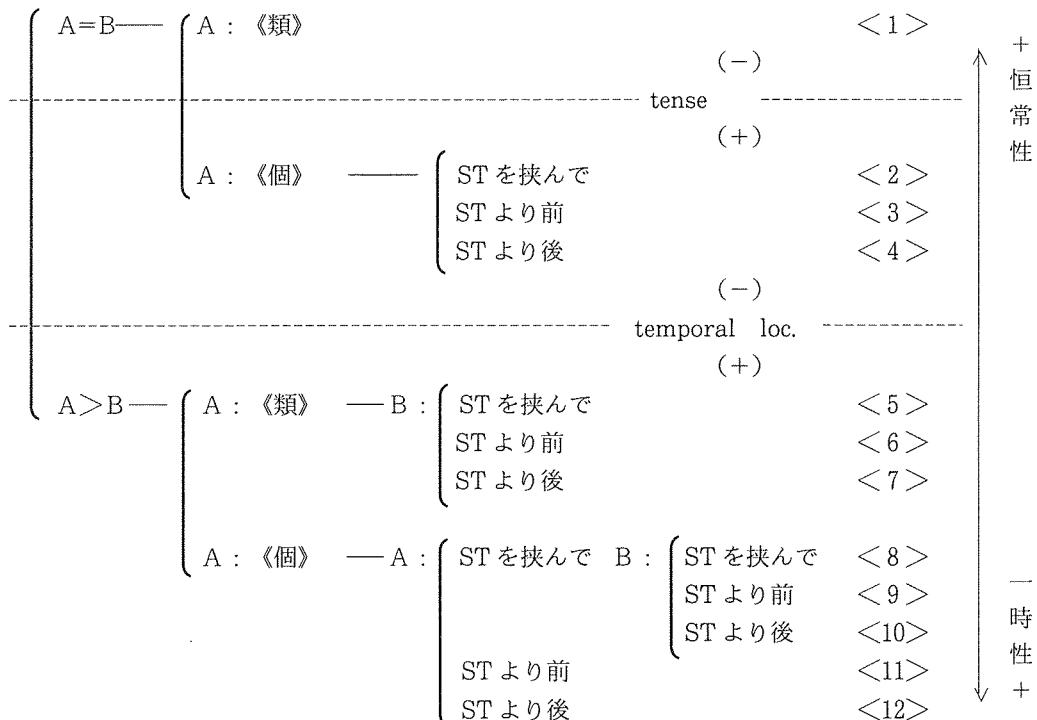


- ①属性主のタイプ →線のタイプで図示
- ・総称名詞 《類》 → A の両端が点線
  - ・特定の個人や物 《個》 → A は単なる実線
- ②属性主と属性の結び付き →線の長さで図示
- ・本質的=時間的局所限定無=ポテンシャル →  $\boxed{A} = \boxed{B}$
  - ・臨時の=時間的局所限定有=アクチュアル →  $\boxed{A} > \boxed{B}$
- ③発話時との時間関係 → S T (speech time) との前後関係で図示
- ・S T を含んだ時間帯に存在 → S T を挟む
  - ・S T より過去の時間帯に存在 → S T より左
  - ・S T より未来の時間帯に存在 → S T より右

これらの組み合わせとして、次の 12 通りの組み合わせが考えられる。

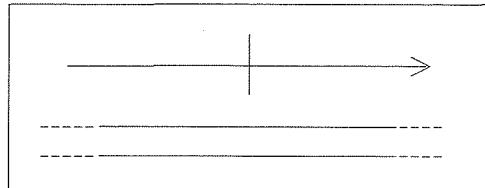
### 必要と思われる場合分け

#### ○属性主と属性の関係

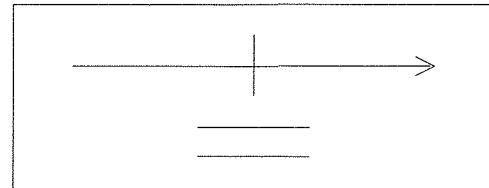


このままではわかりにくいので、先ほどの図でこの 1 2通りを表すと次のようになる。

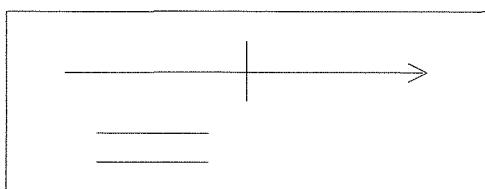
<1>  $A = B$  A : 《類》



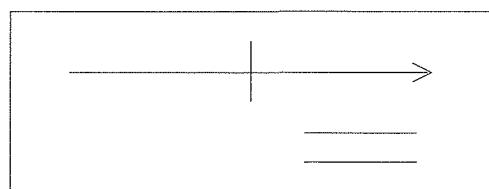
<2>  $A = B$  A : 《個》 S T挟んで



<3>  $A = B$  A : 《個》 S T前

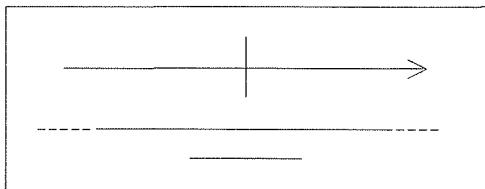


<4>  $A = B$  A : 《個》 S T後



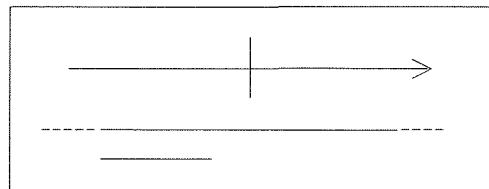
<5>  $A > B$  A : 《類》

B : S T挟んで



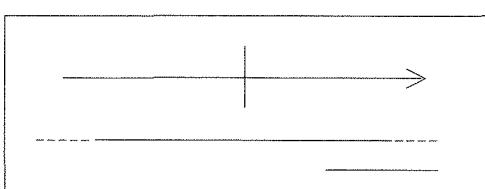
<6>  $A > B$  A : 《類》

B : S T前



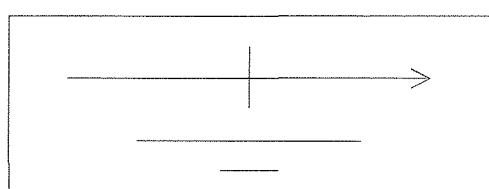
<7>  $A > B$  A : 《類》

B : S T後

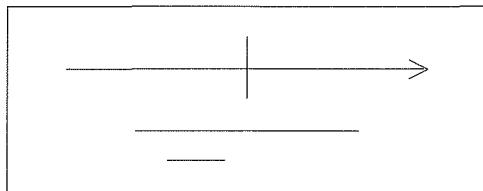


<8>  $A > B$  A : 《個》

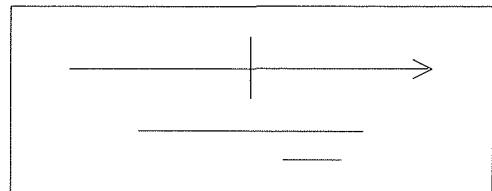
$A \neq B$  : S T挟んで



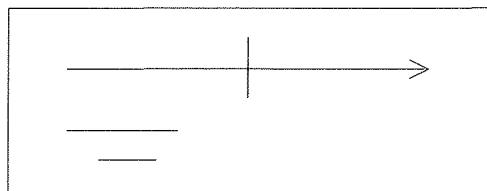
<9> A>B A : 《個》  
A : S T挟んで B : S T前



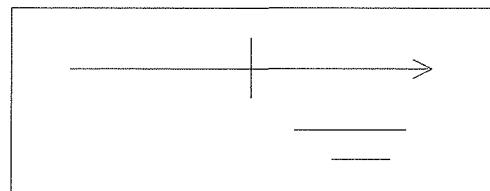
<10> A>B A : 《個》  
A : S T挟んで B : S T後



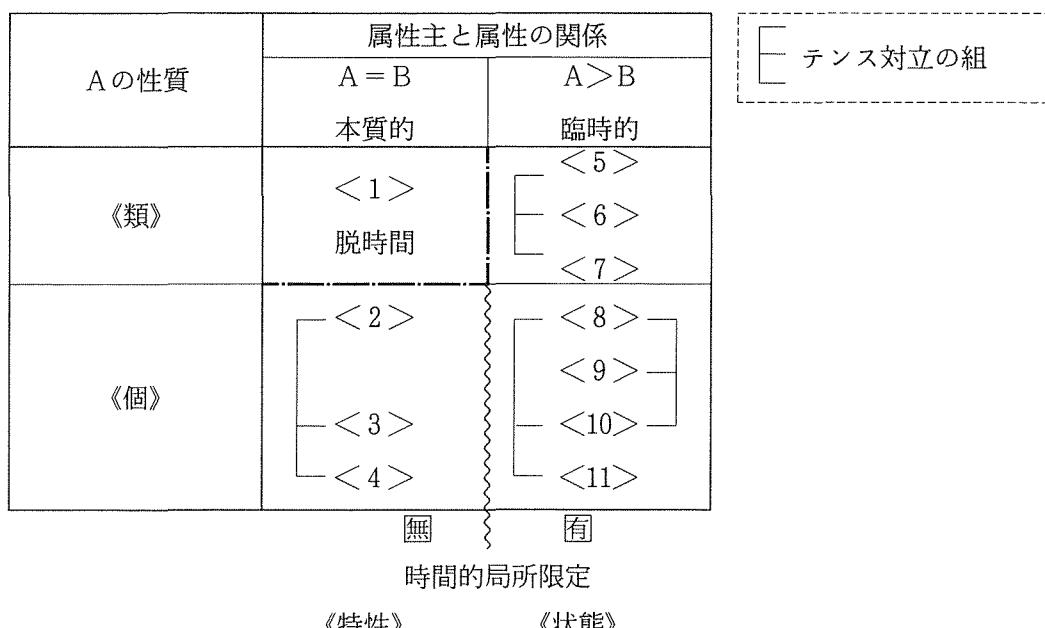
<11> A>B A : 《個》 S T前



<12> A>B A : 《個》 S T後



そして、従来わかりにくくとされていた、形容詞のテンス対立を次の図のように整理した。



3章では、記述するにあたって確認しておくべき点を、さらに詳細に確認した。まず、はじめに研究の対象とする表現について次のような限定をした。

- テキストタイプ：基本的に会話文（工藤 1995 の言う「はなしやすいのテキスト」）
- 文タイプ：基本的に「平叙文・肯定」に限定（その中でも断定を中心）  
感嘆文（一語文）についても基本的に対象外とする
- 意味的：奥田（1988）の言う《特性》と《状態》を表す文中心  
(→《関係》を表すようなものは扱わない)
- 取扱いに注意し周辺的なものとして扱う形容詞：  
「ない」「ほしい」「よい」「大丈夫だ」「駄目だ」など

また、形容詞の格支配力が弱いことを考え、「属性主」「属性」については、形態的な特徴だけでなく、意味的な関係を加味し、ゆるやかに規定し、柔軟に研究対象として扱うことを確認した。

#### 「属性主」

- 基本的傾向：《特性》を表す形容詞述語文の「属性主」→「ハ」でマーク  
《状態》を表す形容詞述語文の「属性主」→「ガ」でマーク
- 実際の会話文でよく見られる形：  
ゼロマーク／「～って」／「～なんて」／「～て（で）・と」／「～たら」

#### 「属性」

- 基本方針  
属性 = 「属性主に対して predicate されている property 全体」
- ※「感情・感覚形容詞」述語が表すものも「属性」
- ※「側面語」／「部分語」+形容詞全体→「属性」

また、形容詞述語文の主観性について、動詞述語文と比較しながら考察し、形容詞述語文の主観性の本質を、「評価性」にあるとした。

さらに、形容詞のタイプに関わらず、形容詞述語文全体に「認識」「評価」の二つの意味的なレベルを認めた。

- ・「僕は、そういう寂しい考え方 嫌いです」

<属性主>	<属性>	認識レベル
<属性主><	属 性	> 評価レベル

そして、このように二つのレベルを考えることで、従来「非過去形でも過去形でもいい」といわれてきた表現や、二義的な表現についても説明ができるなどを確認した。

以上が、第一部「方法論編」の概観である。



## 第二部 記述編

第一部では、適切な記述に必要となる「道具立て」を理論的に模索した。第二部では、その方法論を用いて、具体的に「属性表現の連続的なありさま」を観察・記述していく。まず5章では、時間的局所限定の無い《特性》表現を中心に据えて、どのような場合にアクチュアル性が増すかを観察する。次の6章では、逆に、時間的局所限定の有る《状態》表現を中心に据えて、どのような場合にポテンシャル性が増すかを観察する。

観察・記述の中で、第一部で用意した記述の「道具立て」の有効性を示すことになるが、同時に、結論を先取りして言うと、「アクチュアル－ポテンシャル」の対立が鮮やかに現れるのは「現在」の場合であり、「過去」や「未来」では、それぞれ別の理由から、その対立が曖昧化する、ということも明らかにしていく。

## 5章 《特性》を表す表現

本章では、時間的局所限定の無いポテンシャルな属性表現—すなわち《特性》表現—について、観察・記述する。

まず、「時間的局所限定 temporal localization」の定義について確認を行う（5. 1）。その上で、ポテンシャル性の高い、いわゆる「脱時間」表現について記述し（5. 2）、その後、テンス対立のある《特性》表現について記述する（5. 3）。最後に、名詞述語文との連続面を、佐藤里美（1997）の記述に基づいて探っていく（5. 4）。

### 5. 1 時間的局所限定について

先に2. 3で導入した「時間的局所限定 temporal localization」という術語について、ここで再規定をしておきたい。

なぜ、ここで再確認をするかというと、日本語研究では、この用語について二つの定義が錯綜しており、それに伴って、顕在 actual—潜在 potential の規定も錯綜している。具体的な記述に入る前に、ここで一度整理し、本論文の立場を明らかにしておきたい。

二つの立場の違いは、「テンス」と「時間的局所限定」を同じものと考えるか、否かによって生じてくる。すなわち、次の二つの立場がある。

- ①テンス対立の有無＝時間的局所限定の有無
- ②テンス対立の有無≠時間的局所限定の有無

このうち、①が優勢な考え方であり、②は奥田をはじめ、言語学研究会を中心とする立場である。

①の立場では、例えば仁田（1990）に次のような記述がある。

- ①仁田（1990:454）

「テンスが存在するためには、文の表している言表事態が、何らかの点で、その生起・存在をある特定の時間的位置（時間的位置はある程度幅をもっていてもよい）に位置づけられる顕在的な事態であることが基本的に必要になる。ある特定の時間

的位置に位置付けることができない潜在的な事態は、事態の生起・存在をある特定の時間的位置に位置付けることができないことによって、言表事態と発話時点との時間関係を取り結べない。発話時点との一定の関係を取り結べないことによって、そういった意味的類型の事態を表す文は、テンスを持たないことになる。」

②の立場の工藤（1995）の記述を筆者なりにまとめると、次のようになる。

②工藤真由美（1995:25-35） ※筆者によるまとめ

時間に関連する機能・意味的カテゴリーとして、次の3つを考える。

時間的限定性・<出来事の時間的現象化の個別・具体性の有無>

- ・現代日本語には形態論的表現手段は無い。
- ・広義モダリティ（アクチュアリティーの有無）と相関する。
- ・アスペクト・テンス対立の基底にある。

テンポラリティー・<出来事の時間的位置づけ方の様々>

- ・中心的表現手段は、形態論的テンス
- ・テンス<発話時との外的時間関係＝ダイクティックな位置づけ>

アスペクチュアリティー・<出来事の時間的展開の様々>

- ・中心的表現手段は、形態論的アスペクト
- ・アスペクト<動態的出来事の内的時間の把握の仕方の相違  
=時間的限界づけの有無>

※temporal localization を工藤（1995）では時間的限定性と訳している

①と②の違いの根本には、①が時間的なカテゴリーとしてアスペクトとテンスだけを（形態論的にも意味論的にも…時にこの違いは日本語学では曖昧になりがちである…）取り出すのに対して、②は、時間的局所限定とテンポラリティー、アスペクチュアリティーの3つを取り出しているところにある。

本論文は、すでに第一部から見てきているように、②の立場をとる。

動詞述語文の分析が中心であった間は、（一部の例外を除き）「アクチュアリティーの有無」＝「テンス対立の有無」であって、「鳥は飛ぶ」のようにポテンシャルな表現は、「脱時間表現」となるので、①の考え方でも、分析に困ることはあまりなかった。

しかし、形容詞述語文では、ズレが生じる。このことは、形容詞述語文の本質と関わる重要なポイントになる。

- 死んだ兄は背が高かった。

<属性主><属性>

という表現を考えると、「兄」にとって「背が高い」のは、本質的で potential な property であるから、時間的局所限定は「無い」（繰り返すが、時間的局所限定を表す形態論的手段はない）、ポテンシャルな表現である。しかし、属性主である「兄」は発話時（S T時）存在していないので、テンス対立は「有る」ことになり、過去形が用いられている。[注1]

このように、アクチュアリティーの有無はテンス対立の有無と一致しない。これを確認することで、従来よくわからなかった形容詞述語文のテンス対立のありかたが見えることは、すでに 2. 3 で示したとおりである。

### 5. 1. 2 時間的局所限定を形態論的に明示する言語・方言

現代日本語（標準語）には、時間的局所限定を形態論的に明示する手段が無いため、時間的局所限定というカテゴリーの存在自体が、説明のためだけに用意された極めて恣意的なもののように思われがちである。

しかし、様々な言語や日本語の方言には、この時間的局所限定を形態論的に明示するものがある。スペイン語の例は有名であるが、少し他の言語や方言もみておこう。

#### • スペイン語

Juanita es guapa. ‘Juanita is pretty.’ 無

Juanita esta guapa. ‘Juanita is looking pretty.’ 有

Lehmann(1999:44)

#### • チベット語

nga'i skra dkar bo yin. 私の髪は白い。 無

私の 髪 白い 叙述助動詞

nga'i skra dkar bo yod. 私の髪は（チョークなどの汚れで今だけ）白い。 有

存在助動詞

武内 (1990:10)

## ・宇和島方言（存在動詞）

あの山にはへびがおる。 <非一時的> 無

この間、山行ったんやが、まだわらび、ありよったぜ。

<時間の中への顕在化を明示>有

工藤 (1995:290)

## ・熊本方言

ヤッチロノ トマトワ アッカ。 無

(八代の)

コン トマトワ サッキマデ アッカリヨッタ。 有

村上智美 (personal communication) [注 2]

形態論的手段を持たない現代日本語（標準語）では、どのような条件のもとでどのように時間的局所限定の有無が表されているのだろうか。これから、観察・記述していきたい。

## 5. 2 いわゆる「脱時間」表現

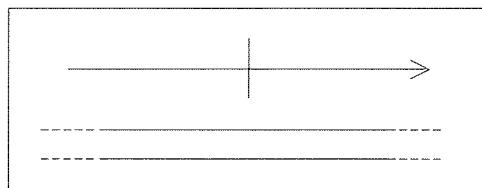
## 5. 2. 1 典型的な「脱時間表現」

まず、典型的な「脱時間表現」から見てみよう。

・海は広い。

・空は青い。

これらは、



《類名詞》 + は + 《質（属性）形容詞》

となり、「属性主」と「属性」この結びつきが、評価者によって揺れない。すなわち、誰が見ても必然的な結びつきであり、社会的に「真理」であると認められているような「《類》の《特性》」である。これが、最もポテンシャルな属性表現である。

このような場合は、「認識レベル」のみが意識され、「評価レベル」は完全に捨象されて

いる。

この結びつきが主観的になり、評価者（すなわち《個》）によって揺れるようになると、可変性が増す。すなわち、アクチュアル性が増すことになる。

節を改めて、どのような場合にアクチュアル性が増すかを、実例を中心に探っていこう。

### 5. 2. 2 「評価レベル」と「脱時間」の関係

「時間的局所限定の有無」は、先に工藤（1995）のまとめで確認したように、「出来事の時間的現象化の個別・具体性の有無」である。従って、なんらかの形で、一般性が薄れ、個別・具体化が進むと、「脱時間表現」はアクチュアル性を増すことになる。実例を中心に、どのような場合にアクチュアル性が増すかを観察してみよう。これらの条件は、もちろん重複して表れることもある。多くの場合、評価者による主觀の関与があり、「評価レベルの前景化」が関連している。

①属性の結びつきに評価者の主觀性が強く感じられる場合。

- ・しばらく考えていたイサムがしみじみと言った。／「強いよなあ、女って」  
(神様 : 343)
- ・「だって、仕事のない男なんて価値ないもん」／公子がすばりと言ってのけた。  
(ひとり : 184)

評価レベルにおける「評価者 = 《個》」が意識される。

評価者によって、<属性主>と<属性>の結びつきが「可変的」である可能性が増す。  
→アクチュアル性が増す。

②<属性>にいわゆる《状態（感情・感覚）形容詞》が来る場合。

- ・「泊めてくれないか」／すがるように津村は言った。／「弱い男は大っ嫌い」  
(ひとり : 144)
- ・夜の中を、まどかはグングン歩いた。／  
「ほんとの恋って楽しいねーっ、生きてる感じするよねーっ」(ひとり : 189)

評価レベルにおける「評価者=《個》」が意識される。

評価者によって、<属性主>と<属性>の結びつきが「可変的」である可能性が増す。  
→アクチュアル性が増す。

#### ③条件付きの場合。

- ・「人生ってさ、暗いとこ見れば暗い。でも明るいとこ見れば明るいんだよね。」  
(神様 : 338)

条件によって、<属性主>と<属性>の結びつきが「可変」であることが示されている。  
→アクチュアル性が増す。

#### ④外的な刺激から、実感として一般的な原理を導き出している場合。

いわゆる「発見」「再確認」的なニュアンスが加わる。

- ・そんなふたりに、瀬名のピアノが温かく流れ続ける。涼子がふとつぶやいた。「ピアノの音ってやさしいね」／「ああ……」(ロング : 435)
- ・総務部のオフィスでは男子社員たちが隅の方に固まって、ひそひそしゃべっていた。  
「そりゃすごかったよ。しかし、あの顔でやるもんなア。女は恐いよ」(ひとり : 216)

評価者 (=《個》) による、具体的 (・一回的) な刺激がきっかけになっている。

→アクチュアル性が増す。

さらに、<属性主>は《類》ではあるが、具体的な《個》から敷衍されたものであることが明らかである。

→アクチュアル性が増す。

ここで、ひとつ書き留めておきたいのは、このようにアクチュアル性が増すと、いわゆる「のだ文」や「ものだ文」が用いられることがあり、その方が落ち着きがいいように感じられる場合も多い。

- ・「私、生き方変える。腰据えて生きる」／「バカ。腰の据わった女なんか、重たいばっかでかわいくないんだよッ」(ひとり : 249)
- ・(※殺人を自供して) たか子はゆっくりと煙を吐き出した。／「難しいもんね、完全

犯罪って／古畠は黙ってうなずいた。(古畠2:104)

なぜ、このような現象が起きるのかを十分に説明するだけの準備がここではない。「説明のモダリティー」と呼ばれるものについて、もう少し考えを深めなくてはならない。ここでは、事実の指摘に留めておきたい。

### 5. 2. 3 他品詞を述語に持つ「脱時間」の表現

本研究の目的は、形容詞を「名詞～動詞の連続相」の中で捉えることにある。そこで、他品詞を述語にもつ脱時間表現についても、少し目を向けておきたい。ただ、ここはあくまでも、上で確認した形容詞述語文の脱時間表現との共通性に重点をおき、粗々の記述を示すのみである。ここでは、動詞述語文の脱時間表現についてみておく。名詞述語文に関しては、あとで(5. 4)見る。

動詞述語文で「脱時間表現」といわれるものの典型例は、次のようなものである。

- ・鳥は飛ぶ。
- ・人は死ぬ。
- ・国會議員は選挙で選ばれる。
- ・医者は患者を診察する。

基本的には、次のような形をしている。

《類名詞》 + は + 《動詞句：動詞はスル形》

※他動詞で目的語がある場合は、目的語も《類名詞》。

これらの表現は、すでに「出来事」を描いているのではなく、「属性表現」であり、「鳥は／人は…」は、<動作主>ではなく<属性主>となっている。

そして、形容詞述語文の場合と同様、典型的なものは、「属性主」と「属性」の結びつきが必然的で、評価者によって揺れない。

これらの動詞述語文も、形容詞述語文の場合と同様、アクチュアル性が増す場合もある。

- 男は外で働くものだ。

評価者の主觀性が強く感じられる。

評価レベルにおける「評価者=《個》」が意識される。

評価者によって、<属性主>と<属性>の結びつきが「可変的」である可能性が増す。

→アクチュアル性が増す。

- (友人の訃報を聞いて) 人は死ぬんだよね。わかっててもつらいよねえ。

評価者 (=《個》) による、具体的(・一回的)な刺激がきっかけになっている。

→アクチュアル性が増す。

さらに、<属性主>は《類》ではあるが、具体的な《個》から敷衍されたものであることが明らかである。

→アクチュアル性が増す。

上の二つの用例を見てもわかるように、形容詞述語文の場合と同様、これらの場合も、「のだ文」「ものだ文」の方が落ち着きがいい。

この節の最後に、属性主が《類》の《特性》表現でありながら、過去形が用いられる場合について少し触れておく。属性主の語彙的意味の中に、時代的な限定が含まれており、発話時には存在しない《類》の場合、次のように過去形が用いられる場合がある。

- 縄文人は背が低かった。
- 明治女性はおとなしかった。
- 騎士は忍耐強かった。

これらは、非過去形の場合には、普通に脱時間表現として捉えられる。

- 縄文人は背が低い
- 明治女性はおとなしい。
- 騎士は忍耐強い。

脱時間表現の特殊な場合として、「《類》全体が発話時に存在していないことが語彙的意味で明らかな場合は、過去形を用いることができる」と考えるのが穩当ではないかと思われる。

ただ、時代的限定のあり方と、時間的局所限定の有無については、修飾成分のあり方とも関連して、少し慎重に考える必要があるので、6. 1で改めて検討する。ここでは現象の指摘のみで留めておきたい。

### 5. 3 テンス対立を持つ《特性》表現

#### 5. 3. 1 「属性主」の性質とテンス対立

何度も確認をしているが、《特性》を表す表現は、属性主の本質的な property を表すポテンシャルな表現である。したがって、属性主が存在する限り、(原則的に) それに付随して property が存在する。すなわち、時間的局所限定は無い。

この特徴から、《特性》表現は、属性主が《類》の場合は、「脱時間表現」となるが、属性主が《個》の場合は、属性主の存在が時間的に具体化しており、「永久に存在すること」は不可能となる。

したがって、「属性主の時間的存在」と「S T (発話時)」の前後関係が問題になり、テンス対立を有することになって、次の表のようにテンスが分化する。

<属性主> の時間的存在が	$\left\{ \begin{array}{ll} S T \text{より前} & \text{「過去」 過去形} \\ S T \text{を挟んでいる} & \text{「現在」 非過去形} \\ S T \text{より後} & \text{「未来」 非過去形} \end{array} \right.$
------------------	---

このタイプの典型は、次のような形をしていて、脱時間との違いは<属性主>の性質のみである。

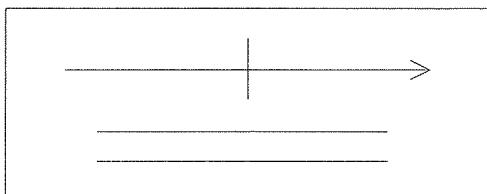
《個名詞》 + は + 《質（属性）形容詞》

以下、「現在 5.3.2」「過去 5.3.3」「未来 5.3.4」の順に観察・記述していく。

### 5. 3. 2 現在を表す《特性》表現

「現在を表す《特性》表現」は、S T（発話時）を挟んで存在している<《個》の属性主>の《特性》を表す。形容詞は非過去形を用いる。例えば、次のようなものである。

- ・「ねえさん、軽いな。四十五キロ」／「どうしてわかるの？」／「俺、三十年も工場の荷役やってっから。世間のことは何も知らないねえけど、物の大きさとめかたとは、ぴったりわかるんだ」（月の：22）
- ・真生は苦しげに話し出した。／「私の命は短いの。短いからこそ、自分でやれることが何かある気がするの」（神様：285）



一見、脱時間の表現と区別する必要がないようにも思えるが、「属性主が《個》であり、時間的に束縛された存在である」ことが、たとえば次のような例文から伺うことができる。

- ・「瀬名は人がいいねえ」／「そう？」／「空は青いし、海は広いし、瀬名は人がいい」／「何だ、それ？」／「うん？ そんな感じがするってことよ。未来永劫人がいい」
- （ロング：233）

この例文には、脱時間表現と、現在の《特性》表現のコントラストが鮮やかに出ている。つまり、「空は青い」「海は広い」は脱時間表現であり、未来永劫続くのだが、「瀬名は人がいい」は、瀬名が生きている間に限り有効であって、脱時間表現ではなく、未来永劫続くことはありえない。だからこそ、この台詞は修辞的に効果があると解釈できる。

上でみたように、現在の《特性》表現は、脱時間表現と比べると、属性主が具体化している分、ポテンシャルな中にもアクチュアル性が増している。つまり、属性主にとって、属性は本質的であり、あくまでもポテンシャルな《特性》表現ではあるが、属性主そのものは《個》であって、脱時間の時の《類》に比べると具体化している。

そして、さらに、次のような場合には、よりアクチュアル性を増すことになり、ポテン

シャルからアクチュアルへの連続性を示す。前の脱時間の場合と同様、これらの条件は、重複して表れる場合もある。

①属性の結びつきに評価者の主観性が強く感じられる場合。

- ・「でも寿子さんって、どっか魅力的なんだと思う。どっか」／「そ、そ。チラッと見るとボロ雑巾みたいだけど、よく見ると何か女っぽいのよ」(ひとり：170)
- ・ほんと、私ってきれい —ショーウィンドーの自分に見とれながら、まどかは思う。— 結婚相手への条件が厳しくなるのも当然よね—(ひとり：4)

評価レベルにおける「評価者=《個》」が意識される。

評価者によって、<属性主>と<属性>の結びつきが「可変的」である可能性が増す。  
→アクチュアル性が増す。

②<属性>にいわゆる「状態（感情・感覚）形容詞」が来る場合。

- ・そういうながら武志はぶらぶらと廊下を歩いていきます。そして、「ここは風通しがよくて気持ちいい」と、階段のいちばん下の段に腰を降ろしました。(地下街：111)
- ・「おまえ、また例の結城って女の人に電話をかけるのか？」／「当然だよ。あいつは歯ごたえがあって面白いんだ。おまえもやるか？」(地下街：123)

評価レベルにおける「評価者=《個》」が意識される。

評価者によって、<属性主>と<属性>の結びつきが「可変的」である可能性が増す。  
→アクチュアル性が増す。

③条件付きの場合。

- ・「そういう考え方しかできない人に、死んでも彼女は渡せません」／星野の手を、津村はピシリと払いのけた。／「ベタベタくっついて、撫で回しているだけが愛情だと思っているなら、君は青いよ」／二人の視線がぶつかりあった。(ひとり：50)
- ・マンションに入ると、杉崎はさっそくたこ焼きを食べ始めた。／「たまに食べると美味

しいんだよね、こういうの」(ロング：400)

条件によって、<属性主>と<属性>の結びつきが「可変」であることが示されている。  
→アクチュアル性が増す。

④外的な刺激から、実感として<属性主>の《特性》を導き出している場合。

- ・「ヤクザはカタギには手を出しません」／津村が少し冷やかすように笑った。／「北川さんは真面目ですね」／「人間にいちばん大切なのは、誠実さと真実であると思っています。(後略)」(ひとり：244)
- ・「瀬名、やさしいね。さっきわざとビール吹き出したでしょ。るうちゃんが挙げた手振り下ろせないでいるの見て」彼のおもいやりが、南にはすぐわかった。(ロング：259)

いわゆる「発見」「再確認」的なニュアンスが加わる。

評価者(＝《個》)による、具体的(・一回的)な刺激がきっかけになっている。  
→アクチュアル性が増す。

⑤「いつみても」「時々(～って思う)」等と共に起する場合。

- ・「お宅のお子さん、いつ見ても背が高いわねえ」
- ・「時々さあ、お前の顔かわいいなあって思うんだよね」

④を多数回経験していることが「いつみても」「時々」で示されている。[注3]  
具体的な刺激に基づく評価を数回行ったことが明示される。  
→アクチュアル性が増す。

「やっぱり(やはり)」はこの④⑤の表現と共に起しやすい傾向がある。

- ・「明け方になってやっと寝たみたいだからさ」／「やっぱり、瀬名はやさしい。その思いやりに南はキュンときた。(ロング：119※心中語)

また、脱時間と同様にアクチュアル性が増すと、いわゆる「のだ文」「ものだ文」が用

いられることが多い。[注4]

以上、見てきたように、現在の《特性》表現では、「脱時間」の表現と同様、「ポテンシャルーアクチュアル」の連続的なりさまが、くっきりと浮かび上がってくる。しかし、次に見る過去や未来の《特性》表現では、「ポテンシャルーアクチュアル」の連続的なりさまは、これほど鮮やかに観察することができない。それぞれの場合について、下に記述していく。

ところで、節を改める前に、属性主がSTを挟んで存在しているにもかかわらず、その《特性》表現に「過去形」が用いられているように見える場合について触れておきたい。これが従来、「過去形でも非過去形でもいい」と言られてきた表現である。この表現については、先に、3. 4. 2でも見たが、ここでもう一度簡単にあげておく。

(パリから帰って)

- エッフェル塔は高いわよ。 .. (1)
- エッフェル塔は高かったわよ。 .. (2)

(1)は、「STを挟んで存在している<属性主《個》>」の《特性》表現であり、ここでは、「認識レベル」が前景化されている。これに対して、(2)は、評価者《個》の「パリ滞在時=過去」における一時の感情評価 (=《状態》) の表現であり、「評価レベル」が前景化されている。(図示などは3. 4. 2を参照)

### 5. 3. 3 過去を表す《特性》表現

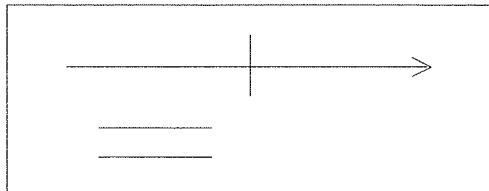
「過去を表す《特性》表現」は、ST(発話時)より前に存在していた(逆に言えば、ST時には既に存在していない)<《個》の属性主>の《特性》を表す。形容詞は過去形を用いる。例えば、次のような例である。

- 「そんなやかましい人には見えなかったけど」／「いやいや。(※父は) ものすごく神経質だった。僕もおふくろも弟も、完全に管理されてたな。ポックリ逝ったのは、ストレスだね」(月の: 83)
- 「田代さん(※昨晚殺された人)は人を驚かすのが大好きだったっていうじゃないですか

か。仲間をびっくりさせるのに生きがいを感じるタイプの人だったそうです」

(古畠1:45)

- ・(手紙文中) 大会でのあなたのダンス、とても素晴らしかった。教室で踊っていたあなたより、もっと素敵に踊ってた。(ダンス:285)



<属性主>になるのは、「死者」「すでにない地名」「文脈上すでに無いことが明らかなもの」「過去の出来事」等である。例外的に「別れた異性」は、生きていても「過去の人」らしく、ここに入る [注5]。

- ・「別れた彼って背が高かったのよね」

ここで「別れた彼って背が高いのよね」と非過去形を用いると、未練があるように聞こえる。

また、自明のことではあるが、既に死んだ人物が属性主でも、写真などを見て話している場合は、写真の中の人物の《特性》として語ることもあり——すなわち現在の《特性》表現になる。

- ・木暮は札入れから一枚の写真(※殺された孫娘の写真)を取り出して古畠に差し出した。／「見せるの初めてだったな。洋子だ」／古畠は写真を覗き込んだ。／「高校二年生だったよ。三十過ぎたらいい女になる顔だ。そうは思わんか」／「この時でも充分お綺麗です」(古畠2:217)

ところで、過去の《特性》表現は、現在の《特性》表現の時のように、「ポテンシャルからアクチュアルへ」の連続相が鮮やかに浮かび上がらない。その原因を考えてみよう。

基本的に、このタイプの表現は、「認識レベル」における<属性主>の時間的なあり方

から「過去」になっていると考えることができる。

特に、評価者が明示されていない場合は、「認識レベル」が前景化していると思っているだろう。

- ・「亡くなった父は、背が高かったのよ」

( 話し手 ) 「亡くなった父は、背が高かったのよ」  
 <属性主《個》：過去> <属性《特性》>

しかし、現在の《特性》表現と比べると、現在の場合は、かなり客観的であり、評価者の存在があまり意識されないのに対して、過去の場合は、評価者が自分で過去のある時点において確認している、という主観的な（evidentialな）ニュアンスが強いように思われる。

- ・「うちの父は、背が高いのよ」 現在の《特性》表現
- ・「亡くなった父は、背が高かったのよ」 過去の《特性》表現

過去になると、現在の場合に比べて、「評価者による、過去の一時的感情評価《状態》」が前景化されていると考えることができる。

( 話し手 ) 「亡くなった父は、背が高かったのよ」  
 <属性主《個》：過去> <属性《特性》>  
<評価者《個》：現在も存在> <評価：一時的感情評価《状態》：過去>

特に、程度副詞が用いられていると、評価レベルが意識される。これは、工藤浩（1983）が指摘するように、程度副詞には評価性の側面があるためであると思われる。

- ・「亡くなった父は、かなり背が高かったのよ」
- ・「亡くなった父は、結構背が高かったのよ」

本論文は、すべての形容詞述語文に「認識レベル」と「評価レベル」の二重構造を認める立場であるが、過去の《特性》表現の場合、このどちらのレベルが前景化しているかが、曖昧になる。実際に、二つの意味役割のレベルが絡み合ってひとつの表現を作り出していく

る以上、この場合のように、どちらが前景化しても過去形を用いることになる時に、この二つを無理に判別（区別）しようとするとはかえって言語事実を歪曲することになるのではないかと思われる。

逆に言うと、どちらでも表すことができるので、言語や方言によっては、「評価レベル」だけで、このタイプの属性表現を行っている可能性がある。一般に、形容詞にテンスがないように言われる言語・方言について、「過去に評価した」ことを表す形態的手段（文末辞など）が他にないか（おそらく、その場合は「回顧・回想の終助詞」などと分類されているだろう）を調べる必要があるが、今はまだ十分に確認できていないので、問題提起をするに留める。

以上、述べてきたことが、このタイプについての基本的な問題であるが、それ以外に、過去の《特性》表現で、特徴として観察されることを記述しておく。

＜属性主＞が「過去の出来事」の場合、「過去の出来事 + て (で)」の形をとることが多い。

- (別れ際に) 「今日は一緒に過ごせて楽しかったよ  
一緒に過ごせたのは (翻訳調になる)

特殊な意味にならず、属性表現であると考えられる「よかった」も大半はこの形である。

- 「あんたも、どうせあの人目当てなんでしょ。だったら個人レッスンにしなきゃ。ま、だけど、どうせ相手にされないんだから、グループレッスンにしてよかったわよ。彼女はこうして遠くから見ているのが一番なの」(ダンス : 31)

また、＜属性主＞が「歴史上の偉人」「高名な作家・芸術家」の場合、非過去形が用いられることがある。この場合、過去形に置き換えることもできる。

- 「あの時代に亀山社中創ったんだもん。坂本龍馬ってかしこいよね  
cf かしこかったよね
- 「夏目漱石は大胆ですね。東大教授の仕事ふって朝日新聞にいっちゃったんだから」  
cf 大胆でしたね

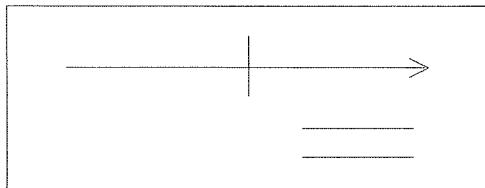
- （美術書を見ながら）「やっぱりダヴィンチってすごいなあ。この色づかい見てよ」  
cf すぐかかったなあ

歴史的事実について取り上げて話題にしていたり、実際に作品を作品を見ている場合は「非過去形」の方が自然である。過去形を用いると、先ほどの議論と関連して、「龍馬や漱石と直接面識があるような解釈」が生じる場合もある。ただし、このように、非過去形が用いられるのは、《特性》表現の場合のみであり、たとえ<属性主>が偉人であっても、《状態》表現の場合は非過去形は用いることができない。

- 「漱石は、修善寺の大患から東京に戻った数カ月間だけは、表情が穏やかだった」  
\* 表情が穏やかだ

### 5. 3. 4 未来を表す《特性》表現

「未来を表す《特性》表現」は、S T（発話時）より後に存在する<《個》の属性主>の《特性》を表す。形容詞は非過去形を用いる。



このタイプは、場合分けとしては想定されるが、実例はほとんどみられない。

- 「一緒にボストンに行こう」（中略）「これから始めようよ。ふたりで」もう、南以外の人と生きていくことは考えられない。／「……」黙っている南に、瀬名は言葉を重ねた。／「(ボストンでの生活は)今までより、きっと楽しい」（ロング：438）
- （プロ野球のスカウト制度についての談話で）——プロ野球の未来は？／「このまじや暗いね」（毎日新聞 2000.11.4）

作例で典型例を作ろうとしても、難しい。

- ・「このままじゃ、産まれてくるこの子の将来、真っ暗よ」

「真っ暗になるよ」と表現する方が自然であろう。

また、この例の場合も、「評価レベル」で、「現在の一時的感情評価《状態》」の方が前景化していると考えることも可能である。「まだ存在していない《個》の《特性》を述べる表現」という設定自体がかなり特殊なものである可能性も否定できない。

さらに、「未来表現」に関して、「アクチュアルな未来」と「非アクチュアルな未来」を区別することに無理があるのかもしれない。動詞述語文を扱った論文であるが、鈴木重幸は（1965→改訂 1996）の中で、「非アクチュアルな未来」の位置づけについて慎重な態度を示している。

（旧稿で《現在未来》という形で一括して扱ったことに関して 1996 の注で）ここで、現在未来という旧稿の一般化は改めなければならない。アクチュアルな意味と非アクチュアルな意味がきわだった対立をみせるのは、現在においてである。未来においては、アクチュアル／非アクチュアルのちがいは独立の意味のちがいではなくて、単なる未来の変種の間のちがいだと位置づけられるかもしれない。

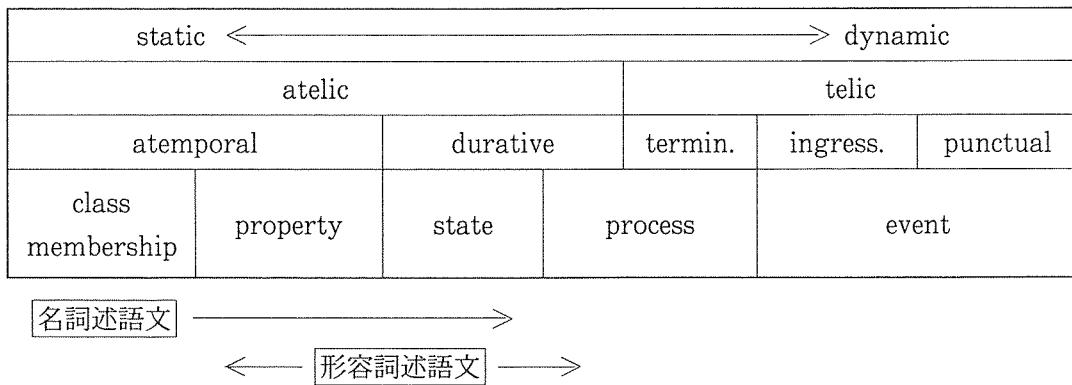
鈴木（1996 改）

さらに一步踏み込んで、「形容詞述語文」と「未来表現」とのあり方が問題になるのかもしれない。《状態》を表す場合も、「未来表現」の用例は極端に少ないのである（6章参照）。ただ、このことを断定するには、「未来表現とは何か？」についてさらに深く考察する必要があり、今はまだ十分な準備ができていないが、興味深い問題である。

#### 5. 4 名詞述語文との連続面

この節では、名詞述語文と形容詞述語文の連続面について、佐藤（1997）の記述を引用しながら考えておきたい。

名詞述語文と形容詞述語文の連続相での位置づけを、先に見た Lehmann（1999）の situation の type の連続相の図に当てはめると次のようになる。



名詞述語文の研究は、形容詞述語文以上に遅れており、特定の構文などへの関心と現象の解釈・説明が中心である。

そのような中で、佐藤里美の名詞述語文の研究は、連続相を視野にいれたものとなっている。人が主語の場合に限定しての記述ではあるが、基本的な問題点は掘り起こせるとと思われる。〔注6〕

まず、佐藤（1997）の記述を本論文で扱っている形容詞述語文と関わる部分を中心に簡単に紹介すると、次のようなものが指摘されている。

名詞述語文の基本 = 《質》の表現

→しかし、《特性》《状態》を表す場合もある。

理由：名詞本来：《さししめし的な意味》

→述語に使われると《概念的な意味》が前面化

→《特性》《状態》との境界があいまい化

=形容詞述語文の表す意味と似てくる

- ・「～家」「～者」「動詞なかどめをもちいたあわせ名詞」を述語にする文（《特性》）

それにしても与太郎は交際家だ。（三四郎・154※佐藤用例）

彼女の夫は道楽ものであった。（明暗・上・257※佐藤用例）

「まあ、あれでお父も、お父さん思ひだ。」（夜・四・68※佐藤用例）

- ・「年齢」の側面から人を特徴づける文

（《特性》年齢は変化するので《状態》に近い）

「おじさん、妹はまだ五つ。お願ひ、僕も一緒にもらって。」

（大地・二・181※佐藤用例）

「私はその時六歳でした。」(大地・一・176※佐藤用例)

- ・「顔かたち、体格、性格」など様々な外的、内的な側面で特徴づけられる文

(《特性》)

(この種の文に表れる名詞は自立性を失っていて、かぎり成分が義務的。)

半蔵等は向こうの山道から降りて来る一人の修業者にも逢った。数珠を首にかけ、手に杖をつき、見るからに荒々しい姿だ。(夜・一・331※佐藤用例)

市蔵という男は世の中と接触するたびに内へとぐろを巻き込むたちである。

(彼岸・298※佐藤用例)

- ・「生理的な状態」を表す文(《状態》)

主人の妹は病気である。(三四郎・51※佐藤用例)

- ・「心理的な状態」を表す文(《状態》)

「君がやれば安心だ」(大地・二・389※佐藤用例)

- ・「身なり」「ふるまい」「表情」から人物をとらえる文(《状態》)

重工業部から宝華製鉄指揮部へ出向している一心たちは背広姿であったが、建設の施工隊や操業の生産隊の工程師の多くは人民服で、はじめての国際線に落ち着かない様子だった。(大地・三・34※佐藤用例)

以上の佐藤の記述をふまえて、形容詞述語文との関連から、気づいた点を指摘してみよう。

まず、<属性主>の性格についての詳しい言及は佐藤(1997)にはないが、形容詞述語文の場合と同様、《類》が<属性主>の《特性》表現は、「脱時間」の用法を持つ。

- ・子供は楽天家だ。
- ・男ってロマンチストよね。

そのアクチュアル性についても、形容詞述語文と同様に考えることができる。

また、佐藤の中でも、「評価性」の問題は断片的ではあるが繰り返しその重要性が述べられている。本論文でいう「評価レベル」の問題は、《特性》《状態》を表す名詞述語文でも共通した課題である。ただし、それが《質》の場合とどのように異なるのか、あるいは共通するのかに関しては、今後の研究の深化を待たなければならない。

述定用法の場合はあまり顕在化しない問題だが、いわゆる形容動詞と名詞との関連につ

いてもさらに詳しい観察が必要である。程度副詞による修飾や、装定用法を見ていると、「あいつかなり大阪やで」「普通な洋服（2000年阪急三番街広告）」「阪急沿線宝塚なお店（書名）」など、若年層には、かなり自由に名詞を形容動詞的に用いる傾向があることも予想される。《質》と《特性》という意味的なものと、どのように相関するのか、きめの細かい記述を待たなければならない。

そして、佐藤でも少しふれられている「形容詞+形式名詞」タイプの位置づけは重要な問題を提起する。

- ・彼はかしこい男だ。
- ・吉村先生はやさしい先生だ。

これは、名詞述語文と一緒に分析するべきだろうか、それとも形容詞述語文として扱うべきだろうか。

先に少し触れたが、Thompson(1988)の談話における情報構造まで含みこんだ分析では、これらは形容詞述語文として扱うべきだとされている。この問題については、本論文では十分な議論はできないが、問題の方向性は、8. 2. 1で示すことにしたい。

## 5. 5 本章のまとめ

本章で記述したことを箇条書きで再確認すると、次のようになる。

- 時間的局所限定の定義について再確認した。（5. 1）
- いわゆる「脱時間」の表現について、典型例を確認し、どのような場合にアクチュアル性が増すのかを条件を挙げて観察・記述した。（5. 2）
- 《個》が＜属性主＞となる《特性》表現について、「現在」「過去」「未来」のそれぞれの場合に分けて観察・記述した。（5. 3）
- 「名詞述語文」と「形容詞述語文」の連続性について、佐藤（1997）を参考に概観し、今後の課題を整理した。（5. 4）

次の第6章では、《特性》と《状態》の違いと連続性について確認し、《状態》につい

て記述する。

---

[注 1] 形容詞述語文による属性表現だけではなく、存在表現などでも、同様のことが観察される（6. 4 参照）。

[注 2] 村上智美氏は、熊本方言ネイティブの方言研究者である。現在、熊本方言における「形容詞ヨル形」について、調査・研究を進めておられる。ここに引用させていただいたのは、80 代女性のデータの一部である。

[注 3] 「いつも」 → 「いつみても」 よりはポテンシャル。ただし、文脈によっては「いつみても」と同じように解釈される場合もある。

[注 4] 現在の《特性》表現について、ここでは扱いきれなかった問題として、属性主の人称と場面的な意味の関係がある。少しだけみておく。

○《特性》表現：属性主の本質

三人称（者・事） → 非人称（はなしあいの場の非参与者）に対する評価

一人称者 ] はなしあいの場の参与者の本質的属性  
二人称者 ] に対する評価になる。

→ 参与者の本質を「評価的」に言明することは、参与者双方にな

んらかの心理的負担を生じる。

→ 場面的な意味が生じる。

粗々ではあるが、その様子を観察・記述する。

○話し手本人（一人称者）の《特性》を述べる場合

<プラス評価>

「うぬぼれ」のふくみが出る。実際の会話の場面ではかなり嫌みなので、鏡を見ての独白・内的独白などの場面で見られる。

・ — ほんと、私ってきれい — ショーウィンドーの自分に見とれながら、まどかは思う。

／結婚相手への条件が厳しくなるのも当然よね。（ひとり：4）

※注：後ろに形式的な名詞がついても同様

- ・「マロはかしこいお子様ゆえお見通しなのじゃ」

「自分でかしこいと言うな！」（おじゃる丸：2000. 10.12 放映）

話し手に関わる人物や物に対するプラス評価も、「自慢」のように聞こえる。

- ・（※恋人のことにふれて）「ああ……シャイだし、カッコいいからね、あいつ」／「カッコいいとそなんですか？」（ロング：138）

「うちの子」や「うちのペット」に対するプラス評価もこれと同様。

- ・うちの子、かしこいんです。
- ・うちのボチったら、かわいいのよ。

#### <マイナス評価>

「自嘲的」な言い方になる。相手に自分を非難されて「捨て鉢」になる場合や、自分に落ち度があつて、相手に反省を伝える場合などがある。

- ・「バカな女が必ず言うセリフだ。顔をのぞき込んで『ね、何考えてるの？』っていうのと二つ、定番だな」／冷水をあびせられたような気がした。／「……どうせ私はバカよ」／「それも定番だ」（ひとり：175）

※注：「どうせ」「しょせん」などを伴うことが多い

- ・感情のまま涼子を抱きしめてしまった瀬名は、自分の行動にとまどっていた。（中略）  
／「俺ひどいね。何やってんだか……」／「……」／「ごめん」（ロング：156）

聞き手の高い評価に反して話し手がマイナス評価を提示すると、「謙遜」になる。話し手の本心からのマイナス評価ではない場合は、人間関係への配慮が強く押し出される。

- ・ベルリン公演でトップをつとめるまでに成長したリカが、ダンスど下手の私にさえダンスの助言を求めて言ったもんだ「私のダンスってまだまだダメですねえ」と。おお、どこかの誰かに聴かせてやりたいそのセリフ。謙虚モンのリカよイザ進めっ（後略）

（毎日新聞 2000.11.17 夕刊）

- ・「私なんかほんとにレベル低いです。社長のようになるには、まだまだ練習しないと」「心にも無いこと言うんじゃないよ。いいスコアで、にやけてるじゃないか」

#### ○聞き手（二人称者）の《特性》を述べる場合

#### <プラス評価>

「感心」、「承認」、「はげまし」を相手に伝える。

デオンティック・モダリティへの連続面。

- ・「桃ちゃん、あいつ、そうとうだよ。（中略）」／「そんなの見ればわかりますよ。スカート長くて、トイレの裏に気に入らないやつ呼び出してましたよ」／「えっ、そう……」なぜそ

う詳しいんだ。／「あわてて髪、黒くして清純派で売りだそうとしたんでしょウチの事務所が」／「はあ……」南は感心して言った。「あなた、そういうとこ鋭いね」（ロング：88）

- ・今日は職さがしに来たのだ。（中略）店のオーナーは、カクテルのシェーカーを振る真二の見事な手さばきにほれぼれしていた。「ふうん、いいねえ。手が綺麗だもんね。女のお客さん、そういうとこ見るんだよね」／「まかせて下さいよ」これはいけそうだ。／彼を雇うことにすっかり乗り気になったオーナーは、真二の履歴書に目をやった。（ロング：69）
- ・高校を卒業し、インテリアコーディネーターを目指して専門学校で勉強中の真生は、会社の面接に行くため、リクルート用のスーツを着込んでいた。／「大丈夫、きれいよ」／弥栄子は、ポンと真生の背中を叩いた。（神様：299）

聞き手と深く関係するものに対するプラス評価も同様。次の例は励まし。

- ・「瀬名のピアノ、私はいいと思うな」／「……」／「絶対いいと思う」／「心強いよ」  
(ロング：215)

本心からプラス評価していない場合は、「皮肉」になる。聞き手との間に上下関係など力関係があり、下の立場にいる話し手が用いる場合は、俗に言う「おべっかを使う」ニュアンスが加わる。

- ・「ヤクザはカタギには手を出しません」／津村は少し冷やかすように笑った。／「北川さんは真面目ですね」（ひとり：244）
- ・「お客様、赤がお似合いですね、お美しいです」「お上手ね。買いたくなっちゃうじゃない」

#### ＜マイナス評価＞

「非難」を表す。喧嘩の場面で見られる。

- ・「そういう考え方しかできない人に、死んでも彼女は渡せません」／星野の手を、津村はピシリと払いのけた。／「ベタベタくっついて、撫で回しているだけが愛情だと思ってるなら、君は青いよ」／二人の視線がぶつかり合った。（ひとり：50）

聞き手と深く関係するものに対するマイナス評価も同様。

次の例は純粋な意味での喧嘩の場面ではない。このような場合、相手へのマイナス評価をつきつけることは、かなり勇気がいる。ここではダンスのペアを解消したい一心で勇気をもって発言している。

- ・まりかはダンサーとして口にしてはいけないことだと思いつつも勇気を持って言おうと決心した。そうしなければ、いつまでもこの男にまといつかれてしまう。／「気持ち悪いんです。気持ち悪いんです、青木さんの踊り」／まりかは一気にそういうと、くるりと背を向け一目散に走って逃げた。（ダンス：184）

親しい間柄（特に恋人同士の間）のプライベートな会話で用いられると「非難」というより

は、軽い「揶揄」的な意味になり、さらには単に「親愛の情」を表すようになる。決して喧嘩を売り買いしているわけではない。

- ・小銭が足りない。瀬名はため息をついて、コインの返却ボタンを押すかな、と思った。  
／「バーカ」そう言うと、南はコインを入れてあげた。好きな子をライバルに譲ったうえに、ジュースひとつ買えない瀬名が、南にはなんだかいとおしい。（ロング：230）
- ・「まどか」／津村が、暖かな笑いを含んだ目を向けた。／「人間臭い僕は嫌い？」／まどかはすかさず言い返した。／「打算的じゃない私は、嫌い？」／「バカ」／顔を見合わせて、二人は笑った。（ひとり：310）

[注5] 別れた異性だけではなく、政界や芸能界を引退した人たちも、場合によっては同様の扱いを受けているようである。俗に「過去の人」とか「過去の存在」と言われるような立場の属性主は、ここに入るらしい。ニュースや番組を途中から視聴すると、属性主が亡くなったのか（追悼番組か）と勘違いするようなこともある。

- ・自民党のAさん、ありやがんこだったねえ。
- ・元アイドルのBさんって、育ちがよかったんですよ。

[注5] ここでの佐藤（1997）の引用のしかたは、あまりに短かく、佐藤論文の本質を伝えることはできていない。佐藤論文は、名詞述語文を、質・特性・関係・状態・滞在・動作に分け、その連続性を十分に考慮しながら記述をすすめている。

ここでは、本論文で扱った特性と状態にかかる名詞述語文にどのようなものがあるかを、一部紹介するにとどまっている。

は、軽い「揶揄」的な意味になり、さらには単に「親愛の情」を表すようになる。決して喧嘩を売り買いしているわけではない。

- ・小銭が足りない。瀬名はため息をついて、コインの返却ボタンを押すかな、と思った。  
／「バーカ」そう言うと、南はコインを入れてあげた。好きな子をライバルに譲ったうえに、ニュースひとつ買えない瀬名が、南にはなんだかいとおしい。（ロング：230）
- ・「まどか」／津村が、暖かな笑いを含んだ目を向けた。／「人間臭い僕は嫌い？」／まどかはすかさず言い返した。／「打算的じゃない私は、嫌い？」／「バカ」／顔を見合させて、二人は笑った。（ひとり：310）

[注5] 別れた異性だけではなく、政界や芸能界を引退した人たちも、場合によっては同様の扱いを受けているようである。俗に「過去の人」とか「過去の存在」と言われるような立場の属性主は、ここに入るらしい。ニュースや番組を途中から視聴すると、属性主が亡くなったのか（追悼番組か）と勘違いするようなこともある。

- ・自民党のAさん、ありやがんこだったねえ。
- ・元アイドルのBさんって、育ちがよかったんですよ。

[注5] ここで佐藤（1997）の引用のしかたは、あまりに短かく、佐藤論文の本質を伝えることはできていない。佐藤論文は、名詞述語文を、質・特性・関係・状態・滞在・動作に分け、その連続性を十分に考慮しながら記述をすすめている。

ここでは、本論文で扱った特性と状態にかかわる名詞述語文にどのようなものがあるかを、一部紹介するにとどまっている。

## 6章 《状態》を表す表現

本章では、時間的局所限定のあるアクチュアルな属性表現—すなわち《状態》表現—について、観察・記述する。

まず、再度、時間的局所限定について考える（6. 1）。そして、時間的局所限定が有るのか無いのか一つまり《状態》なのか《特性》なのか—、その連続面に存在する表現について観察・記述する（6. 2）。その後、まず現在の《状態》表現について考える。そして、《状態》表現におけるテンス対立の二つのポイント（<属性主><属性>）を確認した上で、過去と未来の《状態》表現についてみる（6. 3）。そして、動詞述語文との連続面を、先行研究を参照しながら考えたい（6. 4）。

### 6. 1 再び時間的局所限定について

本章では、時間的局所限定のある《状態》表現について、観察・記述していく。

それに先だって、再度、時間的局所限定の有無と、《特性》《状態》の定義について、奥田（1988b）「時間の表現（1）」『教育国語94』によって確認しておくと次のようになる。

- ・「意味的なカテゴリーとしての《特性》は、もともと物にそなわっている側面をとらえていて、ひとつの物をほかの物からとりたてながら、その物を特徴づける。」（奥田 1988b : 7）
- ・「ところで、この《状態》という用語でよばれる出来事は、いちいちの、具体的な物につきまとって生じてくる現象である。しかも、かぎられた時間帯のなかに一時的に生じてくる現象である。したがって一般化がゆるされない。」（奥田 1988b : 11）
- ・「物にそなわっている、正常な状態は、恒常的な物の特徴として《特性》のカテゴリーのなかにひろいあげられるだろう。こうして、《状態》にとりこまれる出来事は、いちいちの物の具体的な存在にしばられている。具体的な時間のありかのなかにおさまっていて、そこからとびだすことはできない。このような事実から、《状態は、ひとつひとつの物が、ある時間的なありかのなかで、一時的に採用する、その物の存在のし方である》という規定がなりたつ。《状態とは、ときとして生じてくる特徴的な出来事であって、いちいちの物をきわだたせる、物のあり方、物のありよう、物のありさまである。》《状態》はすべての物を一般的に特徴づけることはできない。」

（奥田 1988b : 11）

時間的局所限定があるということは、奥田の言うように「いちいちの物の具体的な存在にしばられている」ということであり、基本的に属性主は《個》である。従って、この第6章の記述の中心は、6. 3にある。

しかし、その前に、《特性》と《状態》の連続面について、6. 2で少し確認をしておきたい。

## 6. 2 《特性》か《状態》か—連続面の問題

先の節でみたように、《状態》が、奥田の規定通りならば、状態を表す表現の属性主は《個》であって、《類》ではない。《類》が属性主となる場合は、基本的に「脱時間表現」である。

- ・女は強い。

では、《類》が主語となる《状態》表現はまったくないのだろうか。  
ある程度時間的幅を持った限定が加わる場合、言い換えると「時代特定」のようなものが加わる属性表現の場合、少し考える余地が生じてくる。

次の表現を比べてみよう。

- ・女は強い。……………(1)
- ・近頃の女は強い。…(2)
- ・近頃、女は強い。…(3)

(1) は、脱時間表現と考えて良いだろう。  
(2) になると、同じ《類》であっても、(1) よりも狭い範囲であり、具体性が増すため、(1) よりはアクチュアル性が増しているが、これも《特性》表現であり、脱時間表現に準じる。(「近頃の女=《類》」の「強い=《特性》」)

問題は(3) である。「女=《類》」の「近頃」という時間限定における「強い=《状態》」と考えることができないだろうか。明らかに(2) に比べると、(3) には、「「強い」のは本質的な特性ではなく、逸脱状態だ」という読みが強く出ているように思われる。

ここでは、時代的特定を表す成分が、「連体修飾成分か否か」という違いが大きく関わっている。例えば、次の例を比べてみよう。

- ・戦前のトマトはすっぱかった。
- ・戦前、トマトはすっぱかった。

前者は、「戦前のトマト」の《特性》をただ述べているだけだが、後者は「戦前における《状態》」が述べられており、「今はすっぱくない」という含意が後者の方が多少強いようにも思われる。

無論、前者にも前後の文脈などから同様の含意が表れることを否定するものではない。特に、前者の「ハ」を対比の「ハ」と読む場合などは後者と同様の意味を読みとることになろう。[注1]

さらに、「属性主の語彙的意味の中に、時代的特定が含まれるか否か」にも左右される。

- ・縄文人は背が低かった。
- ・縄文時代、日本人は背が低かった。

にも、同様の違いがあるように思われる。

前者は、「縄文人」の《特性》を述べており、脱時間に準じる。前の章でも触れたが(5. 2. 3)、非過去形で「縄文人は背が低い」と言えば、脱時間表現として把握される。後者には、「現在はそれよりも背が高い」という含意があり、こちらは非過去形にすると不自然であり(？「縄文時代、日本人は背が低い」)、もし言えるとしても、修辞的な文体になる[注2]。

これらを《特性》か《状態》かに振り分けるテストフレームを作り出すことが、本研究の目的ではない。敢えて言うなら、「時代的特定」が、<連体修飾成分>として現れる場合は《特性》的であり、<状況成分>として現れる場合は《状態》的である、という傾向を指摘することはできる。

なぜ、そうなるのかを無理に説明しようとは思わないが、連体修飾はその被修飾語である属性主についてさらに詳しく述べるものであり、状況成分は属性主と属性の結びつきに

よって成り立つ事象全体の状況を説明するものである。ここまで観察は、その基本的性格がそのまま反映したものと考えられる。

先ほどの例をもう一度考えてみると、

- ・女は強い。

という脱時間の表現に対して、

- ・近頃の女は強い。

という場合は、「女」という属性主について「個別・具体化」が働きかけており、事象全体の「個別・具体化」はそれに伴う二次的なものであるが、

- ・近頃、女は強い。

の場合は、「女が強い」という事象全体の状況を一次的に「個別・具体化」しているのであり、「時間的局所限定」を有する読みが直接的に導かれていると考えられる。[注3]

これらの例が《特性》と《状態》の連続面にある表現ではないかと思われる。「時間的局所限定の有無」というのは、「具体的・個別的・一回的かどうか」と関わってくる。そう考えると、「かなり時間的幅のある「時代特定的な特性」」というものが、その連続面に配置されると考えることに無理はないであろう。[注4]

時間的局所限定を形態論的に区別する言語・方言において、これらがどのように表されているかは興味深いところであるが、未調査である。

また、この「時代特定的な特性」については、未来表現があるかどうか、疑問である。少なくとも、作例も難しい。

- ・？？2世紀、人類は背が高い。
- ・？？将来、子供は強い。

「～背が高くなる（だろう）」「～強くなる（だろう）」のように、変化を明示しないと無理があるように思われる。これを支える文脈も想定しにくい。先に、未来表現と属性表現の関係をきちんと考へる必要があると述べたが（5. 3. 4）、この例も、そのことを再確認させてくれる。

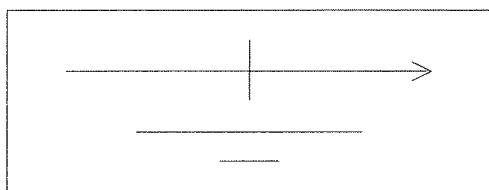
以上、「時代特定的な特性」を表す表現について見てきた。これは、連続面にある例外的な場合であった。次に、《状態》表現の中心となる「個」を属性主とする状態表現についてみていくことにしたい。

### 6. 3 「個」を属性主とする状態表現

#### 6. 3. 1 現在の《状態》表現

「現在の《状態》表現」とは、発話時を挟んで存在する《個》の属性主の現在の一時的状態を表す。形容詞は非過去形を用いる。

図示すると、次の図のようになる。



まず、始めに前提を確認しておきたい。

何度も触れているように、現代日本語には形態論的に「時間的局所限定」を明示する手段がないので、《特性》か《状態》かの判断に迷う場合もある。そこで、連続したありさまを観察・記述する前に、前提を確認しておきたい。

(A) まず、典型的な《状態》表現とはどのようなものだろうか。これは、「認識レベル」で明らかに「一時的状態だ」と言える場合であり、属性主の「逸脱状態」を表す。

- ・「大変だ！西の空が真っ黒だ！」「雨が来そうですね」
- ・山口さんちのツトム君、この頃少し変よ。どうしたのかな？（歌詞）

認識レベル	[西の空] [真っ黒だ]	《状態》
評価レベル	[話し手]	[西の空が真っ黒だ] 《状態》

(B) 逆に、《状態》か《特性》かで、迷う場合とは、「認識レベル」では《特性》的で、「評価レベル」では「一時的感情評価」で《状態》と捉えられる場合である。

[注5] [注6]

- ・「新作の絵なんです。見ていただけますか」  
「どれどれ。あら、この作品おもしろいわね」

認識レベル	[作品] [おもしろい]	《特性》
評価レベル	[話し手]	[作品がおもしろい] 《状態》

このように、どちらのレベルでも「現在」の表現になる場合は、時間的局所限定の有無がわかりにくい。区別の必要がないようにも思われるが、3. 4. 2で見たように、(B)のような場合は、認識レベルと評価レベルで「現在」「過去」と分れることがあり、次のような場合に、非過去形・過去形両方が可能になるのは、そのためである。

- ・「昨日お渡しした新作の絵、見ていただけましたか」
- |                               |       |      |      |
|-------------------------------|-------|------|------|
| 「はいはい、 <u>あの絵はおもしろいわよ</u> 」   | 認識レベル | 《特性》 | 「現在」 |
| 「はいはい、 <u>あの絵はおもしろかったわよ</u> 」 | 評価レベル | 《状態》 | 「過去」 |

(B) のような場合は、評価レベルの一時的状態表現が前景化されても、認識レベルでの特性表現が意識されると、ポテンシャルな解釈が出てくる。

以上のこと前提としたうえで、まず、(A) のように認識レベルで一時的《状態》である場合の表現の特徴について観察し、次に (B) のように評価レベルで一時的《状態》となる場合について、詳細にみていきたい。

まず、はじめに、(A) の認識レベルで、一時的《状態》表現である場合についてみる。

ここでは、形容詞分類に関係なく、認識レベルで、《状態》であると解釈される表現にどのような特徴があるか、観察・記述してみる。言うまでもなく、これらの特徴は重複して表れることもある。

① 「今」「最近」「この頃」などの「時の状況成分」によって、一時的《状態》であることが示されている。

- 「さとるー！ご飯よ、降りてきなさい」／「今、忙しいんだよ」／弥栄子が二階に声をかけたが、悟は部屋から怒鳴り返すだけだった。(神様：291)
- 「何や今日はきれいやな。美容院いってきたんか」／「生意氣いうて—」  
(月の：132)
- 「おたかさん、今日テンション高い」／にきび面のADが嬉しそうに言った。  
(古畑2：63)

② 「変だ」「おかしい」「珍しい」など、一時的な逸脱状態であることが語彙的意味に含まれた形容詞が述語になっている。

- 「……真ちゃん、やっぱりおかしい……」(中略)「最近、変にやさしい」(ロング：216)
- 「それよりさ、あの『すっぽん (※舞台装置の名前)なんか調子悪いんだよ、後で見といってくれるか」(古畑1：77)
- 「いいよ、続けて」／カオルが意外そうな顔で慎吾を見る。／「聴かせて」／啓吾がカヲルのそばの椅子に腰をおろす。／「珍しいわね。あなたが人の歌をききたいだなんて」(神様：61)

③ 「～にしては（ちょっと）」などで、予想外の逸脱状態であることが示されている。

- 「あなたの場合、感染初期にしては免疫力の指標になるCD4の値がちょっと低いの」(神様：180)
- 「飲むの？おつまみでも作ろうか？」「わざわざ作ってくれるのか。お前にしちゃ、やさしいな」

④「変に」「妙に」「珍しく」などの逸脱状態であることを示す副詞が共起している。

- ・「……真ちゃん、やっぱりおかしい……」(中略)「最近、変にやさしい」(ロング : 216)
- ・うしろの席でアブラハムが答えた。／「テコトハ、一メーター六十」／「なんだアブ、いたんか。珍しくおとなしいな」(月の : 39)

⑤前後の文脈から、逸脱状態であると判断できる。

- ・「なんか、素直だね」／「そう？」／「人変わったみたい。誰か好きになって、その人が自分のこと好きだと、入って素直になるんだね、きっと」(ロング : 161)
- ・(※フェータルな病を背負っている相手へ)「それよりお前、体は大丈夫なのか？」／「絶好調だよ。(後略)」(神様 : 313)
- ・南は瀬名をかすかに指さした。彼はひとりでたそがれている。／「あれ？ セナさん、元気ないですねえ。お腹でも痛いんですか？」全然瀬名の気持ちを察しない桃子に、南はあきれてしまった。(ロング : 106)

⑥「属性主」と「属性」の結びつきの意味的な関係から、逸脱状態だと判断できる。

- ・「あれ、月が赤いよ」
- ・「どうしたのかな、彼、顔が真っ白だよ」

これらのアクチュアルな《状態》表現も、「相変わらず」「時々」などが共起して、一時的《状態》が「反復・習慣」的に繰り返される場合には、ポテンシャル化が進む。

- ・「相変わらず、顔色悪いね。大丈夫？」
- ・「管理人さん、時々、態度がおかしいよね」
- ・「じゃあ、ワリカンで。いつも財布出すタイミングが悪いんです。べつに出しあしひをしているわけじゃないんだけど、そういうことに鈍感でね」(月の : 250)

以上の①～⑥は、「認識レベル」の<属性主>の「一時的逸脱状態」であることが示されている場合である。次に、形容詞分類とも絡めて、「評価レベル」の前景化によってア

クチュアルに解釈され、《状態》表現となる場合を中心にみていく。

次に、(B)の場合について、形容詞分類との関係に気を付けて記述してみる。

いわゆる「感情・感覚形容詞」はその語彙的意味（一時的感情評価）から、「評価レベル」が前景化しやすい。そのため、基本的には「一時的感情評価=《状態》表現」であるとの解釈が先行する。しかし、実際の用例では、その「アクチュアルーポテンシャル」の度合いについて、様々な場合が観察される。以下、アクチュアル性の高いものから、ポテンシャル性が高まるものまで、グラデーションのありさまを詳細にみていく。

①積極的に評価レベルが前景化され、《状態》であると解釈されるのは、次のような場合である。

(1) 認識レベルの「属性主」(=感情の対象)が明示されない場合。

- ・「そこに、座ってくれないかな。ガードレールに」／「いいってば、恥ずかしいわよ」／久子はカメラに背を向けた。(月の：84)
- ・ライトアップされた東京タワーが夜空に浮かんでいる。／「私……何か淋しい」／コートの衿に顎を埋め、寿子が言った。／「僕も」(ひとり：154)

(2) 倒置で、形容詞が文頭に置かれる場合。

一語文に近くなり、話し手の評価(=感情・感覚)が前面に押し出される。

- ・「怖いんです。あの人、真面目だから、もし女の人がいるとしたら浮気じゃ済まない気がして」(ダンス：125)
- ・「寒いですよね、ここ」／「あれをごらんなさい。桜が満開よ。東京より一週間遅れてるわ。おまけにこの雨」(月の：237)

この延長線上に一語文がある。「ああ」「まあ」「あら」などのいわゆる感動詞を伴うこともあり、感情がストレートに示されていて、もはや叙述文の域を超えていく。

- ・「いや、もしよかったら、たま子先生と踊りたいんですけど」／「ま、嬉しい。でも

無理しなくていいわよ。たまには違う人と踊ったら」(ダンス: 167)

- ・真二はちょっと笑った。そして寝返りを打った途端、傷が痛んだ。「イテッ……  
(ロング: 249)

### (3) 評価者 (=評価レベルの「属性主」) が明示される場合。

話し手である場合は、言語化は義務的ではないが、明示化することで、評価レベルが積極的に前景化される。

- ・だが、橋場は興奮している。／「これで五人目ですよ。五人目の犠牲者だ。私は怖いです。本当に、ほんとーに怖いですよ、デカ長さん」／「そうですね、恐ろしい」(地下街: 192)
- ・「何やってんだかねえ……あんたは」ベッドの上で洗い髪を拭きながら、南は(※弟に) 説教を始めた。／「……ああ？」／「姉ちゃん、情けないよ」布団をかぶって、南はすすり泣きを始める。(ロング: 247)

②次に、認識レベルの「属性主」が明示されていても、それが具体的・一回的な性質のもの場合も、《状態》的に解釈される。

- ・「杉山さん、すごくうまくなりましたね」／「いや、どうも。青木さんにそう言ってもらえると、うれしいです」(ダンス: 156)
- ・悲しみがまどかの口調を冷たいものにしていた。「何か自分が恥ずかしいわ。ノコノコ横浜まで来たりして」(ひとり: 293)

③程度副詞が共起していて、「評価レベル」が前景化している場合。先に特性の章でもみたように、程度副詞の共起は、その評価性ともあいまって、評価レベルを前景化する。

- ・何と！宮部みゆきさんと対談を……とのことだった。／「シェ～、ホントに！？いやあ、いいの？会わせてもらっちゃって、ウウ～、恥ずかしいけど、超嬉しい」(地下街: 312※室井滋「解説」)

④認識レベルの「属性主」が明示され、認識レベルでは、「属性主」の本質的《特性》を

とらえていると判断される場合（先に前提で見た例）は、認識レベルと評価レベルの解釈が拮抗する。

- ・「新作の絵なんです。見ていただけますか」  
 「どれどれ。あら、この作品おもしろいわね」

⑤認識レベルの「属性主」の一般化が進むと、認識レベルのポテンシャル化が進み、若干《特性》的になる。次の例では、葬儀屋が葬儀について話しているので、「反復・習慣」的な解釈もあいまって、かなりポテンシャルな解釈が出てくる。

- ・（※カッコは心中語の表示）（こんな小さい子の葬式は、悲しいねえ。仕事とはいっても、嫌だよホントに。（後略））（地下街：90）

以上の議論と関連して、「好きだ・嫌いだ」は従来の形容詞分類では「感情形容詞」でありながら（例：西尾 1972）樋口らの分類では「質（特性）形容詞」となるが、それは、これらの語彙的意味が「一時的感情評価」ではなく「恒常的感情評価（属性主にとって、かなり安定した恒常的・本質的評価）」を表すためである（評価レベルでも、ポテンシャル性が高いといえる）。基本的に、これら的好悪の表現は、《特性》表現となる。

- ・まばたきしながら、ちょっと身を乗り出すと、窓際の女性は、「ほら、これ」と言って流れてくる音が目に見えるかのように、ひとさし指を立てて空をさした。／「この曲、好きなのよ」（地下街：15）

この種的好悪の表現がどの程度ポテンシャルになるかは、好悪の対象のあり方と関連している。典型例を作例で示すが、およそ次のようなグラデーションになっている。

- (1) 対象が《類》で、抽象度が高いほど根本的価値観に関わるため、まず一生変わらないように思われる。（社会的規範性を伴うと特にポテンシャル）
  - ・平和が好きだ。
  - ・暴力は嫌いだ。
- (2) 対象が《類》でも、具体的になると、人生経験の中で変化する可能性が増す。

- ・タイ料理、嫌いなんだ。
- ・ジャズが好きよ。

(3) 対象が《個》の物・人になると、変化する可能性がかなり強く感じられるようになる。

- ・この店、好きなの。
- ・A君、嫌い。

(4) 対象が《個》であり、具体的・一回的出来事の場合はかなりアクチュアルである。この段階になるとかなり《状態》表現的である。

- ・今の言い方、好きよ。
- ・その目つき、嫌い。

以上、現在の《状態》表現について、観察・記述してきた。

いわゆる感情形容詞が、「対象の特性付け」と「評価者の一時的感情評価」を同時に表す場合があることは、従来も様々な形で指摘されてきた。例えば、西尾（1972）でも、繰り返しその問題が取り上げられている。本論文では、すべての形容詞述語文に、「認識／評価」の二つのレベルを認めるところからスタートし、その連続的なありさまを、できるだけ条件づけながら整理してきた。

このように見ることで、従来「語彙レベル」の問題として扱われることが多く、混乱していたこの問題に、どのような「構文的条件」が関与しているのかをある程度浮かび上がらせることができたのではないだろうか。

この問題をさらに明らかにするためには、さらに、動詞述語文、名詞述語文まで含めた広い視座が必要となる。形容詞述語文ではどちらのレベルなのかを明示しにくいため、もっと積極的に「認識レベル」であることを表現したいときには名詞述語文へ、逆に、もっと積極的に「評価レベル」であることを表現したいときには動詞述語文へ移行するのではないかと思われるからである。

・見せてもらった絵ね、あれ、おもしろいわよ。 [認識レベル]

→見せてもらった絵ね、あれ、面白い絵よ。

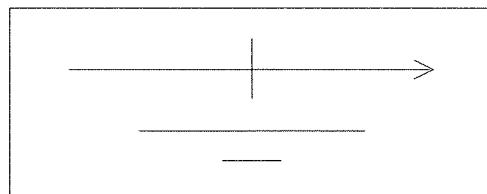
・見せてもらった絵ね、おもしろかったわ。 [評価レベル]

→見せてもらった絵ね、あれ、おもしろく感じたわ（／おもしろい感じしたわ）。

ただ、このことを論じるためには、形式名詞論・心理動詞論についてもう少し慎重に議論する必要がある。ここでは、ひとつの仮説として提示するに留めておく。

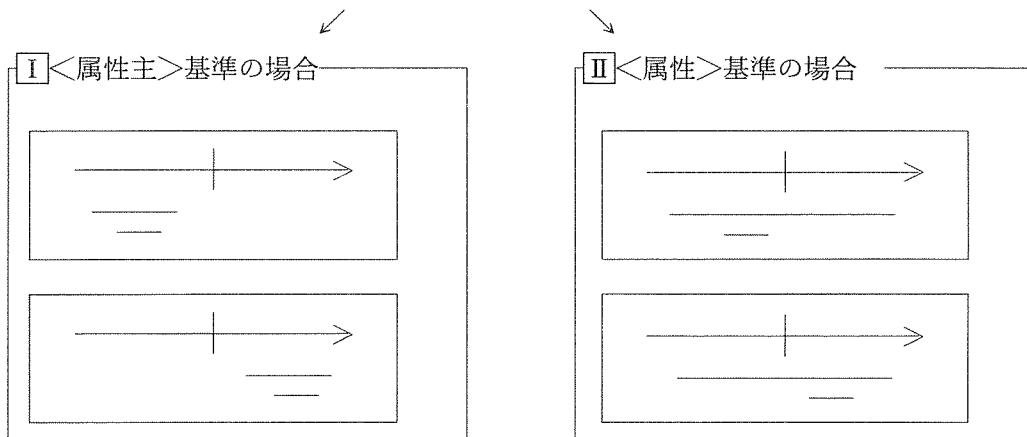
### 6. 3. 2 テンス対立の2つのポイント

ここまで見てきた、現在の《状態》表現は、この下の図のような場合であった。



この表現とテンス対立を持つ《状態》表現は、理論的には、2つの系列が考えられる。

(2. 3のテンス対立の表を参照)



I は、属性主の時間的存在と ST (発話時) との前後関係でテンス対立する場合であり、II は、ST (発話時) を挟んで存在している属性主にとって、一時的に表れた属性が、ST の前か後に認められる場合である。

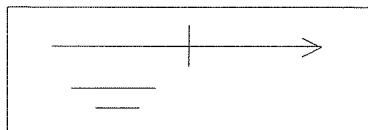
結論を先に言うと、これら4つの場合のうち、II の過去表現はまだ用例が見られるものの、I の過去表現は内省では可能だが、実例はほとんど見つからない。さらに、未来表現に至っては、実例はおろか、内省によって典型例を作ることすら難しくなる。なぜ、このようになるのかを急に説明しようとは思わないが、このことを念頭に置いた上で、

これらの表現について、検討していくことにする。

### 6. 3. 3 過去の《状態》表現

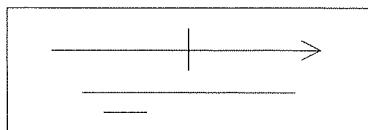
上で確認したように、過去の《状態》表現には、次の二種類がある。

- I** 発話時 (S T) には既に存在しない《個》の属性主の一時的な《状態》を表す。



これは、<属性主>基準で、現在の《状態》表現と  
テンス対立している。

- II** 発話時 (S T) を挟んで存在している《個》の発話時以前の一時的な《状態》を表す。



これらは、<属性>基準で、現在の《状態》表現と  
テンス対立している。

まず、**I**の発話時 (S T) には既に存在しない《個》の属性主の一時的な《状態》を表す場合について考えてみよう。

先程も述べたように、このタイプは筆者が用例を採取した小説・シナリオの会話文では極めて少ない。用例採取の絶対量の不足があると思われる。状況的には多少特殊なものになるので、やむを得ないかも知れない。

先に、過去の《特性》表現について観察したとき（5. 3. 3）に、次の点を指摘した。

- 現在の《特性》表現は、かなり客観的であり、評価者の存在があまり意識されないのでに対して、過去の《特性》表現は、評価者が自分で過去のある時点において確認している、という主観的な（evidentialな）ニュアンスが強い。（中略）過去になると「評価者による過去の一時的評価《状態》」が前景化されているとみることができる。

（本論文 5. 3. 3）

どうやら、これは過去の《状態》表現でも同じではないかと思われる。次の例をみてみよう。

- 「俺達が結婚するって言った時、死んだお前の親父、顔真っ赤だったな」／「怒って

たのよ。あんまり急だったから」

この例文は、S T時に属性主が既に存在していないから過去形が用いられているのだろうか。その場合は、**I** のタイプになる。それとも、評価レベルが前景化されていて、評価者の過去の一時的感情評価が表れているのだろうか。その場合は **II** のタイプになる。

先に5章でも触れたとおり、このように、どちらが前景化しても過去になる場合、「認識レベル」と「評価レベル」をはっきりと区別することはできないし、また無理に区別することが、このタイプの表現の本質にせまることになるとも思われない。

また、今は「はなしあいのテクスト」だけを扱っていることにも注意しなくてはならない。テクストタイプを拡大して、形容詞述語文の過去表現全体を見ると、ここで述べていることは様相が変わってくることが予想される。この点については稿を改めて検討することにして、ここでは **II** のタイプについても観察・記述を進めておきたい。

次に **II** の発話時（S T）を挟んで存在している《個》の発話時以前の一時的な《状態》を表す場合について考えてみよう。

先の現在の《状態》表現と同様に、(A) 認識レベルで過去の一時的状態の場合と、(B) いわゆる感情・感覚形容詞が用いられ、評価レベルで過去の一時的状態になる場合がある。

まず、(A) の認識レベルで過去の一時的《状態》を表す例としては、次のようなものがある。

- ・「いつかは女房と別れでおまえと一緒になるって、何年も言われてたの。ずっと信じてたわ、六年間も。六年前には、あたしだってもうちょっと若かったのよ。」

(地下街：21)

- ・階下に降りていくと、父はもう朝食を終えて新聞を読んでいるところだった。紙面の端から、刑事が容疑者を見るようにわたしを見た。／「昨夜（ゆうべ）は遅かったな」

(地下街：247)

- ・「あんた、よくやったから、今日」／「え？」／聞き返した星野の顔も見ず、寿子は言った。「まどかの悪口言うなって。食堂で……偉かったよ」(ひとり：77)

現在の場合と同様の特徴を見出すことができると思われるが、用例数が少ない。おそらくは、現在の場合と同様に、次のような特徴があることは、内省では予測できる。

①時の状況成分によって、一時的状態であることが明示されている。

(これは前頁の例「六年前には」「昨夜は」で確認できる)

②「変だ」「おかしい」「珍しい」など、一時的な逸脱状態であることが語彙的に含まれた形容詞が述語になっている。

- ・「ピアノの先生ったら変だったよね」／「どうして」／「おじさんのこと見て真っ赤になったりして」(律子：32)

③「～にしては」などで、予想外の逸脱状態であることが示されている。

- ・「昨日の公式戦のときさ、うちの監督にしちゃ、やさしかったよな」

④「変に」「妙に」「珍しく」などの逸脱状態であることを示す副詞が共起している。

- ・「この前の宴会、係長、妙に機嫌良かったですね」

⑤前後の文脈から逸脱状態であると判断できる。

⑥「属性主」と「属性」の結びつきの意味的な関係から、逸脱状態だと判断できる。

- ・「ナホトカ号事件の時、日本海は真っ黒でしたよ」
- ・「イナゴの大発生で、草原は一面茶色でした」

内省であまり不自然ではないにもかかわらず、あまり用例が集まらない理由もきちんと考えなくてはいけないし、それにはきちんとした用例数の管理を行わなくてはならないが、今の時点ではその充分な準備はできていない。正常な状態から逸脱状態への変化が含意されることを考えると、動詞の *resultative* との関連も含めて、もう少し調査範囲を拡大して考える必要があることは確かだと思われる。上の例文でも、変化の結果生じた状態として、次のように表すこともできる。

- ・「ナホトカ号事故の時、日本海は真っ黒になっていましたよ」
- ・「イナゴの大発生で、草原は一面茶色になっていました」

また、これらの用例でも、「評価者自身が、過去のある時点において確認している」という評価レベルを前景化した解釈も可能である。やはり、属性表現の「過去」というものは、動詞述語文の時のように、単純に S Tとの前後関係だけではとらえきれず、主観的な側面（なかでも evidentiality）との絡み合いをしっかりみなくてはならないのではなかろうか。[注 7]

次に、(B) のいわゆる感情・感覚形容詞が用いられ、評価レベルで、「過去の一時的感情評価=《状態》」であると解釈される表現についてみておきたい。これは、過去の《状態》の他の場合に比べると用例数は多少多い。

現在の時と同様のことが指摘できる。つまり、感情形容詞が用いられているので（語彙的意味から）、評価レベルが前景化されやすく、「一時的感情評価」の方が優勢である。とはいって、やはり二重構造はある。従って、認識レベルの属性主（すなわち感情の対象）が明示されている場合は、認識レベルが意識化されやすく、「対象への属性付け」の面も無視できない。現在の時と同様に、アクチュアル性の高いものから、ポテンシャル性の高いものへのグラデーションを確認しておく。

①積極的に評価レベルが前景化され、《状態》であると解釈されるのは、次のような場合である。

(1) 認識レベルの「属性主」(=感情の対象)が明示されない場合。

- (※二十年前の恋愛を夫に打ち明けて) 「ごめんなさい。私、淋しかったの。何もわからなかっただし、モンパルナスの塾にも日本人はいなかったの。日本語でしゃべるのがうれしくって」／「そんな理由で人は愛せない。ましてや——」(月の : 88)

(2) 倒置で、形容詞が文頭に置かれる場合。

話し手の評価 (=感情・感覚) が前面に押し出される。

- 「ここだよ！大丈夫か、おい？」／「電気つけて！お願い、電気明るくして！」／啓吾は慌ててあかりを点け、真生をやさしく抱きしめた。／「怖かったの……」／啓吾の腕の中で真生はガタガタ震えている。／「目を開けたら暗くて、もう自分が死

んでいるような気がして……」(神様：99)

(3) 評価者（＝評価レベルの「属性主」）が明示される場合。

話し手である場合は、言語化は義務的ではないが、明示化することで、評価レベルが積極的に前景化される。

- ・「俺、怯えてるよ」／真生は黙っていた。／「お前の言うとおりだ。俺、怖かったんだよ」／「啓吾……」(神様：99)

②次に、認識レベルの「属性主」が明示されていても、それが具体的・一回的な性質のものの場合も、《状態》的に解釈される。

- ・その絵はどうなった？／「今もうちにあるわ。わたしの一番、最初に売れた作品。でも、本当に買ってくれた人もいたわけよ。たった一人。《こんなものかなあ》という、がっかりが、半分一いや半分以上かな。でも、一人でも、自分のものにしたいと思ってくれる人がいた。それは、嬉しかった。（後略）」（ターン：37）

③程度副詞が共起していて、「評価レベル」が前景化している場合。先に特性の章でもみたように、程度副詞の共起は、その評価性ともあいまって、評価レベルを前景化する。

- ・「（前略）長く寝ているとね、頭の後ろの毛が薄くなるのね。それ見るのが、とっても哀しかった。（後略）」（ターン：33）

④認識レベルの「属性主」が明示され、認識レベルでは、「属性主」の本質的《特性》をとらえていると判断される場合は、認識レベルと評価レベルの解釈が拮抗する。

- ・「あれでさ、主人公がさ、ビリヤードの玉の位置変えるとこ、俺、おっかしかったな……」／「！」／南はクスッと笑った。それは今日、杉崎におもしろかったと言っても、わかってもらえなかった場面のことだった。（ロング：170）

⑤次の例では、表具職人の父の仕事を見ているうちに傲い覚えた、という文脈の中で用いられていて、「反復・習慣」的であり、ポテンシャルな解釈が出てくる。

- ・「勿論、仕事自体は初步の初步。父なら、薄い半紙だって綺麗に剥がせた。もともとが二枚だったみたいに。見ると面白かった。あきなかった。」（ターン：29）

充分な用例数ではないが、およそ以上のように連続的なりさまを観察することができる。「話し手の過去の一時的感評価」を表現するので、登場人物が「昔語り」をしている回想的なシーンによく用いられる。

過去の《状態》表現の最後に、「ずっと～過去形」という形を取る場合について観察されたことを少し記述しておく。

「ずっと～過去形」という表現は、形容詞のタイプに関係なく、S Tより前のある期間に《状態》が存在したことを表す。期間の起点が明示されることもある。かなり長期間にわたる《状態》でポテンシャル性は高いが、本質的な《特性》ではない。

- ・「石川くん、ずっと前からあなたのこと好きだったのよ。あなたが伊東充って男と婚約しちゃったときは、彼、あたしの店でべろんべろんになるほど飲んじゃったんだから（後略）」（地下街：46）

期間の起点が示された「～後、いつだって～過去形」も、同様の意味を表している。

- ・芳枝の声が、まどかにとって、どれだけ心強く響いたことか。父を不慮の事故で亡くした後、いつだって母はこんな風に力強かったと、まどかは思った。（ひとり：90）

あくまでも、S Tより前のある期間にそのような《状態》があつたことだけを表している。「現在」や「未来」において、その《状態》が継続している（する）かどうかは、場面に依存している。例えば、

- ・「ずっとあなたが好きだった」

という表現は、プロポーズの場面であれば、少なくとも「現在」は続いている、「未来」も続くだろうという含意ができる。しかし、全く同じ台詞も、男女の別れの場面では、「現在」もうすでに（おそらく）その状態は失われており、「未来」に関しては継続はないで

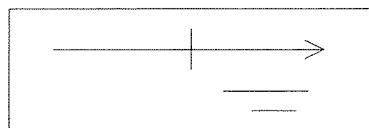
あろう。

以上、過去の《状態》表現について、観察・記述してきた。用例が少ないので、きめ細かい記述をすることができなかった。しかし、過去の《特性》表現の場合も総合して考えると、「過去の属性表現」のかかえる問題を指摘することはできた。形容詞述語文の「主観性」の本質を「評価性」ととらえてきたが、そこにつきまとう「evidentiality」の問題をも含めて、さらに総合的な記述を進める必要がある。

### 6. 3. 4 未来の《状態》表現

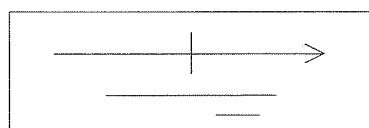
6. 3. 2で確認したように、未来の《状態》表現には、理論上、場合分けとしては、次の二種類が想定できる。

**I** 発話時（S T）にはまだ存在しない《個》の属性主の一時的な《状態》を表す。



これは、<属性主>基準で、現在の《状態》表現と  
テンス対立している。

**II** 発話時（S T）を挟んで存在している《個》の発話時以後の一時的な《状態》を表す。



こちらは、<属性>基準で、現在の《状態》表現と  
テンス対立している。

実際に用例を集めてみると、**I**に相当する用例は見つけることができない。作例も難しい。

- ・「立派な橋ができるのね」「突貫工事だからなあ、十年後にはぼろぼろだぞ」
- ・「生まれてくる赤ちゃん、退院してこの部屋見たら悲しいよね。今のうちに引っ越しようよ」

先に《特性》のところでも述べたが、まだ存在していない特定の属性主の属性を述べるという設定自体にかなり特殊性があるように思われる。

また、**II**についても、用例は少ない。若干集まるのは、主に条件節を伴った形である。

- ・「アメリカ行くの？やめたよ」／三人は驚いていっせいに真生の顔を見た。真生は何気ない様子でご飯を食べながら言った。／「まだ学校の続きあるし、高校ぐらい卒業していないと、将来大変でしょ」（神様：288）
- ・「でもね、瀬名くん。ショパンは家に帰っても、お帰りとは言ってくれんです」／「それはまあ……家に帰ってショパンがいたらそれはそれで怖いです」  
(ロング：279)
- ・（※婚約者に向かって）「私の値打ちをぜんぜんわかってない。アパレル業界のこと も、ぜんぜんわかってないね。いやしくもわが社のエース・デザイナーよ。その亭主 がレナウンやイトキンの営業やってたら、どうなるの」／「はあ……そりゃまあ、ま ずいですね」（月の：232）
- ・まずはお隣から始めた。／「ごめん下さーい」／一応、声をかけるんだね。／「返事をしてくれたら嬉しいわ」／応答はない。（ターン：71）

しかし、これらの表現も、動詞述語文の同じようなレベルではっきりと「未来」かどうか、悩ましいところがある。

- ・明日、合格してたら、すぐに下宿探すね。
- ・明日、合格してたら、嬉しいなあ。

動詞述語文（運動動詞）の場合は、未来に E T（出来事時）があるのが明らかなのだが、それと同じレベルで、形容詞述語文も「未来」だと言えるのだろうか。これらは、あくまでもまだ起こっていない事態やまだ存在しない事物に対する「予測される属性」を述べているだけである。「irrealis とは何か」についてもう少し考えなければ、この問題についての結論はでないであろう。

こうして観察してくると、未来の《特性》表現のところでも少し述べたように、「未来表現」と「属性表現」の関係についてもっと議論が必要であることがわかる。テンス対立がもっとも鮮やかにでるのが、運動動詞の場合であるのは、その意味的特質からいっても首肯できるところであるが、その運動動詞においてさえ、「未来」は「過去」や「現在」

よりもわかりにくい部分があると思われる。つまり、形容詞述語文の「未来」がわかりにくいのは、単に「時間的巾」があることだけが原因ではあるまい。

アスペクト・テンス・ムードが三位一体で研究されて初めて、「未来表現とは何か」についての展望が開けてくるのではなかろうか。その時、属性表現の持つ「評価性」が、いかにそこに絡んでくるのか、今はまだそれを解明するだけの準備が出来ていない。

## 6. 4 動詞述語文との連続面

ここでは、動詞述語文との連続面について、簡単にみておく。

英語では、-ing の形をとらない動詞のグループがあって、「状態動詞」とグループ分けされ「運動動詞」と対立している。また、様々な言語における、状態性の動詞の encoding のあり方が、形容詞の encoding と相關することは、類型論でも指摘されている。さらに、形容詞を持たないとされる言語の多くで、property expression が stative verb の一部で表されることを考えても、その関係が注目される。

日本語でこれに対応する動詞グループとしては、「スルーシテイル」の対立のない「静態動詞（工藤 1995）」および「スルーシテイル」の対立が人称と絡み合って典型的なアスペクト対立をしめさなくなる「内的情態動詞（工藤 1995）」があげられる。これらの動詞を述語とした文と《特性》《状態》との関連について、簡単な見通しだけ立てておきたい。

### 6. 4. 1 静態動詞を述語とする文

まず、工藤（1995：77）があげる「静態動詞」のリストをみておく。

#### (C・1) 存在動詞

- ある、いる
- そんざいする（そんざいしている）、てんざいする（てんざいしている）

#### (C・2) 空間的配置動詞

- そびえている、ひしめきあっている、めんしている、りんせつしている

#### (C・3) 関係動詞

- あたいする、あたる、あてはまる、そうとうする

- ・あたいする、あたる、あてはまる、そうとうする
- ・いみする（いみしている）、いぞんする（いぞんしている）、ことなる（ことなっている）、しめす（しめしている）、ちがう（ちがっている）、てきする（てきしている）
- ・にている

## (C・4) 特性動詞

- ・甘すぎる、おおきすぎる、およげる、はなせる
- ・にあう（にあってる）
- ・ありふれている、すぐれている、しっかりしている、せいつうしている、ばかりしている、まさっている

(C・1) の存在動詞から考えてみよう。

存在動詞は、非過去形で現在・未来を表すなど、形容詞と共通する性質を持っている。また、先にみたように、宇和島方言では存在動詞にショル形式があり、時間的局所限定があることを明示する(5. 1. 2)。

- ・あの山にはへびがおる。 <非一時的>
- ・さっきからずっと、部屋におりよる。<時間の中への顕在化>を明示

工藤 (1995 : 290)

さらに、存在動詞のショル形式は、多くが「発話主体の<知覚性>とむすびついている(工藤 1995:290)」との指摘もあり、evidentialityとの関連も含めて興味深い。

標準語の存在動詞について、時間的局所限定の観点から注目した本格的な研究は、まだ見出すことができない[注8]。しかし、ポテンシャルーアクチュアルのグラデーションはあるはずで、主語のタイプや、時間的な性質に注目した研究の進展が待たれるところである。

- |                   |       |              |
|-------------------|-------|--------------|
| ・へびは藪の中にいる。       | へび《類》 | 時間的局所限定<->   |
| ・このへびは、縞模様がある。    | へび《個》 | 時間的局所限定<->   |
| ・このへびはいつもこの場所にいる。 | へび《個》 | 時間的局所限定<+>反復 |
| ・こんなところにへびがいる。    | へび《個》 | 時間的局所限定<+>   |

残る「静態動詞」についてもみていく。本論文は《関係》を表すものを対象外としているので、(C・3)については今後の課題となる。ここでは、(C・2)「空間配置動詞」および(C・4)「特性動詞」について考えてみよう。

これらを用いた表現は属性表現的であり、基本的に「認識レベル」が前景化しやすく、属性主の本質的属性—すなわち《特性》を表す。樋口(1996)の「質形容詞」と共通した性質を持つ。

- ・「私の下宿ね、国道176号線に面してるの」
- ・「バレンタインデーにチョコレートあげるなんて、ありふれてるよね」

語彙的意味に逸脱状態であることが含まれている「甘すぎる」「おおきすぎる」などについては、特に時間の状況成分がある場合には、《状態》の意味になる

- ・「今日のお母さんのプリン、甘すぎるね」 《特性》……………(1)
- ・「今日は、お母さんのプリン、甘すぎるね」 《状態》……………(2)

もちろん、(1)の場合でも、程度副詞が共起して「評価レベル」が前景化しやすくなると、形容詞述語文の場合と同様に「一時的感情評価=《状態》」の解釈も出てくる。

- ・「今日のお母さんのプリン、ちょっと甘すぎるね」

#### 6. 4. 2 内的情態動詞を述語とする文

次に、「内的情態動詞」を述語とする文について考えてみよう。まず、工藤(1995)の内的情態動詞のリスト(工藤1995:76-77)にどのような動詞があげられているかを見ておくと、次のようになる。

##### (B・1) 思考動詞

- ・おもう、かんがえる、うたがう、しんじる／わかる、さっする
- ・いのる、きたいする、ねがう、のぞむ

##### (B・2) 感情動詞

- ①あきらめる、あこがれる、いらいらする、うらむ、うんざりする、おそれる、  
かんしゃする、かんしんする、かんどうする、きになる、くるしむ、けいふくする、

けいべつする、こうかいする、しとする、しんぱいする、どうじょうする、なやむ、  
にくむ、はらがたつ、はらはらする、はんせいする、まよう、めいる、よろこぶ  
 ②あきあきする、あきれる、あんしんする、おどろく、がっかりする、こまる、せいせいする、  
たいくつする、たすかる、びっくりする、ほっとする、まいる、よわる

## (B・3) 知覚動詞

あじがする、おとがする、かんじる、きこえる、ざらざらする、つるつるする、におう、  
ぬるぬるする、みえる

## (B・4) 感覚動詞

- ①いたむ、うずく、かんじる、くらくらする、(めが) くらむ、つかれる、づつうがする、  
どきどきする、ふるえる、ほてる、むかむかする、(いが) もたれる  
 ②しびれる、つかれる、(のどが) かわく、(はらが) へる

これらの動詞が述語となる文についての本格的な研究は、生成文法が先行していて、その「非対格性」の是非などについて理論的な論争があるものの、記述的な研究の分野ではまだ十分な蓄積があるとはいえない。その語彙的意味からいっても、いわゆる「感情・感覚形容詞」との連続性が予想されるところであるが、それを十分に証明できるだけの記述は、動詞側にも形容詞側にもまだ用意されていない。ここでは、形容詞述語文を観察してきた立場から、トピック的に形容詞述語文との類似点を観察するに留まる。

いま、<はなし合い>のテクストに限定していえば、形容詞述語文との関連では、内的情態動詞のシティル形式が最も興味深い。これらの動詞のシティル形式は、「継続的な感情・感覚の確認・記述」を表し、形容詞に近づくことが予測される。人称性の問題や、類義の形容詞との関連など考えなければならないことはたくさんあるが、今、時間的な側面と属性表現的な側面にのみ注目して、少しみてみよう。

内的情態動詞のシティル形式を用いた表現を見ていると、思考や感情などの主体が、形容詞述語文の「評価者」に近づいており、思考や感情の対象への評価付けをしていることに気づく。工藤（1995）の用例をいくつか引用してみよう。

- ・「小夜子さん、気をしっかりもたなくちゃいかんよ。お父さんは絶対に無実なんだ。  
誰がなんといおうと、私はそれを信じている」（葬送行進曲殺人事件※工藤用例）
- ・「私は、劉さんを友人だとおもっている」（項羽と劉邦※工藤用例）
- ・「近所のひとたちも感心しているわ」「そうでしょうね。まったく立派な方ですね」  
(美しき嘘※工藤用例)

- ・「どうしたの？越した先がわからなくて、連絡もできないって、佐山先生の奥さんが心配してらしたよ」(女であること※工藤用例)

大まかに言って、(B・1)の場合は、その評価が別の語で表されており（無実だ・友人だ）、それ以外の場合は、評価を内的情態動詞自身が表している（感心している・心配している）。

内的情態動詞の語彙的意味から、これらの表現は、評価者による一時的感情評価を表す。しかし、同時に感情・感覚の対象への「特性付け」の側面も含まれている。たとえば、先程の用例では「父=無実だ」、「劉さん=友人だ」、「(感情の対象となっている人)=感心だ」(次の会話の「立派な方」という表現に注目)、「連絡できること=心配だ」という特性付けを指摘することができるだろう。これらの特徴は、いわゆる「感情・感覚形容詞」を述語とする形容詞述語文と共通する。

また、形容詞述語文では、評価者が評価レベルの「属性主」となることが観察されたが、この内的情態動詞のシティル形式でも、同様のことが観察できる。

- ・「あの刑事さん、あなたのこと犯人だって思ってるわ」「ほっとけ、あんな奴。思い込みが激しいんだ」
- ・「あなたのこと、本当に心配してるのよ」「やさしいんだな、お前」

今、指摘したことは、あくまでも形容詞述語文を観察してきた立場から、共通点を指摘したもので、これが内的情態動詞の本質だと主張しているものではない。

言語によって、これらの表現が動詞述語文だったり、形容詞述語文だったりすることは、英語と日本語を比較するだけでも明らかであり、これらの表現について、形容詞述語文との相違を整理していくことは、必要であろう。また、最終的な結論に至るためにには「評価とは何か」について、動詞から名詞までを視野に入れた記述的な研究をしなければならない。今の筆者には遠い目標だが、形容詞述語文を見てきた立場から、今後、少しづつ考えを深めていきたい。

## 6. 5 本章のまとめ

本章で記述したことを箇条書きで再確認すると、次のようになる。

- 時間的局所限定の定義について再確認した。(6. 1)
- 《特性》と《状態》の連続面にある「時代特定的な特性」について考えた。(6. 2)
- 《個》が属性主となる《状態》表現について、「現在」「過去」「未来」のそれぞれの場合に分けて観察・記述した。(6. 3)
- 「動詞述語文」と「形容詞述語文」の連続面について、工藤(1995)を参考に概観し、今後の課題を整理した。(6. 4)

次の第7章で、第二部全体のまとめを行い、第8章の結論へつなぎたい。

---

[注1]この対比の意味を避けるため、純粹に属性を述べたいときは、かえってゼロマーク（無助詞）「戦前のトマト、すっぱかった」や、「って」によるマーク「戦前のトマトって、すっぱかった」という表現の方が好まれるようにも思われる（この点は、工藤真由美先生のご教示による）。とりたてについて、このような視点からの研究があるかどうかを調べようとしたが、筆者の不勉強と、あまりの文献の多さに、適当な文献にたどりつけないままになってしまった。今後とも調べていきたい。

[注2]これに関連して、絶滅種など「時代的特定」が語彙的意味に含まれる《類》が属性主になる場合も、過去の《特性》表現になり、過去形になることもある。5. 2. 3も参照。

- トリケラトプスは足が太かった。

[注3]属性主が《類》の場合に、時間的な特定を<連体修飾成分>で受けるか、<状況成分>で受けるかによって、読みが多少変わることを見たが、同様のことが、属性主が《個》の場合でも観察される。

- きのうのあなたのダンス、素晴らしかった。

→「きのうのあなたのダンスの《特性》」

- きのうは、あなたのダンス、素晴らしかった。

→「あなたのダンスの、昨日における《状態》」

性急な結論は避けなければならないが、「個別・具体化（=アクチュアル化）」する要素が、<連

体修飾成分（規定語）>である場合と、<状況成分>である場合とでは、幾分解釈が異なってくると思われる。

確かに、パラフレーズが可能であり、実際、どちらの場合でも「逸脱状態」の含意が可能であるので、次のように誤解に基づくやりとりも出てくる。

- （※歌舞伎座の守衛）「今夜の狐忠信、ようございました」／  
 （※狐忠信を演じた役者）「なんだよ。いつもはダメってことかい」（古畠1：58）

守衛はあくまでも「今夜の狐忠信」について言及しているのであって、「普段がどうか」には触れていない。しかし、役者はそこに会話の含意を読みとっている。もちろん、この場合、守衛は「なにをおっしゃるんですか、今夜の狐忠信もまた格別だったってことですよ」などと言って、キャンセルすることが容易である。

この守衛のことばの「今夜」が<状況成分>の場合はどうだろうか。

- （※歌舞伎座の守衛）「今夜は、狐忠信、ようございました」／  
 （※狐忠信を演じた役者）「なんだよ。いつもはダメってことかい」

この場合、キャンセルするのには、さきほどのやりとりより多少手間が掛かるのではなかろうか。

[注4] このタイプの「時代特定的な特性」は、調査した小説の会話文では採取することができなかったため、作例を用いることになった。他のテクストタイプにまで調査の範囲を広げた場合、この部分だけ「かたりのテクスト」を用いることになるので、避けることにした。たしかに、新書などには見られるが、学術的な内容の場合、過去形－非過去形の用いられ方に、「はなし安いのテクスト」とは異なる部分もあり、慎重な扱いを要する。テクストタイプによる違いが出る部分であると予想されるが、本論文では扱うことができなかった。今後の課題としたい。

[注5] 5章の《特性》を表す表現のところで見たように、いわゆる「感情・感覚形容詞」が述語になっている《特性》表現は、主観によって「属性主」と「属性」の結びつきが可変的であるため、いわゆる「属性形容詞」が述語になっている場合より（例えば、「この作品は大きい」などに比べて）アクチュアル性が高い。

[注6] 樋口（1996：55）では、「質形容詞」「状態形容詞」に分類する必然性を十分に認めた上で、

次のような但し書きをつけている。

多義的な形容詞は、ひとつの意味において状態形容詞であるとしても、べつの意味では質形容詞であるということがおこってくる。おそらく、ひとつの形容詞における特性的な意味は状態的な意味からの派生であるだろうが、その派生的な、特性的な意味が固定化しているかぎり、その形容詞は多義的であるといわなければならない。たとえば、「つまらない」とか「おもしろい」とかいう形容詞は、心理的な状態をさしだすこともできるし、対象のもっている特性をさしだすことができる。(中略) これらは、ひとつの形容詞のなかで、ことなる意味をなしてて、その形容詞を多義的にしている。

本稿では、意味の派生ではなく、この種の形容詞は、認識レベルでは《特性》、評価レベルでは《状態》となるタイプの形容詞であると位置づけたい。

[注 7] 主文末ではないが、次のような例文があることは、evidentiality の問題と用例の少なさに何らかの関係がある可能性を示唆している。

- ・「じゃ、やっぱりそれが動機じゃないのか?」／「まあね……。でも、とにかく男のほうは女を殺す理由なんかないと言い張ってるように。事件当日も、ちょっとした口論さえしなかったって。ただ、その日に限って、どうも女の服装とか化粧とかが派手に見えて、だらしない感じがして、それが気にさわって仕方なかったとは言っているそうです」(地下街: 213)

第二中止形（なかどめ）の用例なのだが、「その日に限って派手で」ではなく「その日に限って派手に見えて」、「だらしなくて」ではなく「だらしない感じがして」という表現になっているところに注目したい。このような表現が存在し、評価レベルの積極的な前景化の手段として用いられていることも視野に入れた分析が必要となろう。

[注 8] 金水 (1999 大阪大学講義プリント 未公刊) の存在動詞の「1型」 - 「2型」の区別は、一部「具体 - 抽象」のスケールが基底にあるという点で「時間的局所限定」と共通する部分もある。1型を用いた表現について、「特定の時間・空間に限定された、いわば出来事の表現である」とか、「一時的な状態を表しているので、やはり出来事の描写であり」といった説明があるところなどを見ると、《状態》と共通した性質もあることが伺われる。しかし、金水 (1999) の分類の背景には、Kuroda (1995) の判断の分類があり、しかも「ゴキブリはすまいのそばにいる (ものだ)」は1型を用いた表現とされているので、「時間的局所限定」とは同一視できないことは明らかである。

## 7章 第二部のまとめ

第二部では、第一部で検討した方法論に基づいて、具体的に「属性表現の連続的なありさま」を観察・記述した。

5章：時間的局所限定の無い《特性》表現中心

→どのような場合にアクチュアル性が増すか？

6章：時間的局所限定の有る《状態》表現中心

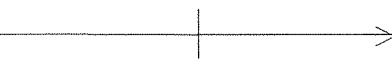
5章では、まず混乱を避けるため、「時間的局所限定」「アクチュアルーポテンシャル」について、二つの定義が日本語学で併用されていることを確認した。

①テ nsス対立の有無 = 時間的局所限定の有無

②テ nsス対立の有無 ≠ 時間的局所限定の有無 → 本論文の立場

そして、時間的局所限定というカテゴリーが、説明のためだけに用意された恣意的なものではないことを示すため、この時間的局所限定を形態論的に明示する言語や方言があることを簡単に見た。（スペイン語・チベット語・宇和島方言・熊本方言）

《特性》表現の中でも、最もポテンシャルな脱時間表現から記述を始めた。



これは、属性主が《類》の《特性》表現である。

脱時間表現は次のような場合、一般性が薄れ、アクチュアル性を増す

※多くの場合「評価レベルの前景化」が関連

- ①属性の結びつきに評価者の主觀性が強く感じられる場合
- ②<属性>にいわゆる《状態（感情・感覚）形容詞》が来る場合
- ③条件付きの場合
- ④外的な刺激から、実感として一般的な原理を導き出している場合

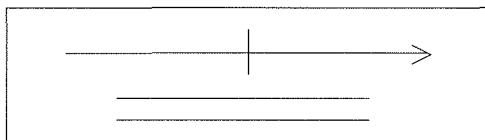
※動詞述語文の脱時間表現についても少しだけふれた。

次に、テンス対立を持つ属性表現について、まず、属性主と S T の前後関係からテンス対立が生じることを確認した。

<属性主>	の時間的存在が	S T より前	「過去」	過去形
		S T を挟んでいる	「現在」	非過去形
		S T より後	「未来」	非過去形

まず、現在の《特性》表現から観察した。

現在を表す《特性》表現  
 = S T (発話時) を挟んで存在している<《個》の属性主>の《特性》を表す  
 形容詞：非過去形



現在の《特性》表現

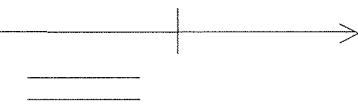
- ・(脱時間表現と比べて) 属性主が具体化している分、ポテンシャルな中にもアクチュアル性が増。
- ・さらに次のような場合→(脱時間表現と同様に) よりアクチュアル性、増。

- ①属性の結びつきに評価者の主觀性が強く感じられる場合
- ②<属性>にいわゆる「状態（感情・感覚）形容詞」が来る場合
- ③条件付きの場合
- ④外的な刺激から、実感として<属性主>の《特性》を導き出している場合
- ⑤「いつみても」「時々（～って思う）」等と共に起する場合

次に、過去の《特性》表現を観察した。

#### 過去を表す《特性》表現

= S T（発話時）より前に存在していた<《個》の属性主>の《特性》を表す



属性主 = 「死者」「すでにない地名」「文脈上すでに無いことが明らかなもの」「過去の出来事」等

#### 過去の《特性》表現

→「ポテンシャルからアクチュアルへ」の連続相が鮮やかに浮かび上がらない  
→原因は？

過去の場合は、評価者が自分で過去のある時点において確認している、という  
主觀的な（evidentialな）ニュアンスが強い。  
→「評価者による、過去の一時的感情評価《状態》」が前景化しやすい。

#### 過去の《特性》表現のその他の特徴

- ①<属性主>が「過去の出来事」の場合  
→「過去の出来事+て（で）」の形をとることが多い。

②<属性主>が「歴史上の偉人」「高名な作家・芸術家」の場合

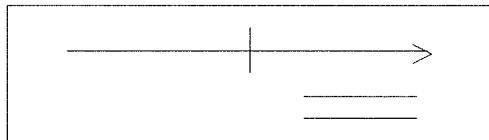
→非過去形が用いられることがある。

この場合、過去形に置き換えることもできる。

最後に、未来の《特性》表現を観察した。

未来を表す《特性》表現

= S T (発話時) より後に存在する<《個》の属性主>の《特性》を表す  
形容詞：非過去形



場合分けとしては想定されるが、実例はほとんどみられない。

→原因は？

- 「まだ存在していない《個》の《特性》を述べる表現」という設定自体が無理？
- 「未来表現」と「属性表現」の関係から来る必然的なもの？

名詞述語文と形容詞述語文の連続面について、佐藤（1997）の記述を引用しながら次のような問題点を指摘した。

- <属性主>の性格との関係
  - 形容詞述語文の場合と同様、《類》が<属性主>の《特性》表現は、「脱時間」の用法を持つ。
- アクチュアル性が増す場合
  - 形容詞述語文と同様に考えることが可能。
- 「評価性」の問題は名詞述語文でも重要
  - 「評価レベル」の問題は：名詞述語文でも共通した課題
  - 《質》の場合とどのように異なるのか？
- いわゆる形容動詞と名詞との関連→さらに詳しい観察が必要。
- 「形容詞+形式名詞」タイプの位置づけ
  - 重要な問題を提起

以上が、5章の記述内容である。

6章では、時間的局所限定のあるアクチュアルな属性表現—すなわち《状態》表現について、観察・記述した。

まず、時間的局所限定について再度確認し、《状態》表現は、基本的に<属性主>が《個》であることを確かめた。その上で、次のような場合が《特性》と《状態》の連続面にあることを確認した。

「時代特定」が時の<状況成分>として表れる属性表現

- (例) • 近頃、女は強い。
- 戦前、トマトはすっぱかった。
- 縄文時代、日本人は背が低かった。

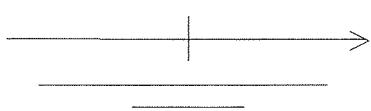
また、その分析に関連して、次の傾向を確認した。

「時代的特定」 : <連体修飾成分>として現れる場合 → 《特性》的  
 <状況成分>として現れる場合 → 《状態》的

次に、「個」を属性主とする状態表現について、まず、現在の場合から観察・記述した。

現在を表す《状態》表現

= S T (発話時) を挟んで存在する<《個》の属性主>の《状態》を表す  
 形容詞 : 非過去形



混乱を防ぐため、まず始めに前提として、次のことを確認した。

(A) 典型的な《状態》表現とは？

→「認識レベル」で明らかに「一時的状態だ」と言える場合。

→属性主の「逸脱状態」を表す。

(B) 《状態》か《特性》かで、迷う場合とは？

→「認識レベル」では《特性》的で、

「評価レベル」では「一時的感情評価」で《状態》と捉えられる場合。

その上で、(A) (B)、それぞれの場合について、どのような特徴が見られるかを観察・記述した。

(A) 認識レベルで、一時の《状態》表現である場合。

以下のような特徴が、観察された。

- ①「今」「最近」「この頃」などの「時の状況成分」によって、一時的《状態》であることが示されている。
- ②「変だ」「おかしい」「珍しい」など、一時的な逸脱状態であることが語彙的意味に含まれた形容詞が述語になっている。
- ③「～にしては（ちょっと）」などで、予想外の逸脱状態であることが示されている。
- ④「変に」「妙に」「珍しく」などの逸脱状態であることを示す副詞が共起している。
- ⑤前後の文脈から、逸脱状態であると判断できる。
- ⑥「属性主」と「属性」の結びつきの意味的な関係から、逸脱状態だと判断できる。

※「相変わらず」「時々」などが共起して、一時的《状態》が「反復・習慣」的に繰り返される場合→ポテンシャル化が進む。

(B) 形容詞分類と絡んで「評価レベル」の前景化によってアクチュアルに解釈され、《状態》表現となる場合。

※いわゆる「感情・感覚形容詞」

「アクチュアル性の高いもの→ポテンシャル性が高まるもの」

次のようなグラデーションが観察された。

①積極的に評価レベルが前景化され、《状態》であると解釈されるのは、  
次のような場合。

(1) 認識レベルの「属性主」(=感情の対象)が明示されない場合。

(2) 倒置で、形容詞が文頭に置かれる場合。

一語文に近くなり、話し手の評価(=感情・感覚)が前面に押し出される。

(3) 評価者(=評価レベルの「属性主」)が明示される場合。

②次に、認識レベルの「属性主」が明示されていても、それが具体的・一回的な性質のもの場合→《状態》的に解釈される。

③程度副詞が共起していて、「評価レベル」が前景化している場合。

④認識レベルの「属性主」が明示され、認識レベルでは、「属性主」の本質的《特性》をとらえていると判断される場合。

→認識レベルと評価レベルの解釈が拮抗

⑤認識レベルの「属性主」の一般化が進む

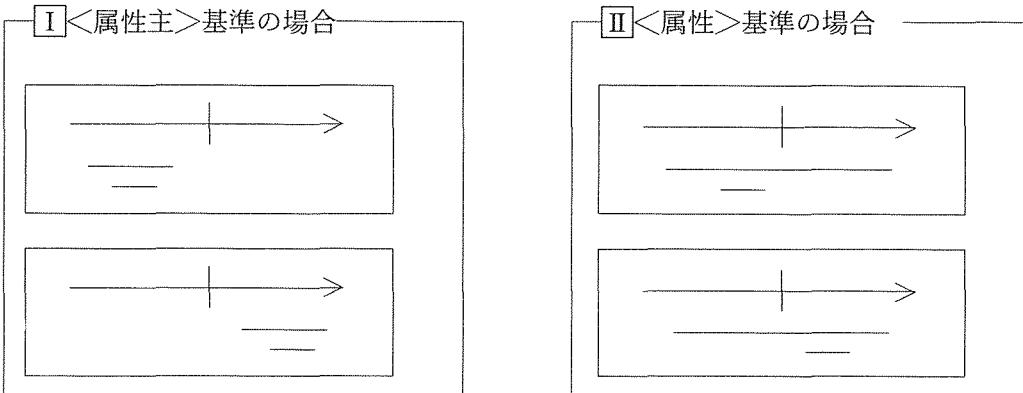
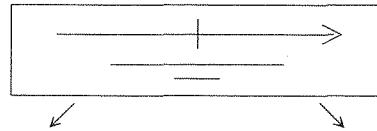
→認識レベルのポテンシャル化が進む

→《特性》的に。

※「反復・習慣」的な解釈も関与することあり。

《状態》表現のテンス対立には、二つの基準軸がある。

現在の《状態》表現



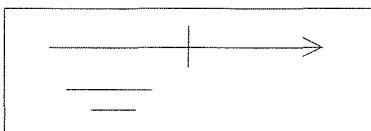
このことを確認した上で、「過去の状態表現」「未来の状態表現」について観察した。

過去を表す《状態》表現

- I** 発話時 (S T) には既に存在しない《個》の属性主の一時的な《状態》を表す
- II** 発話時 (S T) を挟んで存在している《個》の発話時以前の一時的な《状態》を表す

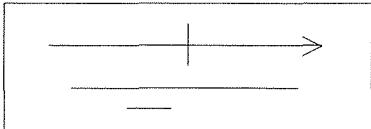
形容詞：過去形

**I**



これは、<属性主>基準で、現在の《状態》表現とテンス対立している。

**II**



こちらは、<属性>基準で、現在の《状態》表現とテンス対立している。

〔I〕：発話時（S T）には既に存在しない《個》の属性主の一時的な《状態》を表す場合

用例数が少ない→原因：採取の絶対量の不足？特殊な状況？

→過去の《特性》表現と同じ問題があるか？

過去の場合は、評価者が自分で過去のある時点において確認している、という  
主観的な（evidentialな）ニュアンスが強い

→「評価者による、過去の一時的感情評価《状態》」が前景化しやすい

→〔II〕の（B）になる

II - (A)

・発話時（S T）を挟んで存在している《個》の発話時以前の一時的な《状態》を表す  
場合（現在の《状態》の（A）タイプ）

※現在の場合と同様の特徴を見出すことができると思われるが、用例数が少ない。

→現在の場合の①～②同じ特徴があることは、内省で予測可能。

※動詞の resultativeとの関連も含めて、もう少し調査範囲を拡大して考える必要あり。

※これらの用例でも、「評価者自身が、過去のある時点において確認している」という  
評価レベルを前景化した解釈も可能である（その場合は（B）タイプになる）。

→属性表現の「過去」=主観的な側面（なかでも evidentiality）との絡み合い

II - (B)

・感情・感覚形容詞が用いられ、評価レベルで、「過去の一時的感情評価=《状態》」  
であると解釈される表現（（B）タイプ）。

※これは、過去の《状態》の他の場合に比べると用例数は多少多い。

※現在の時と同様のことが指摘できる。

※グラデーションについても、現在と同様に観察できた。

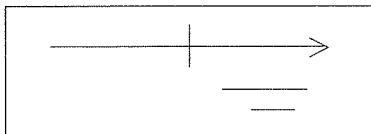
未来を表す《状態》表現

〔I〕発話時（S T）にはまだ存在しない《個》の属性主の一時的な《状態》を表す

〔II〕発話時（S T）を挟んで存在している《個》の発話時以後の一時的な《状態》  
を表す

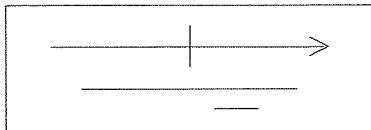
形容詞：非過去形

I



これは、<属性主>基準で、現在の《状態》表現と  
テンス対立している。

II



こちらは、<属性>基準で、現在の《状態》表現と  
テンス対立している。

I : 用例は見つけることができなかった。作例も難しい。

→まだ存在していない特定の属性主の属性を述べるという設定が無理か？

II : 例は少ない。若干集まるのは、主に条件節を伴った形である。

→まだ起こっていない事態やまだ存在しない事物に対する「予測される属性」

→「irrealis とは何か」についての議論が必要

6章の最後に、動詞述語文との連続面について、工藤（1995）を参考に少しだけ考えた。

以上が、6章の記述内容である。

## 8章 結論

本章では、これまでのまとめとして、本論文で明らかになったことを再確認する。ここでは、①「時間的局所限定」の必要性 ②「認識レベル」「評価レベル」という二重構造を認めることの重要性 ③「過去」「現在」「未来」の非等質性 の3つの点について主張することになる（8. 1）。

その後、今後の形容詞研究の方向性を探る。中でも注目したいのが、談話の情報構造も配慮に入れた研究の発展の必要性（8. 2. 1）である。最後に、本論文の立場から形容詞分類への提言を行う（8. 2. 2）。

### 8. 1 本論文で明らかになったこと

本論文では、最初に確認したように、現代日本語の形容詞について、

- 述定用法に限定し、
- 「動詞～形容詞～名詞」の連続相の中にあるものとして、
- 時間的な側面に注目して、

記述をしてきた。

その中で、「時間的局所限定（temporal localization）の有無」という意味的カテゴリーを取り入れ、形容詞述語文を predication のレベルで「出来事の時間的現象の個別・具体化の有無（アクチュアル－ポテンシャル）」という観点からグラデーションを為すものとして捉えた。

動詞述語文の時間的側面の研究は、動詞の形態論としての「アスペクト・テンス体系の記述」という形で進んできた。動詞述語文は基本的に客観世界に起こる「出来事 event」の描写であり、時間的局所限定が有るアクチュアルな表現である。したがって、動詞中心の研究では、時間的局所限定が無いポテンシャルな表現は「鳥は飛ぶ」「人は死ぬ」のような脱時間表現となり、「時間的局所限定」という概念は、テンス論の中に吸収され、必要性を十分には認められてこなかった。

しかし、形容詞述語文の記述においては、この「時間的局所限定」という意味的なカテゴリーが重要な役割を果たすことは、ここまで見てきたとおりである。時間的局所限定の

有無がテnsス対立の有無と一致しないことからも分かるように、これはアスペクチュアリティー、テンポラリティーと並ぶ「時間に関する意味・機能的カテゴリー」なのである。そして、そこには「話し手による出来事の把握のあり方」が関連しており、時間的局所限定は、話し手の主体性抜きには考えることができない。

先に引用したレーマン（1. 1. 2）をはじめとして、従来の研究では、全ての述語文を貫く時間的な特徴を「アспект」と呼ぶことがあり、一般言語学の分野でも、まだこの「時間的局所限定」という用語はあまり馴染みがないのだが、今後、形容詞述語文、名詞述語文の研究が進展する中で、これらの時間的特徴を「アспект」とすることは、動詞の形態論としてのアспект論を必要以上に拡大することになり、本来のアспект論の姿を歪ませてしまう危険があるようと思われる。むしろ、ロシア言語学が主張するように、テンポラリティー、アスペクチュアリティー、テンポラル・ローカライゼイションの三つを立てる方が、無理のない分析ができるのではないだろうか。

筆者自身がロシア語の原典にあたっていない現時点では、これ以上の主張はできないが、少なくとも、形容詞述語文の示す時間的なグラデーションを分析する上では、時間的局所限定の有無によって、《特性》と《状態》という二つに分類することは有効であった。今後、状態性の動詞や名詞が述語となった表現についての研究が同様の連續相を想定した上で並行して進むことで、この時間的局所限定という考え方の有効性が明らかになっていくのではないかと期待している。

結論①「時間的局所限定 temporal localization」という意味的カテゴリーは  
少なくとも形容詞述語文の記述には有効かつ必要である。

本論文では、形容詞述語文全てに（すなわち形容詞のタイプに関わり無く）意味的なレベルとして「認識レベル」と「評価レベル」の二つを認める立場をとった。

単純化して言えば、「認識レベル」とは「話し手の外にあって話題となる対象のレベル」であり、「評価レベル」とは「評価主体である話し手の内側のレベル」である。

形容詞述語文が主観的な側面を持つことは、いわゆる「感情・感覚形容詞」論を中心に従来から指摘されてきた。しかし、それは感情・感覚という語彙的な意味と関連して議論されることが多かった（例えば、人称制限など）。本論文では、「属性主」と「属性」を「評価的に」結びつけるという「属性表現」の本質から考えて、形容詞のタイプに關係なく、全ての形容詞述語文に二つのレベルを認めることから記述を始めた。

このように考えることで、従来混乱していた「非過去形でも過去形でもいい」と言われる表現の本質や、アクチュアルーポテンシャルの程度差が生じてくる原因を具体的に記述することができた。また、《状態》表現の分析では、どちらのレベルにおいて《状態》と解釈できるのかを整理することで、混乱をさけることができた。

樋口文彦の形容詞研究や工藤浩の副詞研究で指摘されているように、形容詞や副詞にとって、「主観的側面と客観的側面の絡み合い」は、その本質であろう。従来の国語学では、陳述論が盛んであった。そこには「話し手」の関与を常に視野に入れた文論があった。しかし、近年の日本語研究では、「客観的命題」+「主観的モダリティー」という二分論が進む中で、その客観性－主観性が相対的なものではなく、絶対的（純粹）なもののように捉えられる傾向が強まった。さらに、動詞論が盛んになったことで「客観的命題」の追求に拍車がかかった。今、もう一度次の点を確認する必要があるように思われる。

- (a) 命題は客観的事実そのものではなく、話し手によって描きとられたものである。
- (b) 命題とモダリティーは相互独立的なものではなく、モダリティーは命題の表す文の対象的な内容と相互関連的な存在である。

これらの点は、慎重な文論では、これまで常に押さえられてきた。話し手の主体的な関わりがあることは、言語の本質であり、そこへ立ち返る必要性があるのではなかろうか。国語学の伝統で言えば、陳述論への発展的な回帰が求められている。

結論②形容詞述語文の全てに「認識レベル」と「評価レベル」の二重構造を認めることができる。

第二部の記述編において、テンス対立を持つ形容詞述語文については、「現在」「過去」「未来」について場合分けをしながら記述してきた。

その中で再三指摘してきたように、「アクチュアルーポтенシャル」のグラデーションが顕著になるのは「現在」の場合であり、「過去」「未来」の場合は曖昧であった。

その原因として、少なくとも形容詞述語文においては、

- (a) 「過去」には evidentiality の問題が
- (b) 「未来」には irrealis の問題が

関わっている可能性があることも指摘した。

従来の動詞を中心としたテンス論では、「現在」「過去」「未来」は S T (発話時) と E T (出来事時) の前後関係としてかなり対等に等質的に扱われることが多かった。無論、

未来については、そのモーダルな側面が注目されてはきたが、基本的にはS Tとの前後関係で理解してきた。

しかし、形容詞述語文を見る限り、「現在」「過去」「未来」はそれぞれにかなり性質の異なるものである。途中でも触れたが、TMAカテゴリーの研究は、まずTAの二者の関わりから研究が進展してきた。これにMの側面が加味されるようになってきたのは最近のことである。特に日本語研究ではまだ今後の課題と言ってもいい。

今後、TMAの三位一体の研究が動詞を中心に進展していったときに、関連して形容詞述語文のもつ「評価性」や名詞述語文の「判断性」などが位置づけられていくだろう。その時に、「未来」・「過去」と「現在」の本質的な違いが明らかになるはずである。

結論③「現在」「過去」「未来」は等質ではない。

以上、本論文全体を通して明らかになった3つの点について、再確認した。

次の節では、今後の課題について考え、これから形容詞研究の方向性について考えておきたい。

## 8. 2 本論文の限界と今後の課題

先に、3章で本論文の研究対象を限定した。それは、裏返せば、本論文の限界を示している。

### ①テクストタイプ：

基本的に会話文（工藤1995の「はなしやすいのテクスト」）に限定してきた。

これは、S T（発話時）との前後関係を問題にするためである。

→今後の課題として、テクストタイプの拡大がある。小説の地の文や、新書などのテクストにおいて、ここまで観察してきたことが、どのように共通してあるいは異なって表れるのか、見ていかなくてはならない。

### ②文タイプ：

基本的に「平叙文・肯定」に限定（その中でも断定中心）。一語文も対象外。

→今後の課題として、文タイプの拡大があげられる。極性についても、形容詞述語文の「否定」は、とりたての問題ともからんで、複雑な様相を見せる。本論文では全

く扱わなかった「形容詞の程度性（スケール）」・「対義語」と否定の問題も含めてさらなる論考が必要である。

また、一語文については、その連續性について多少触れたが、文論の根本と絡む問題であり、川端や山田の論を視野に入れた議論の深まりが必要である。

### ③意味的なタイプ：

《特性》と《状態》を表す文を中心に扱ってきた。

→《関係》を表す形容詞述語文については扱っていない。関連して、比較構文などについても先程の程度性の問題も含めて今後の課題である。

### ④特殊な形容詞として排除したもの：

「ない」「ほしい」「よい」などについては、扱いに気を付けたい形容詞として、基本的に対象外とした。

→少し注でも触れたが（3章〔注2〕）、どのように基本からずれているのかをきちんと記述・整理する必要性がある。

### ⑤形容詞述語文のタイプ：

最も基本的な「N PはA d j」型中心。

→拡大の可能性あり。これについては、節を設けて、次に検討する。

本論文では、形容詞述語文の時間的な側面に注目して記述してきたため、上にあげたような限定を行ってきた。今後、形容詞述語文全体を見渡すためには、これらの課題を克服していくかなくてはならない。

## 8. 2. 1 談話論的アプローチ—装定用法と述定用法

先程の⑤の課題—すなわち「形容詞述語文のタイプ」の問題について、少し考える。本論文では、形容詞述語文として扱う対象として、最も基本的な「形容詞で言い切る形」に限定して観察してきた。しかし、今後の課題として、考察の対象をもう少し広くする必要性があることをここで確認しておきたい。

これまで数回ふれることのあったThompson (1988) は、形容詞の談話レベルでの機能を通言語的(cross-linguistic)に扱った論考である。Thompson (1988) は、Property Concepts Words の実際のディスコースにおける用法(use)を英語と中国語について調査・比較して、どちらの言語でも、Property Concepts Words が次の二つの機能を持つことを明らかにした。

- (1) predicating property of an established discourse referent
- (2) introducing a new discourse referent

そして、(1) は動詞と共通する機能であり、(2) は名詞と共通する機能であることから、言語によって Property Concept Words の encoding が動詞だったり名詞だったりするのはこの二つの機能を併せもつためであるとした。

形容詞の encoding について、実際のコーパスに基づいて「情報構造」を視野に入れたトンプソンの分析は、形容詞研究の新しい段階を示唆している。

本論文は、この二つの機能のうち、(1) についてみてきたといつていよいのだが、ここで一つ確認が必要なのは、トンプソンが英語の分析において、(1) の機能を持つものとして、次の二つのタイプを認めていることである。

- (a) copular verb + adjective
- (b) adjective + predicate nominal head noun(non-new-information-bearing)

具体的には次のようなものである。(用例番号出典のまま)

- (13) and her parents apparently weren't even that *wealthy* ..... (a)
- (15) that got me so *mad*..... (a)
- (18) But I did have lots of fun up at Lehigh. That was a *good school* ... (b)
- (19) (talking about apartments)  
*H* : Well, there is a *nice apartment* really. .... (b)

この(b)のタイプを認めることの妥当性は、類型論の他の研究でも指摘されているのだが、今、日本語の次のような文について考えても、その必要性が認められる。

[  
 • 太郎はやさしい。 ..... (a・1)  
 • 太郎はやさしくない。 ..... (a・2)

[  
 • 太郎はやさしい男だ。 ..... (b・1)  
 • 太郎はやさしい男じゃない。 ... (b・2)

(a・2) は (a・1) の否定である。それに対して、(b・2) と (b・1) の関係を

比べてみると、(b・2)は「男である」ことを否定しているのではなく、(a・2)と同様に「やさしい」ことを否定しているのがわかる。

すなわち、(b)タイプの文で predicate されているのは、property である。したがって、日本語の形容詞述語文について考えるときには、(a)だけではなく (b) のタイプも考察の対象に含めなくてはならない。

本論文では、まず基本的なところから記述するということで、この(b)タイプについては扱ってこなかった。おそらく《特性》表現としてきちんと位置づける必要があると予想されるこのタイプも含めた考察が今後要請される。特に、今見たように、否定との関係を考慮に入れると、この観点は大変重要な意味を持ってくる。今後の課題としたい。

### 8. 2. 2 形容詞分類への提言

ここまで記述は、先行研究の形容詞分類の枠にはあまりとらわれない形で行ってきた。従来、形容詞研究の中心のひとつは、形容詞分類にあり (0. 2. 2)、様々な形容詞分類が提示されている。ここまで見てきたとおり、本論文の目的は、property expression の時間的側面の解明にあって、形容詞分類を第一の目的とはしていないが、最後に本論文の立場から、形容詞分類について提言できることは何か、について少しだけ触れておく。

本論文では、形容詞述語文を記述するにあたって、

- ①時間的局所限定の有無
- ②「認識レベル」「評価レベル」の二重構造

という二つの観点が必要性となることを確認してきた。この二つの観点と、従来の形容詞分類との関連はどうなるのだろうか。

属性主が《類》の場合については、形容詞のタイプに関係なく、脱時間になることを確認した (6. 1でみた特殊な場合をのぞく)。

そこで、ここでは、属性主が《個》のときについて考えてみたい。すべての形容詞述語文は、「認識レベル」と「評価レベル」の二重構造を持つのだが、属性主が《個》のとき、「認識レベル」「評価レベル」のそれぞれで、unmarked に《特性》《状態》のどちらを表すか、という点については、語彙的意味とある程度相関がある。

図示すると、次の表のようになる。

認識レ 《特性》	評価レ 《特性》	認識レ 《状態》	評価レ 《状態》			
A	◎			△	いわゆる属性形容詞の大半	質形容詞
B	△	○			「すきだ」「きらいだ」	
C	○			○	「あつい・いたい」 「おもしろい・つまらない・かわいい」	
D			◎	△	「へんだ・おかしい・いそがしい」 「げんきない・まぶしい・ひもじい」	状態形容詞
E	△			◎	いわゆる感情形容詞の大半	

上に示した5つのタイプのそれについて、ここまで記述から分かっていることをまとめると、次のようになる。

### <A>

- いわゆる「属性形容詞」の大半。評価者はふつう明示されない。
- 「今日は変に～」などで、「認識レベル」の逸脱《状態》を表すこともできる。
- 評価者の明示や、倒置などで「評価レベル」の前景化もできる。

### <B>

- アクチュアル性を増すかどうかは、対象の具体性が関連する。

### <C>

- 従来の「感覚形容詞」と、対象への「特性付け」の性格の強い形容詞。
- 中間的な性格を持つ。言語によっては両方のレベルを表し分ける。

## &lt;D&gt;

- 「認識レベル」で逸脱状態であることが語彙的な意味に含まれる。
- 「反復・習慣」的にするとポテンシャルになるが、基本的に一時的。

## &lt;E&gt;

- いわゆる「感情形容詞」の大半。
- 感情の対象（原因）の明示化などで、「認識レベル」が前景化すると、対象への「特性付け」が意識され、「Cタイプ」に近づく。

こうして見えてくると、まず従来の「属性形容詞」「感情形容詞」という二分論は、典型的な<A>と<E>を取り出した分類であることがわかる。人称制限の有無を基本に置くと、<B>の扱いに苦慮する（西尾（1972）は基本的に感情形容詞に分類しているが、三人称主語をとれることを指摘している）。また、属性形容詞の中にも<D>のタイプがあることを見逃してしまう。典型的な両サイドを指摘することは、分類の第一段階としては決して誤りではないが、その不備を補うべく様々な分類案を生み出す源となった。代案の多くは、共起制限などによって形容詞を分類しているが、0章でも指摘したとおり、装定用法と述定用法を同時に扱うテストフレームが大半であったのと、二重構造を認めないため、各形容詞が「多義的」になってしまふ傾向があった。

すでにここまで見てきたように、形容詞述語文は二重構造をしており、様々な条件によって、そのどちらのレベルが前景化するかが決まってくる。そのありさまは、共起制限だけで記述するのは難しい。また、時間的局所限定への目配りがこれらの分類にはなかった。そのため、類型論的な比較は難しく、「日本語特有の」分類になっている感が否めない。

荒（1989）・樋口（1996）などの「質形容詞・状態形容詞」という分類は、本論文と同様に時間的局所限定を念頭に置いた分類であり、概略、右端に示したような対応をしている。樋口（2000）は、質形容詞を「特性形容詞」と改称しており、これによって、基本的に《特性》表現と対応するのが「特性形容詞」、《状態》表現と対応するのが「状態形容詞」というタームの一貫性が保たれるようになった。すべての分類にはその中間に位置づくグループが存在するが、ここでは<C>がそれにあたる。実際、樋口（1996）でも、これらの形容詞は扱いが揺れている。

ここまで、何度も繰り返し確認してきたように、時間的局所限定は、動詞述語文から名

詞述語文までを貫く「出来事の時間的現象化の個別・具体性の有無」である。現代日本語では、形態論的に明示する手段を持たないため、樋口達の形容詞分類も従来、その必要性が認められてこなかった。しかし、形態論的に時間的局所限定を明示する言語であるチベット語の形容詞分類（絶対形容詞・相対形容詞 武内（1990：10））などと無理なく比較・検討できるのは樋口の分類（特性形容詞＝絶対形容詞、状態形容詞＝相対形容詞）であり、従来の「属性－感情」の分類ではない。ただし、樋口の分類も、時間的局所限定は前提にされているが、「認識レベル」「評価レベル」の二重構造については、通じる指摘はあるものの、積極的に形容詞分類には取り入れられていない。そのため、随所で形容詞に「多義性」を認める結果となっているし、<D>タイプが「質（特性）形容詞」に分類されたりもする。

本論文では、形容詞分類についてこれ以上の言及をする用意はないが、形容詞分類においても、「時間的局所限定」「二重構造」の二つを積極的に考慮に入れていく方向性があるようと思われる。そうすることで、「多義性」の正体の一部が整理されてくるのではないだろうか。形容詞分類を積極的に論じるためには、さらに多くの用例を集め、その上で規定用法と述定用法との関連も整理しなければならない。まだ現段階では遠い目標ではあるが、ここで見てきたことが、その土台となれば幸いである。

## むすびにかえて

どの研究者にとっても、その個人研究史の中で「修士論文」の占める位置というのはかなり重いものであろう。そう考えれば、今自分の感じている感慨というのも、決して特別なものではないかもしれない。しかし、卒業論文からすでに14年を経て、ようやく形になったこの論文を見るとき、その思いは複雑である。

この論文が形になるまでには、ほんとうにたくさんの方々に支えていただいた。今、ここに謝辞とともに脱稿のご報告をしようとしたとき、いったい何人の方にどの順番にお礼を申し上げていいのかわからないほどである。どの順番でお礼をここに綴っても、それは失礼にあたるようにも思われ、できることならすべての方に一度に心からお礼を申し上げたいのだが、それもかなわない。順序をつけるのは本意ではないが、言語の特性上、避けることができない。失礼にあたる節もあるかと思うがお許しいただければ幸いである。

指導教官の工藤眞由美教授、石井正彦助教授には、研究への姿勢から文献の読み方、さらに論考の進め方などたくさんのこと教えていただいた。客観的に見れば、私は、社会人入学という制度を使って（しかも11年のギャップを抱えて）入学してきた教師気分の抜け切らぬ怪しげな学生であったに違いない。しかし、先生方は、他の学生と同様に御指導くださった。特に工藤先生は、お忙しい中、時間を設けて様々な議論に応じてくださった。学部時代の私は「国語学・日本語学を学んでいる学生」に過ぎなかったが、工藤先生に御指導いただくながれ、「言語学の研究者」への脱皮への方向性を示していただいた。本論文を書き上げたことで、少しでもその方向へ近づくことができているなら、これに勝る喜びはない。石井先生には、資料に対する厳しさを教えていただいた。まだまだ今回の論文ではこの点に関しては教えていただいたことを十分に活かしきれてはいない。これからさらに努力していかなければならない。

学部時代の指導教官である宮地裕先生には、折に触れ温かい励ましのお言葉をいただいた。なにより、大学院に戻る決意を固める大きなきっかけとなったのは、阪神大震災のあと、宮地先生よりいただいた一通の郵便である。震災後、宝塚にお住まいの先生にお見舞いにも伺わなかつた私の元に、ある日宮地先生からご丁寧なお手紙と共に私が学部4年時に書いたレポートが届けられた。震災後、本棚から飛びだした本を片付けておられるときに本の間から発見されたとのことであった。一学部生のレポートを保存して下さっていただけでも感激であったが、なにより、それを送ってくださったことに感動した。そしてそのレポートを見たとき、何か自分の中で封印してきた「研究への思い」のようなものが

ふつふつと湧き出してくるのを止めることができなかった。卒業の際、宮地先生からいただいたカードに「これからが人生の勝負だから、しっかり生きていってほしい。」とあったのを思いだし、自分はしっかり生きているのだろうか、日々の繰り返しの中に何か失ってしまってはいないか、と考えた。これが、数年後、退職し大学院に戻る大きな引き金となった。宮地先生にレポートを送っていただくことがなければ、おそらくこの論文はなかつたであろう。

大学を離れて12年目にして研究の世界へ戻る決意をしたものの、当時の私は不安でいっぱいだった。「いまさら何をしに来たのだ」「学問を舐めてはいけない」というお叱りを覚悟していたが、国文研究室でつながりのあった方々から「おかえり」「研究会においで」という予想もしない温かいお言葉をいただいた。今では、研究者として業績をあげ、第一線で活躍されているにも関わらず、以前と同じように接してくださる皆様に甘え、研究会などにも参加させてもらった。特に日本語記述文法研究会では有益な発表を数多く聞き、刺激をいただいたことを感謝している。中でも、森山卓郎氏、安達太郎氏には研究生活上の相談にものっていただいた。

大阪府立高校に11年勤務したことは、研究を続けていく上では大きな時間のロスであったとの御指摘もある。しかし、退職後3年を経て、あの11年間は貴重なものだったと実感している。大学構内で会う卒業生の面々（なかには先輩もいる）からの励ましは、様々な場面で私を助けてくれた。また、退職時に担任していた四条畷高校52期生1年4組の生徒一人一人がくれた手紙の束は、時として逃げ腰になる私を叱咤激励してくれた。さらに、多大なご迷惑をかけたにもかかわらず、退職時に「がんばりや」と言って送り出してくださった同僚の先生方にも、本論文を書き上げたことをご報告しなければならない。

30代半ばにして、退職・進学という自分勝手を貫き通せたのも、精神的・経済的に全面的にバックアップしてくれる存在があったからこそである。温かく見守られていることを感じながら勉強に集中できたことは、大変幸せであった。

多くの方々に支えて頂いて、ようやくここまでたどりついた。ここで慢心することなく、これからも「ことば」についてより深い理解を求めて、歩み続けていきたい。

最後に、本論文は、結婚姓の「吉村裕美」で大阪大学大学院文学研究科に提出した。

筆者は、ことばについて研究する際には、筆名として旧姓の「八亀裕美」を用いている。本論文の提出にあたり、教務担当の方にも親身に相談にのっていただいたが、筆者は急進的な夫婦別姓主義者ではないので、論文内容と直接関わらない氏名の表記に関して、大学側と交渉するエネルギーを持つことができなかった。そこで、戸籍上の氏名で提出するこ

としたものである。

ただし、今後、本論文を引用する際には、「八亀裕美」の名で引用することをここに記しておきたい。

2001年 正月 八亀（吉村）裕美

**【用例出典】**

- 調査文献全てではなく、用例の出典となったもののみ示す。
- 短編集は、書名で示す。
- 一部、新聞などからの引用もあるが、それは本文中に明記している。
- 他の論文中より引用した場合も、本文中に明記している。

- [ひとり] 『ひとりでいいの』 内館牧子 講談社文庫（書き下ろし） 1993
- [古畠1] 『古畠任三郎 1』 三谷幸喜 扶桑文庫 1996（単行本 1994）
- [古畠2] 『古畠任三郎 2』 三谷幸喜 扶桑文庫 1996（単行本 1994）
- [ロング] 『ロングバケーション』 北川悦吏子 角川文庫 1997（単行本 1996）
- [地下街] 『地下街の雨』 宮部みゆき 集英社文庫 1998（単行本 1994）
- [ダンス] 『Shall we ダンス？』 周防正行 幻冬社 1999（単行本 1996）
- [神様] 『神様、もう少しだけ』 浅野妙子（百瀬しのぶ） 角川文庫 1999（単行本 1998）
- [月の] 『月のしづく』 浅田次郎 文春文庫 2000（単行本 1997）
- [ターン] 『ターン』 北村 薫 新潮文庫 2000（単行本 1997）
- [律子] 『律子慕情』 小池真理子 集英社文庫（単行本 1998）

## 【主要参考文献】

○形容詞研究文献検索の基礎資料をめざし、実際の引用文献よりも広い範囲をあげることにした。本論文の内容に直接関連しないものも含まれている。

- Anward,Jan (2000) A dynamic model of part-of-speech differentiation, : In Vogeland Comrie(eds) *Approaches to the Typology of Word Classes*, E A L T 2 3. Mouton de Gruyter
- Bhat,D.N.S. (1994) *The Adjectival Category,— Criteria for differentiation and identification*, S L C S 2 4. John Benjamins
- Bhat,D.N.S. (1999a) *The Prominence of Tense Aspect and Mood*, S L C S 4 9 John Benjamins,
- Bhat,D.N.S. (1999b) Intransitive/adjectival predication *Linguistic Typology* 3. Mouton de Gruyter
- Bhat,D.N.S. (2000) Word classes and sentential functons : In Vogel and Comrie (eds) *Approaches to the Typology of Word Classes* E A L T 2 3. Mouton de Gruyter
- Bolinger,D.L. (1967) Adjectives in English,attribution and predication. *Lingua* 18
- Bolinger,D.L. (1972) *Degree words.* Mouton The Hague
- Bybee,Perkins and Pagliuca (1994) *The Evolution of Grammar.* University of Chicago Press
- Cohen,Ariel (1999) *Think Generic!—The Meaning and Use of Generic Sentences.* CSLI
- Comrie,Bernard(1976) *Aspect.* Cambridge,Cambridge Textbooks in Linguistics
- Comrie,Bernard(1985) *Tense.* Cambridge,Cambridge Textbooks in Linguistics
- Croft,William(1990) *Typology and universals.* Cambridge, Cambridge Textbooks in Linguistics
- Croft,William(2000) Parts of speech as language universals and as language-particular categories : In Vogel and Comrie(eds)

- Approaches to the Typology of Word Classes.*  
E A L T 2 3 Mouton de Gruyter
- Dixon,R.W. (1977) Where have all adjectives gone?. *Studies in Language*  
1 repri.in Dixon(1982)
- Dixon,R.W. (1982) *Where have all adjectives gone? and Other Essays in Semantics and Syntax.* Mouton de Gruyter
- Dixon,R.W. (1991) *A new approach to English Grammar—On semantic principles.* Oxford:Clarendon press
- Dixon,R.W. (1999) Adjectives : In Brown and Miller(eds)  
*Concise Encyclopedia of Grammatical Categories.* Elsevier Science
- Ferris,Connor(1993) *The Meaning of Syntax—A study in the adjectives of English.* Longman Linguistics Library. Longman
- Frawley,William (1992) *Linguistic Semantics.* Lawrence Erlbaum Associates
- Givón,Talmy (1979) *On understanding grammar.* Academic Press
- Givón,Talmy (1984) *Syntax I —A Functional-Typological Introduction.*  
John Benjamins
- Kuno,Susumu(1973) *The structure of the Japanese language.* Current studies in  
Linguistics series 3. MIT Press
- Lehmann,Christian(1990) Towards lexical typology : In Croft(ed) *Studies in typology and diachrony.* John Benjamins
- Lehmann,Christian(1999) Aspectual Type(s) : In Brown and Miller(eds)  
*Concise Encyclopedia of Grammatical Categories.*  
Elsevier Science
- Lyons,John (1968) *Introduction to Theoretical Linguistics.* Cambridge
- Quirk,et al (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language.* Longman
- Rijkhoff,Jan(2000) When can a language have adjectives?  
— An implicational universal : In Vogel and Comrie(eds)  
*Approaches to the Typology of Word Classes* E A L T 2 3.  
Mouton de Gruyter
- Schachter,Paul(1985) Parts-of-speech systems : In *Language typology and syntactic description Volume I.* Cambridge

- Stassen,Leon (1992) A hierarchy of main predicate encoding : In Kefer and Auwera(eds) *Meaning and Grammar* EALT 10. Mouton de Gruyter
- Stassen,Leon (1997) *Intransitive Predication*. Oxford:The Clarendon Press,
- Thompson,Sandra A. (1988) A Discourse Approach to the Cross-Linguistic Category 'Adjective' : In *Explaining language universals* . Basil Blackwell
- Tucker,Gordon H. (1998) *The Lexicogrammar of Adjectives—A Systemic Functional Approach to Lexis* Functional Descriptions of Language Series. CASSELL
- Wetzer,Harrie(1996) *The Typology of Adjectival Predication* EALT 17. Mouton de Gruyter
- 青山 文啓 (1998) 「二重主語構文と辞書」『月刊言語 27 - 3』大修館書店
- 東 弘子 (1992) 「感情形容詞述語文における感情主の人称制限—叙述の立場から」『日本語論究 3』研究叢書 122 和泉書院
- 荒 正子 (1989) 「形容詞の意味的なタイプ」『ことばの科学 3』むぎ書房
- 飯田 晴巳 (1984) 「形容詞研究の歴史」『研究資料日本文法 3』明治書院
- 飯豊 育一 (1973) 「形容詞・形容動詞の語幹・各活用形の用法」『品詞別日本文法講座 4』明治書院
- 石神 照雄 (1977) 「二重主格形容詞文の構造—形容詞の<内的論理構造>と助詞「ハ」「ガ」との相関」『日本語学試論 3』愛知教育大学国語学研究室
- 石神 照雄 (1983) 「副詞の原理」『副用語の研究』明治書院
- 石綿 敏雄 (1975) 「名詞・形容詞述語文の構造」『電子計算機による国語研究 7』国立国語研究所報告 31
- 梅園 春男 (1874) 『形状言五種活用図』(『研究資料日本文法 3』所収 明治書院)
- 遠藤 潤一 (1971) 「日葡辞書編者の形容詞観」『国学院雑誌 72 - 3』国学院大学
- 吳 玄定 (2000 a) 「連体修飾句の語順—動詞を中心に」『計量国語学 22 - 5』計量国語学会
- 吳 玄定 (2000 b) 『現代日本語における連体修飾語の語順の傾向』(大阪大学博士学位申請論文) 未公刊
- 大槻 邦敏 (1987) 「「は」と「が」のつかいわけ」『教育国語 91』むぎ書房

- 大槻 文彦 (1897) 『広日本文典』
- 岡村 昌夫 (1968) 「形容詞の活用の成立」『上代のことば』至文堂
- 奥田 靖雄 (1975) 「連用、終止、連体」『宮城教育大学国語国文 6』宮城教育大学  
(『日本語研究の方法』むぎ書房 所収)
- 奥田 靖雄 (1984) 「文のこと」『宮城教育大学国語国文 13、14』宮城教育大学  
(『ことばの研究序説』むぎ書房所収)
- 奥田 靖雄 (1988 a) 「述語の意味的なタイプ」(琉球大学講義プリント) 未公刊
- 奥田 靖雄 (1988 b) 「時間の表現 (1)」『教育国語 94』むぎ書房
- 奥田 靖雄 (1988 c) 「時間の表現 (2)」『教育国語 95』むぎ書房
- 奥田 靖雄 (2000) 「deixisのこと」(小原合宿プリント) 未公刊
- 奥津 敬一郎 (1983) 「変化動詞文における形容詞移動」『副用語の研究』明治書院
- 柏谷 嘉弘 (1973) 「『形容動詞』の成立と展開」『品詞別日本文法講座 4』明治書院
- 春日 和男 (1965) 「形容動詞」『講座現代語 6』明治書院
- 春日 和男 (1968) 『存在詞に関する研究』風間書房
- 春日 和男 (1973) 『形容詞の発生』『品詞別日本文法講座 4』明治書院
- 金田 章宏 (1996) 「感情・感覚における局面のとらえかた—八丈島三根方言を例に」  
『国文学解釈と鑑賞 61-1』至文堂
- 川端 善明 (1976) 「5用言」『岩波講座 日本語 6 文法 I』岩波書店
- 川端 善明 (1977) 「形容詞の活用」『国語国文 46-2』京都大学
- 川端 善明 (1983) 「副詞の条件—叙法の副詞組織から」『副用語の研究』明治書院
- 川端 善明 (1983) 「文の構造と種類—形容詞文」『日本語学 2-5』明治書院
- 川本 崇雄 (1977) 「日本語の形容詞活用の起源—特に南島語と対比して」  
『国語と国文学 54-8』東京大学
- 北原 保雄 (1967 a) 「形容詞のウ音便」『国語国文 36-8』京都大学
- 北原 保雄 (1967 b) 「『なり』の構造的意味」『国語学 68』武蔵野書院
- 北原 保雄 (1979) 「形容詞の語音構造」『中田祝夫博士功績記念 国語学論集』勉誠社
- 金水 敏 (1989) 「報告についての覚書」『日本語のモダリティ』くろしお出版
- 工藤 浩 (1983) 「程度副詞をめぐって」『副用語の研究』明治書院
- 工藤 浩 (1985) 「日本語の文の時間表現」『言語生活 403』筑摩書房
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテクスト—現代日本語の時間の表現』  
ひつじ書房
- 工藤真由美 (1998) 「非動的述語のテンス」『国文学解釈と鑑賞 63-1』至文堂

- 工藤 力男 (1973) 「上代形容詞語幹の用法について」『国語国文 42 - 7』京都大学
- 久野 暉 (1973) 『日本文法研究』大修館書店
- 慶野 正次 (1973) 「枕草子の形容詞」『解釈 19 - 12』
- 慶野 正次 (1974) 「形容詞一元論の再検討—『悪い』型形容詞の発生について」  
『神戸学院女子短大紀要 6』神戸学院女子短大
- 慶野 正次 (1976) 『形容詞の研究』(笠間叢書) 笠間書院
- 小池 清治 (2000) 「形容詞の語順—「安くておいしい店」と「おいしくて安い店」」  
『月刊言語 29 - 9』大修館書店
- 小島 俊夫 (1984) 「形容動詞とは何か」『研究資料日本文法 3』明治書院
- 小矢野哲夫 (1980) 「「に格」をとる形容詞文について」  
『日本語・日本文化 9』大阪外国語大学
- 小矢野哲夫 (1996) 「評価のモダリティ副詞の文章における出現条件—「幸い」と  
「せっかく」を例にして」『日本語・日本文化研究 6』大阪外国語大学
- 佐久間 鼎 (1966) 『現代日本語の表現と語法』恒星社厚生閣 (くろしお出版より再版)
- 桜井 茂治 (1965) 「形容詞の活用形の成立について—特にアクセント形態を中心として」『国学院雑誌 66 - 8』国学院
- 櫻井 光昭 (1984) 「形容詞の諸問題」『研究資料日本文法 3』明治書院
- 佐藤 里美 (1997) 「名詞述語文の意味的なタイプ—主語が人名詞の場合」  
『ことばの科学 8』むぎ書房
- 佐藤 里美 (2000) 「テクストにおける名詞述語文の機能—小説の地の文における  
特性表現と《説明》」(言語学研究会夏合宿プリント 未公刊)
- 島田 昌彦 (1973) 「国語における形容詞」『国語と国文学 50 - 8』東京大学
- 情報処理振興事業協会 (1990) 『計算機用日本語基本形容詞辞書 I P A L』  
情報処理振興事業協会技術センター
- 鈴木 泰 (1982) 「タリ活用形容動詞の通時的变化傾向とその要因」  
『武藏大学人文学会雑誌 13-4』武藏大学
- 鈴木 泰 (1983 a) 「漢語ナリ活用形容動詞の史的性格について」  
『副用語の研究』明治書院
- 鈴木 泰 (1983 b) 「中古における評価性の連用修飾について」『日本語学 2-3』  
明治書院
- 鈴木 康之 (1979) 「規定語と他の文の成分との移行関係」『言語の研究』むぎ書房
- 高瀬 匡雄 (1996) 「用言と動詞」『国文学 解釈と鑑賞 61-1』至文堂

- 高橋 太郎 (1975) 「文中にあらわれる所属関係の種々相」『国語学 103』武蔵野書院
- 高橋 太郎 (1984) 「名詞述語文における主語と述語の意味的な関係」  
『日本語学 9 - 12』明治書院
- 高橋 太郎 (1985) 『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』  
秀英出版 (国立国語研究所報告 82)
- 高橋 太郎 (1986) 「形容詞のテンスについて」『論集 日本語研究 (一) 現代編』  
明治書院 (高橋 (1994) 『動詞の研究』 所収)
- 高橋 太郎 (1987) 「動詞・その 4」『教育国語 91』むぎ書房
- 高橋 太郎 (1996) 「品詞の構成」『国文学 解釈と鑑賞 61-1』至文堂
- 高橋 太郎 (1998) 「動詞からみた形容詞」『月刊言語 27 - 3』大修館書店
- 田野村忠温 (1990) 「文における判断をめぐって」『アジアの言語と一般言語学』  
大修館書店
- 塚原 鉄雄 (1964) 「『暖かい』と『暖かだ』」『口語文法講座 3』明治書院
- 塚原 鉄雄 (1970) 「形容動詞と体言および副詞」『月刊文法 2-6』明治書院
- 築島 裕 (1969) 『平安時代語新論』東京大学出版会
- 寺村 秀夫 (1972) 「感情表現のシンタクス—「高次の文」における分析の一例」  
『月刊言語 2-2』大修館書店 (『寺村秀夫論文集 II』所収)
- 寺村 秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版
- 東条 義門 (1836) 『山口栄』(勉誠文庫所収)
- 時枝 誠記 (1950) 『日本文法 口語篇』岩波書店
- 中道 知子 (1983) 「形容詞の諸特性」  
『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究 5 計算機用 レキシコンのために』情報処理振興事業協会
- 中村 捷 (1976) 『形容詞』(現代の英文法 7) 研究社 1977 市河賞
- 永野 賢 (1965 a) 「形容詞」『口語文法講座 6 用語解説編』明治書院
- 永野 賢 (1965 b) 「形容動詞」『口語文法講座 6 用語解説編』明治書院
- 西尾 寅弥 (1972) 『形容詞の意味・用法の記述的研究』  
(国立国語研究所報告 44)秀英出版
- 西山 佑司 (1989) 「『象は鼻が長い』構文について」  
『慶應義塾大学言語文化研究所紀要 21』慶應大学
- 仁田 義雄 (1975) 「形容詞の結合価」『文芸研究 79』東北大学文学部
- 仁田 義雄 (1977) 「形容詞の裝定用法—「多イ」をめぐって」

- 『文芸研究 85』東北大学文学部
- 仁田 義雄 (1990) 「日本語の形容詞文をめぐって」  
『ことばの饗宴 篠壽雄教授還暦記念論集』くろしお出版
- 仁田 義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 仁田 義雄 (1998) 「日本語文法における形容詞」『月刊言語 27-3』大修館書店
- 根来 司 (1973) 「形容詞とは何か」『品詞別日本文法講座 4』明治書院
- 野村真木夫 (1979) 「現代日本語感覚文の研究—基本構造と表現性の拡大」  
『国語国文学研究 61』北海道大学国文学会
- 橋本 進吉 (1948) 『国語法研究』岩波書店
- 橋本 進吉 (1959) 『国文法体系論』岩波書店
- 橋本三奈子 青山 文啓 (1992) 「形容詞の三つの用法—終止、連体、連用」  
『計量国語学 18-5』計量国語学会
- 蜂矢 真郷 (1984) 「重複形容詞と重複形容動詞」『同志社国文 24』同志社大学
- 浜田 敦 (1952) 「形容詞の仮定法」『人文研究 3-6』大阪市立大学文学会
- 林 和比古 (1958) 「形容動詞」『続日本文法講座 1』明治書院
- 樋口 文彦 (1986) 「形容詞からの派生名詞」『教育国語 84』むぎ書房
- 樋口 文彦 (1989) 「評価的な文」『ことばの科学 3』むぎ書房
- 樋口 文彦 (1994) 「使用における形容詞の<義務性／偶発性>」  
『教育国語 2-14』むぎ書房
- 樋口 文彦 (1995 a) 「発話の中での形容詞の機能」『教育国語 2-17』むぎ書房
- 樋口 文彦 (1995 b) 「形容詞について」『教育国語 2-18』むぎ書房
- 樋口 文彦 (1996) 「形容詞の分類—状態形容詞と質形容詞」『ことばの科学 7』  
むぎ書房
- 樋口 文彦 (1999) 「認識、評価、感情」(言語学研究会夏合宿プリント 未公刊)
- 樋口 文彦 (2000) 「形容詞の評価的な意味」(言語学研究会夏合宿プリント 未公刊)
- 飛田 良文 (1998) 「国語辞書における形容詞の意味記述」  
『月刊言語 27-3』大修館書店
- 飛田 良文 浅田 秀子 (1991) 『現代形容詞用法辞典』東京堂出版
- 日向 茂男 (1984) 「外国語の形容詞、ポルトガル語の場合を中心にして」  
『研究資料日本文法 3』明治書院
- 日野 資純 (1984) 「方言の形容詞」『研究資料日本文法 3』明治書院

- 富士谷成章（1773）『あゆひ抄』（勉誠社文庫所収）
- 藤原 智子（1998）「難易文に関する一考察—「やすい／にくい」の意味用法をめぐって」  
『日本語・日本文化6』大阪外国語大学
- 細川 英雄（1985）「現代日本語の温度形容詞について」『信州大学教育学部紀要 56』  
信州大学
- 細川 英雄（1986）「風は寒いか冷たいか—温度形容詞の用法について」  
『国語学研究と資料 10』
- 細川 英雄（1988）「現代日本語形容詞語彙一覧稿」  
『金沢大学教養部論集 人文科学篇 24-2』金沢大学
- 細川 英雄（1989）「現代日本語の形容詞分類について」『国語学 158』武蔵野書院
- 細川 英雄（1990）「感情形容詞の連用修飾用法について」『近代語研究 8』武蔵野書院
- 町田 健（1998）「比較級・最上級の意味論」『月刊言語 27-3』大修館書店
- 松下大三郎（1928）『改撰標準日本文法』（勉誠社再出版）
- 松本 克己（1998）「形容詞の品詞的タイプとその地理的分布」  
『月刊言語 27-3』大修館書店
- まつもと ひろたけ（1979）「に格の名詞と形容詞のくみあわせ—連語の記述とその周辺」『言語の研究』むぎ書房
- 三上 章（1960）『象は鼻が長い』（くろしお出版 再出版）
- 水谷 静夫（1951）「形容動詞弁」『国語と国文学 28-6』東京大学
- 水谷 静夫（1952）「形容動詞と謂うもの」『解釈と鑑賞 17-12』至文堂
- 宮地 裕（1978）「擬音語・擬態語の形態論小考」『国語学 115』武蔵野書院
- 宮島 達夫（1972）「動詞の意味・用法の記述的研究」秀英出版  
（国立国語研究所報告 43）
- 宮島 達夫（1983）「情態副詞と陳述」『副用語の研究』明治書院
- 宮島 達夫（1994）「形容詞の語形と用法」『計量国語学 18-5』  
（『語彙論研究』むぎ書房 所収）
- 宮田和一郎（1973）「形容詞の未然形と語法的研究」『解釈 19-12』
- 村木新次郎（1996）「意味と品詞分類」『国文学 解釈と鑑賞 61-1』至文堂
- 村木新次郎（1998）「名詞と形容詞の境界」『月刊言語 27-3』大修館書店
- 森田 良行（1968）「動作・状態を表すいい方」『講座日本語教育 4』
- 森田 良行（1981）「「悲しく思う」か「悲しいと思う」か」『日本語の発想』冬樹社
- 森田 良行（1988）「日本語の形容詞について」『講座日本語教育 19』

- 八木 孝夫 (1987) 『程度表現と比較構造』(新英文法選書 7) 大修館書店
- 矢澤 真人 (1993) 「いわゆる「形容詞移動」について」  
『小松英雄博士退官記念 日本語学論集』三省堂
- 矢澤 真人 (1998) 「日本語の感情・感覚形容詞」『月刊言語 27-3』大修館書店
- 山岡 政紀 (1999) 「属性動詞の語彙と文法的特徴」『国語学 197』武蔵野書院
- 山岡 政紀 (2000) 『日本語の述語と文機能』(日本語研究叢書 13) くろしお出版
- 山口 巖 (1996) 「言語類型論と品詞—形容詞のあつかいを中心に」  
『国文学解釈と鑑賞 61-1』至文堂
- 山口 仲美 (1982) 「感覚・感情語彙の歴史」『講座日本語学 四 語彙史』明治書院
- 山口 佳紀 (1970) 「言語の認識の交渉に関する一試論—語形成史の展開をめぐって」  
『国語と国文学 47-10』東京大学
- 山口 佳紀 (1973) 「形容詞活用の成立」『国語と国文学 50-9』東京大学
- 山口 佳紀 (1981 a) 「形容動詞の成立」『国語と国文学 58-5』東京大学
- 山口 佳紀 (1981 b) 「タリ型形容動詞の成立」『国語国文 50-2』京都大学
- 山口 佳紀 (1984) 「形容詞の活用」『研究資料日本文法 3』明治書院
- 山口 佳紀 (1985) 『古代日本語の文法の成立の研究』明治書院
- 山崎 馨 (1972) 「続日本紀宣命に於ける形容詞について」  
『大阪大学医療技術短大研究紀要 人文科学編 4』大阪大学
- 山崎 馨 (1973) 「形容詞の発達」『品詞別日本文法講座 4』明治書院
- 山崎 馨 (1974) 「日本語の形容詞の起源について」『美夫君志 17』愛知教育大学
- 山崎 馨 (1984) 「形容詞とは何か」『研究資料日本文法 3』明治書院
- 山田 孝雄 (1908) 『日本文法論』宝文館
- 山本 俊英 (1955) 「形容詞ク活用シク活用の意味上の相違について」『国語学 23』武蔵野書院
- 吉沢 義則 (1932) 「所謂形容動詞に就いて」『国語国文 2-1』京都大学
- ロドリゲス・ジョアン (1752) 『日本大文典』三省堂 (土居忠生訳)
- 渡辺 実 (1971) 『国語構文論』塙書房